



あやいと

第五号



# あやいと

第5号



北海学園大学

人文学部I部 2025年度田中綾ゼミ

## 刊行の辞

『あやいと』という名称は、先生のお名前に含まれている「綾糸」に由来しており、「美しい色とりどりの糸」や「あやとりに使う糸」「機織り機の掛け糸」という意味を持つています。

## 『あやいと』創刊号より

この度、二〇二五年度田中綾ゼミより、文学誌『あやいと』第五号を刊行いたしました。ゼミ誌としては第十五号となります。無事に皆様の元へお届けすることができたことを大変嬉しく思います。

田中綾ゼミでは十二人の学生が三年次から創作を行なつており、互いに作品を読み合いながら表現力の向上に努めてきました。いずれの作品も、作者一人ひとりの才能と努力の結晶であり、その人にしか描けない世界へと通じる扉です。また、それぞれの物語の後にあとがきを書かせていただきました。そちらも本編と併せてお楽しみいただければ幸いです。

言葉それ 자체は会話中に空気を震わすだけであり、言葉の記された書物もやがては朽ちていきます。しかし、言葉というものを吟味して人文学を学んできた私たちは、言葉が時代や地域を越えて人間の心に働きかけ、受け取つた人の人生を豊かなものにすると信じています。十二色の糸で織りなされた『あやいと』が、皆様の疲れた日には休息の毛布となり、雨の日には一歩を踏み出す勇気のレインコートとなることができたなら、作者一同、これに勝る喜びはありません。

最後となりますが、本誌刊行に際してお力添えいただいた皆様、そして『あやいと』を手に取つてくださつた皆様に心より感謝申し上げます。

北海学園大学人文学部一部田中綾ゼミ  
『あやいと』第五号 ゼミ長兼編集長  
四年 寺田望

## 『あやいと』第五号 目次

刊行の辞  
目次

龍鳳

理想の恋人

匿名の人生

ピーターパンが来ないから

フレンチトーストをつくる

100万円のマジック

シンメトリー

愛すべき非日常

ウオトウカを一箱

なりやまず

旭

中村鈴蘭

永田志生

七輝

石橋わたる

味噌

シロガネ

相良茂

幾里

253 221 189 155 125 97

67 35 7

4 2

## 目次

「閲覧注意」ロイコクロリディウム  
プログラム・ブレイブ  
私の幸せだとしても

湖浜微  
菱川立花  
小鳩

編集後記

ごあいさつ

380 376 343 309 281

各作品の後に、作者によるあとがきを掲載しています。あわせてお楽しみください。



龍鳳

旭

トップアイドルが死んだ。

私の双子の片割れであるユウキが死んだのだ。全員に愛された国民的アイドルは誰も知らない暗い部屋で一人で死んだのだ。新聞の一面にユウキの顔と名前が大きく載り、テレビでは一日中ずっとユウキのことが報道される。独りで死んでもユウキの名前はあいかわらず輝いていた。双子なはずの私の名前はユウキの隣ですらない隅つこの方にひつそりと載せられていた。

国民的アイドルSTARBITのセンターであるカネダユウキは私の双子の片割れである。男女の双子というと存在自体が珍しく大体が似ていないことが多いが私たちはとてもよく似ていた。幼少期はどちらも女の子にも男子にも見えるような中性的な姿をしていたためよく間違えられた。大人になつた現在はもちろん性別による体格などの差はあるが顔はそっくりだつた。ユウキはあるときオーディションを受けアイドルとなつてから着実にトップアイドルへの道を上つていつた。ユウキは漫画の主人公の様に明るく裏表

のない性格だった。その性格から周りとの関係も芸能界と聞いて想像するようなどろどろとしたものは一つもなく、家族ともメンバーとも業界の人ともファンですらない人とまで良好な関係を築いていた世にも珍しい完璧なアイドルである。

一方、双子のもう一人である私、カネダカエデはユウキの人生からすればいたつて普通の道を歩んでいた。普通に進学しまあまあ大手の会社に勤め、真面目に生きたことで昇進もしていた。ユウキとは比べられないが普通に幸せと言える人生を歩んでいる。顔は隠せないからユウキと家族であることはすぐにばれているがそれが大きく生活に支障をきたすことも特になかつた。

とても普通な人生を歩んでいたところユウキが突然死んだ。

ユウキは普通よりも数ランクも上の漫画のような幸せを手に入れているのになぜ死んだのだろうか。

「カネダユウキ。二十五歳。死因は窒息死です。このアロマキヤンドルに揮発性のある毒が仕込まれていたようです。ユウキの手元にはファンからの手紙が複数あつたことからこの部屋でファンからの手紙を読んでいる間に何者かに仕掛けられたアロマキヤンドルの毒によつて意識が無くなり最終的に亡くなつたとみられています」

「コンサート終わりだつたようだがマネージャーや他のメンバーが様子を見ることは無かつたのか？」

「一度マネージャーとメンバーのチアキさんが様子を見に行こうとしたようですがその時には鍵がかかっていたため引き返したようです。また、メンバーの家族が来ておりユウキさんの家族のうち双子の……あのカネダカエデさんが本人と接触しているようです」

「容疑者はその三人ということか」

「いえ、カエデさんは一度被害者のユウキさんと二人で話していました。話

している姿も目撃されていましたしその後家族とほぼ一緒に過ごしていたようで大勢の人がいる場所で目撃されています。何せ被害者のユウキさんと顔が本当にそつくりなためとても目立つようです。証言もとれているため犯人ではないかと

「確かに一人で動いていたとしても顔が有名アイドルとそつくりであればとても目立つだろうな」

「一度トイレに向かっていますがトイレでいない間には被害者はまだ部屋ではなくステージ裏で目撃されています。メンバーのリクさんは会話もしていました。カエデさんは容疑者から外してよいでしよう」

「ファンは完全に帰つて入れない状況だからマネージャー、メンバー、スタッフの誰かの可能性がとても高いだろう」

「メンバーに関してはアリバイがあります。全員控え室にいるか三名ほどで常に行動。トイレまで一緒にいるそうです」

「なかなか珍しい仲の良いアイドルだな。大体は裏では不仲……なんてことばかりなのに」

「基本的にステージ外で一人で行動する様子はあまり見られません。大体が集団で活動している姿が防犯カメラにも写っているためメンバーは除外しても良いでしょう」

## 3

警察に事情聴取というものをされた。ユウキのことについて聞かれているにもかかわらずどこか自分に全く関係ない他人について聞かれているようだつた。私はまだユウキが死んだことを実感していない。街に出てもユウキは映つているしテレビにも新聞にもいつも名前と写真が載つていたからだ。忘れるどころかまだ存在しているような感覚になつた。

STARBITのメンバーはこれまで芸能界では珍しく全員黒い噂のまつたくないテレビの姿と裏の姿が一緒のアイドルだつた。そのため信じられないほど仲が良くまるでアイドルを題材としたアニメを見ているかのように見

える。

遠慮のない良好な関係はとても羨ましいものだつた。

4

「メンバーへの疑いは晴れましたね。家族も全員シロだと思われます」「あと残つて いるのはマネージャーと舞台スタッフか」

「ユウキさんはあんなに完璧だつたのに、なぜ殺されたのでしょうか」

「完璧が羨ましかつたんじやないか？ 誰にでも優しく美しく全てを手に入れたアイドルなんて誰もが羨むだろう。羨ましいものを見るとどんどん自分が下に見えてくる。ないものねだりは激しくなつて、最終的に完璧を消せばいいという決断にたどり着く」

「完璧すぎるのも良くないです。俺は欠点だらけだから縁のない話だ！」

旭

私たちの家族はいつも完璧と言えた。母は優しく天然であったが料理が上手でたまに怒らせると何よりも怖かった。父は母の尻に敷かれているが眞面目に働き上の役職にまでついて私たちにやりたいことを何でもやらしてくれていた。双子として生まれた私たちはいつも同じだった。行く場所も見た目もやることも。成長するにつれそうはいかなくなりユウキはアイドルという夢をかなえるために家族のもとを離れたがそれでも双子であることは変わらないと思つていた。

国民的アイドルという立場はどんなに頻繁に会つても伝説の中の人のようなどこか現実的じやない雰囲気を持つ。ユウキはアイドルになつたことでいつも一緒の双子である私にさえもそう思わせるようなアイドルになつた。どんなに会う機会を作つてくれても以前と違い他人と話しているように感じられた。

私たちはいつも同じだったのに。

「マネージャーが犯人だとは」

「部屋で死んだとされる時間の前にアリバイがないのは一人別部屋で仕事をしていたというマネージャーだけだ。男性の力が必要な重さの段ボールを部屋の前からよけている映像も見つかっている」

「マネージャーが犯人でほぼ決まりでしよう」

〈カネダユウキが生きている〉

SNSは直ちにそんな言葉で埋め尽くされ歓喜で満ち溢れる。

発表されたオーディションのプロフィールには国民が忘れられない完璧なアイドルであるカネダユウキの顔があつた。

正確にはカネダカエデであつたが。

性別は違つても全員が愛した顔であるカネダユウキの顔を持つカネダカエデはすぐさま多くの人に愛された。

年齢が少し周りの参加者よりも高かつたがそんなことは誰も気にしなかつた。性別も違ひグループの形も活動場所もメンバーカラーでさえ違つたがファンにとつては伝説のアイドル、カネダユウキの復活だつた。

何より悲劇的な事件で双子の片割れを無くし残されたもう片方が無念を晴らすようにアイドルになるというストーリーは誰もが興味をもつた。アイドルに関心がなかつた人もカネダカエデを応援した。

カネダカエデはそれに答えるように今まで一般人であつたと思えないような完璧なアイドル姿を見せた。

事件はもうほぼマネージャーが犯人というところで片付きそだつた。カ

ネダカエデはテレビのインタビューにまつすぐ前を向いて答えた。

「私のきょうだいであり国民的アイドルのカネダユウキは一年前悲しい事件によつて亡くなりました。いつもユウキはそばにいましたが突然いなくなり

ました。国民的アイドルと一般人という立場になつても私たちの関係性は全く変わらずユウキは大事なファンの方に会う忙しいスケジュールの中でも家族との時間を作りました。私がそんな完璧でもう二度と会えないユウキの代わりにはなれないと思います。同じ顔は持っていますがユウキのような素晴らしい人間はもう存在しません。ただ私がユウキのアイドルとしての夢の続きをどうしても叶えたいと思つたのです」

国民はカネダカエデのスピーチに釘付けだつた。

「ユウキさんは最近このアロマキヤンドルを気に入つていたようでその話を聞いたファンたちによる差し入れのアロマキヤンドルに毒入りのものが混じつていたようです。また、防犯カメラには正体不明ですが体格的に二十九三十代の男性の姿が映っています。メンバー、家族にはアリバイがあるため

マネージャーの犯行だと思われますが本人は否認しています。」

「マネージャーが容疑者なのはわかつたが動機はあるのだろうか？このグループは誰に聞いてもグループ間や会社、マネージャーとのトラブルについて全く悪い話を聞かない。今一番国民的アイドルとして輝いていて多くの国民から信頼されているこの時期に問題について全く聞かないグループを壊すようなことをするだろうか？」

「でもこの犯行を実現可能なのは今のところ彼しかいません」

幼少期の私は何をするにもユウキの隣にいた。幼稚園の頃なんか指定のスマッシュにお母さんが付けてくれたワッペンまで一緒で、同じ顔、同じ身長、同じ声、同じ性格の私たちはよくみんなを惑わせた。自分がもう一人いることが当たり前だった私は、もう一人の自分であるユウキが常に自分と同じで

あることで自分が正解であると確認できている気がしてひどく安心させられていた。

小学三年生の時、正月に会った親戚のおじさんが私たちにぬいぐるみをプレゼントしてくれた。私は淡いピンクのウサギのぬいぐるみ、ユウキには茶色のクマのぬいぐるみを渡していた。ユウキはとても喜んでクマのぬいぐるみにたくさん話しかけていたが私は謎の嫌悪感を抱いていた。ユウキは私と違うものを持っている。その嫌悪感を意識した瞬間から生活の中での小さなことでユウキとの違いを感じた。そこからどんどん私たちは「違うもの」になつていつた。男女の違いもはつきりと表れだし一緒だつた声も全然違うものになつた。ユウキはどんどん私とは違う方向へ歩みだしてアイドルというかけ離れた存在にいつの間にかなつてしまつた。顔はそつくりだと言われていたけどその顔でさえそこにいる犬の方が私と似ているのではないだろうかと思つてしまふほど全く別の物に見えた。ずっと私と同じだつたもう一人の私であるユウキは全然違う人間へと変貌し私の幼少期から抱いていた安定感や安心感は消え去つてしまつていた。

全然違うものとなってしまったユウキ。とうとう違うどころかこの世に存在しなくなってしまった。私はいまだにユウキという存在がもう無いことが実感できなかつた。

ユウキは自分と全然違うものになつていく私に対してもどのように感じていたのだろう。あんなに一緒にいて、あんなに同じことをしていたのに私はユウキが生きているときも死んでからもなおユウキの考えていることが一つも想像できなかつた。

あたりまえの存在であつたユウキがいない世界になつてしまつた。

「防犯カメラに映る男性の姿は一七五センチメートル程度で結構な高身長に見えます」

「この身長であるならば部屋のドアの上に密室の仕掛けを取り付けることも

すばやく容易だろう。疑いのある女性は高くとも一六五センチメートルであるのでやはり犯人は男性でしよう」

「この男性。この最後の部分ほんの少しだけ笑っているように見えるんですよね。その笑った口角というか⋮口元が被害者のユウキさんに似てるかもなって」

「そうか？ 俺は本物の双子の片割れに会つてゐるから全然違う人に見えるぞ」「まあ、気のせいでしょう」

今日はSTARBITが結成十周年の日だ。そしてユウキが生きていれば二十五歳の誕生日。ユウキが死んでもなおSTARBITの赤色担当センターのカネダユウキは確かに存在していた。

「十周年記念の日つてわがまま言つてもいい？」

「地元の思い出のホールでイベントやりたいんだ」

ユウキが居なくなつてもメンバーは全員ユウキのその要望を叶えようとした。ファンは国民全員と言えるほどいたがユウキの意思を尊重し十年前グループが始まった時のようなキヤパシティのイベントとなつた。当然ファンは大騒ぎだつたが大層な問題なくイベント当日を迎えた。

地元のホールに入る最大限の人数約二千人。全員が熱狂していた。ステージ裏からそれを見るとあの人は本当に愛されていたんだと実感する。最後の曲になつた時私はポジションについているメンバーの間を通り、あけてあつたカネダユウキの位置に立つた。自分の所属するグループの青い衣装を着ていたが、メンバーカラーレッドのセンター・カネダユウキとしてステージに立つ。

会場がざわざわとどよめきだす。

メンバーもスタッフも会場のファンたちも全員私を見ていた。

「音楽を流してくれ」

メンバーも会場もこの言葉でユウキの代わりに双子である私が踊るのだと

理解した。

音楽が流れ始める。

私は小さい頃からユウキとずっと一緒にやることも身に付けているものも一緒にだつた。そのはずなのにいつからここまで差異が生まれたのだろう。ユウキと同じになろうとすればするほどユウキは上へと足早に進んでいき追いつけなくなつてしまつた。だからユウキの時を止めれば、自分に時間さえあればまた追いついてユウキと同じ場所に立てると思った。世間は殺害動機は嫉妬だと言うけれどそんなんじやない。ただ私は同じ位置にいたいだけだ。

結局ユウキの時間を止めてもユウキの名前は出てきてメンバーもファンも全国民もユウキが生きているかのようにその名前を出し続けていた。全然時間が止まらない。

なら全部なかつたことにすればいい。

私とユウキが別物になる原因になつたグループもファンもステージも。

私は腕を振り下ろして振り上げて全力でステージで動いているうちに衣装が自分のメンバーカラーの青ではなくユウキのメンバーカラーの赤になつて

いることに気が付いた。

ユウキがみんなに忘れられれば私だつて追いつくことが出来る。  
汗が流れる。

私が指を指すとその先は真つ赤になつた。

会場全体が俺とユウキの色になつた。

ユウキと同じぐらいみんな俺に注目している。

やつとユウキと同じ位置にいる。

「令和最悪の惨殺事件とされる「S T A R B I T 事件」から三十年。なぜあ  
のような凄惨な事件が起きてしまったのか当時の状況を振り返つていきま  
しょう。この事件を起こした犯人は金田楓、当時二十五歳。彼はS T A R B  
I Tのセンター金田優紀の双子の弟でした。彼は二〇二五年七月五日実の姉

である金田優紀さんをイベントの使われていない楽屋で殺害。巧みに証拠を隠滅し最初はマネージャーの唐澤が容疑者として検挙され彼は疑われることはありませんでした。それどころかオーディションを受け、男性アイドルグループとしてデビューした際、番組では悲劇の主人公として取り上げられています。まずは姉の金田優紀さん殺害の流れについて解説いたします』

『金田楓が犯行に利用したのは金田優紀さんとそつくりな『顔』です。優紀さんと金田楓は双子で男女ではありましたが顔が慣れていても間違える時があるほどそつくりでした。もちろん男女間の体格差はあるため実際は違う人であるという印象を受けます。しかし、この体格の特徴を曖昧にした場合どうでしょうか。金田楓はまず金田優紀さんが気に入っている店のアロマキャンドルがファンからたくさんプレゼントとして送られてくることを利用し毒が含まれているキャンドルを紛れさせます。『これさつき会場でファンの方に姉に渡してほしいと頼まれました』と伝え自然に紛れさせたようです。金田優紀さんはライブ終わりにファンレターを読む習慣がいつもあつたようです。独りでじっくり読むことを好む優紀さんの習慣を利用し空き室へ誘導。

この時はマネージャーや家族も一緒にいたようです。さつきファンの人から預かつたということを金田優希さんにも伝え自然にそのキャンドルを使用するように誘導。独り部屋にこもつた優紀さんはファンレターをじっくりと読む長い時間の中で静かに亡くなつたようです」

「途中で彼女が部屋を出ることは完全になかつたのでしょうか？」

「それについてはドアに簡単な細工がされているのが発見されました。一度防犯カメラに部屋付近に男性が近づくのが目撃されています。この男性の姿が映つた後も優紀さんの姿が目撃されたという証言があつたため金田楓は犯行を実行不可能として犯人から除外されていましたが、実はこの時目撃された金田優紀さんの姿は金田楓の変装でした。金田優紀の死亡時刻を彼女とそつくりの自分の顔を利用するごまかしたのです。まずは体格を大きめのパークーで隠す。少し前かがみになつたり、しゃがんだ体勢を見せるごとで身長もごまかし、声は生成AIを利用して作成した音声でした。目撃情報はいずれも至近距離ではなく物陰や少し離れた場所であつたため細かい違いには気づかれなかつたようです」

「…：金田楓はこの綿密な金田優紀さん殺害計画から見るとかなり頭腦明晰な人物だつたようですね」

「はい、実際金田楓は金田優紀同様に完璧な人間であつたと言われています。かかわつたことのある方は全員金田楓のことを笑顔が素敵でアイドルのような好青年だつたため事件を起こしたことが信じられないとあつけにとられた方が多いです」

「そしてこの事件の一年後二〇二六年八月九日。金田優紀さんが望んでいた日にSTARBITは結成十周年イベントと優紀さんの誕生祭を実施。場所はSTARBITの結成場所であり優紀さんの地元にあるホテルでした。実施されたイベントの最後に披露されたデビュー曲の最中、金田楓が乱入。メンバー五人をステージ上で刺殺し会場に仕掛けた爆弾を爆破。死傷者千五百人を超える大事件を起こしました」

「へーこの曲って金田楓の事件のグループのだつたんだ。お母さん知つてるの？」

「もちろん！ 私が高校生の時は知らない人はいなかつたのよ STARBI  
T。 それはもう衝撃的な事件だつた」

「金田楓の名前とかアイドルが殺人みたいなのは知つてたけど姉のこととか  
グループまでちやんと知らないわ」  
「嫌だ、ジエネレーションギャップ」

旭

## あとがき

アイドルという職業はあまりにも「イメージ」というものに左右されいる。アイドルはみんなの憧れであり、容姿も中身もやつていていることもどこか自分とは現実離れしたものでなくてはいけない「離れた輝く存在」というイメージ。そのイメージが少しでも崩された瞬間にアイドルはある一定数の人にとってアイドルではなくなる。また、一度アイドルが噂されて「悪いイメージ」が付いた瞬間それが本当であろうと嘘であろうと濃く残り続けて誰かにとつては「悪いイメージ」が真っ先に出てきてしまう存在になる。この「悪いイメージ」はアイドルを現実離れした存在から一気に薄暗い現実を生きる人間という存在に引き戻してしまう。特に現代は情報が一瞬で拡散されるうえに一生残り続けるため「イメージ」が重要なアイドルたちは歌つたり踊つたり以外のことに精神を費やしている。

人間が人生を過ごす間で一番悪いイメージがつくもの。「殺人」。人のこれから的时间を勝手に奪うとともにその人に関わった人の時間まで奪う許され

ない行為である。アイドルの現実離れしたきらびやかなどこか架空のようないmageはあまりにも圧倒的でこの裏に「殺人」という最悪のimageを結び付ける人はめったにいない。アイドルは夢を与える職業である。そのためアイドルのimageは常に完璧でなければいけない。人間の完璧の中に最悪である「殺人」は絶対にない。想像されない。でも、もし、そんな完璧を保っているきらびやかな伝説上の人物のような国民的なアイドルという存在が「殺人」と結びついたら世の中はどんな反応をするのだろうか。

さて、今回の小説の登場人物のような双子という存在にはこれまで「image」が強くかかわつてくることがある。中国では今回の物語の登場人物のような男女の双子は龍鳳胎と呼ばれとても縁起が良いものとされてきた。逆に他の国では双子という存在自体が縁起の悪いものとして忌み嫌われ幼いうちに排除された双子もいるらしい。文化によつて双子に対する「image」は全く違ひ、そのimageによつて双子は人生を左右されることもある。

また、似ているからこそ比べられ「image」をつけられやすいのも双子

である。こっちの方が優しいとかこっちの方がかっこいいだとかこっちの方が優れているだとか。似ていてるからこそ違う部分は浮き彫りになるだろう。「アイドル」でも「双子」でもない私が書いたこの小説に出てくる双子もアイドルも私によつて作り出された何となくの「イメージ」である。

ちなみにこの小説を書いている現在、絶賛アイドルのオーディション番組を視聴中で、くるくると変わつていく練習生への世間の評価に改めて「イメージ」の影響力の絶大きさを実感させられている。

あとがき



理想の恋人

中村 鈴蘭

私には恋人がいる。二十歳のときから付き合つてもうすぐ五年。今までたくさん喧嘩してきた。一方的に私が怒ることが多かつたけれど。待ち合わせに一時間半遅刻してきたときもあつたし、部屋の掃除が出来なさすぎて大激怒したこともあつた。でも、嘘が付けない彼は疑われるようなこと、ましてや浮気とかそんなものとは本当に無縁だつた。彼とは同じ大学で社会人になつてからも順調に交際を続けている。「社会人になつたら環境も変わるし、どうなるかわからないよ」と、もつと直接的に言うなら、別れてもおかしくないと友人に通告されたが互いに忙しすぎるがあまり、仕事終わりはほとんど予定も入れずすぐ帰宅。同棲はしていないが週に数回は泊まりに行つたり来たりという感じ。そんないかがわしいことは何も起こらなかつた。明るくて優しくて友達も多い彼は、いつだつて私の自慢の彼氏。本当に大切な、私の大好きな恋人だ。……そう思つていたのに。

\*

「美桜つてもうちよつとで付き合つて五年だよね？」  
「うん、もう五年だつて。あつという間だよ」

「いいなあ。大樹くんいい子だもんね」

「でも最近会えてないんだよね。向こう残業めっちゃ入つてて」

「そうなの？ でも毎週泊まりに行つてるんでしょ」

「それが最近行けてなくて。忙しそうだし、邪魔かな……みたいな」

「美桜って昔からそんな感じだよねー。なんか変なところで遠慮するつていうかさ。大樹くんだって顔見たいと思うよ」

「そうかなあ、そうだといいけど」

高校の時の同級生である穂香と偶然同じ会社に就職した私は、休憩時間が合うときはこうやつて一緒にランチをとりながら近況報告をしている。

「穂香最近お弁当だよね、自炊頑張ってるんだ？」

「あ、これ？ 実は彼氏できたんだ」

「え！ いつから？ どんな人？ きつかけは？ 何歳？ イケメン？」

「多い多い！ ほんと付き合つたの先週で、もうほんつとかっこいいし。ハーフっぽい顔でさ。私が料理苦手なぶん作ってくれるし。歳はね、三個上でもう年上の余裕を感じまくつてる！ ほんと、理想の恋人なんだよね」

「年上、料理上手、ハーフ系って高校生のときから言つてた穂香の理想まんまぢやない？ そんな人と付き合えるとか最高すぎるね」

「……そうだね、ほんとに理想つて感じ」

穂香は手作りのお弁当を愛おしそうに見つめながらそう言つた。穂香は高校生のときから理想のタイプを貫き通していた。そしてこの理想に見合う男子がそんなに簡単に見つかるはずもなく。だからこそ穂香に彼氏ができて自分がことのよううれしい。

「なんか穂香の話聞いてたら大樹に会いたくなつてきた。今日家行つちやおうかな」

「いいじやんいいじやん！ ケーキとか買つてつちやいなよ！」

「今日何の日でもないのに？」

「そんなの関係ないよ！ 久しぶり元気だつたかな記念日！」

「なにそれ」

そんな穂香の言葉に背中を押され、私はケーキを買って帰ることを決めた。合鍵も持つてるし、サプライズで大樹の好きなビーフシチューでも作つて

待つてようかな。大樹の太陽のような笑顔を想像しながら、私は午後の仕事に取り掛かつた。

\*

定時に退勤した私は、お気に入りの黒のワンピースに着替えて、少しお高めな苺のタルトを買って、ビーフシチューの材料も買って大樹が住んでいるマンションの扉を開けた。しばらく来ていなかつたが相変わらず部屋は整理整頓されている。キッチンに行き冷蔵庫を開けると、中はほとんど空だつた。外食が多いのかな。忙しかつたら自炊する気力もないよね。冷蔵庫にタルトを入れて、さつそくビーフシチューを作ろうと準備していた。そういえば前に置いて帰つた私のエプロンが部屋のどこかにあるはずだと思い、手当たり次第探す。ここ一か月は連絡は取るもののが会つてはいなかつた。きっとエプロンは洗濯してクローゼットにかけておいたはず。私はクローゼットを開いて、エプロンを発見する。その隣には大樹のスーツがいくつかハンガーにかかつっていた。よくみるとその中の一着に違和感を覚えた。ポケットにふくらみがある。私はなぜか冷や汗をかいた。こういうときの女の勘は嫌というほ

どあたる。まだポケットの中を見ていないのに何が入っているかわかるような気がする。でも今まで一度も女の影を見たことがない。約五年間付き合つていて一度も。付き合つてから異性と二人で飲みにも行かず、複数の中に異性がいたら必ずどんな関係かを伝え、終電で帰るような人だ。今まで数えきれないほど喧嘩しても、私が怒つて口を利かなくなるとメソメソしながら謝つてくるような人だ。このふくらみが、ハンカチやティッシュではないことはわかる。もしかしたら、忙しさによるストレスで煙草を吸うようになつたのかもしれない。きっとそうだ。私は大樹のことを信じてる。そして、ポケットに手を入れた。

「嘘……」

ハイブランドの真っ赤な口紅が入つていた。しかもケースにローマ字で名前が刻印されている。

「め、ぐ、み」

そこには確実に「めぐみ」と刻印されていた。大樹には姉や妹はいない。母親の名前も「めぐみ」ではない。どうしようどうしよう。私は頭が真っ白

になつた。

「え、美桜？」

思考がショートしていたからか、大樹が玄関の鍵を開けたことすらも気付かなかつたらしい。

「大樹、これ何」

私は泣きたい気持ちを抑えて、大樹の目の前に口紅を突き出した。きつと私はまだ期待している。この口紅には何か理由があるはず。

「えつ……口紅……えつと」

「何、ねえこれスーツのポケットに入つてたよ」

「え、なんでだろ……」

「なんでだろうつて何……しらばつくれないでよ。これ女のやつじやん」

「違うよ……俺浮気とかしないよ……美桜のこと大好きなんだよ」

「嘘つき！ だつてめぐみつて書いてるよ、最近残業あるとかいつてその女と遊んでたんでしょ！」

「めぐみ……？ 違うよ！ 男だ、そいつ俺の男友達だつて」

中村鈴蘭

「は……？ 苦し紛れの言い訳すぎる。今までどんなことも許してきたよ。長時間の遅刻も……直してつていつたことがなかなか直らなくても。でも浮気は無理……」

「それはごめん……でも浮気はしてないよ……」

「私の五年返してよ！」

私は怒りに任せて口紅を大樹に向かつてぶん投げた。どうして大樹は泣き

そうな顔をしているんだろう。泣きたいのはこっちの方なのに。

「もう疲れた……別れて、もう顔も見たくない」

「待つて美桜、誤解だつて違うつて」

「大っ嫌い」

私は合鍵も大樹に投げつけて家を飛び出した。私の五年。替えの利かない、人生で一番密で一番幸せだった五年。こんなにも終わりはあつけなかつた。走馬灯のように大樹との思い出がよぎる。勇気を出して私から誘つた水族館デート、まさか向こうから告白されるとは思わなかつたな。大学生のときはお金も時間もあつたから、東京とか大阪とかいろんなとこに旅行に行つたよ

ね。社会人になつてからは時間もないし、旅行とかは特別行けなかつたけど、お互いの家行き来して一緒にご飯作つたり映画見たり、そんな何気ないことが楽しかつたんだよね。将来の話とかもしたよね。もし生まれてくる子が男の子だつたら野球やらせたいなとか、意外とピアノとかやらせたらギヤツプ萌えだよとか。女の子だつたら何がいいかなあ、バスケとかかっこいいよね。でもやつぱり、一番やりたいことをやつてほしいよねつて。まさかこんな形で終わるなんて。私に魅力が無くなつたのかもしれない。でも浮氣するなら、私とちやんと別れてからしてくれればよかつたのに。

\*

「別れたの!!」

翌日穂香と昼休憩が被つたので、昨日あつた出来事をそのまま話した。穂香は当たり前だが驚いていた。そして私の真っ赤に腫らした目を見て悲しい顔をした。

「浮氣か……辛いね。よく頑張つて仕事來たね」

「働いてた方が気まぎれるし……休んで迷惑かけたくないし」

「うんうん、えらいよ美桜。大樹くんの連絡先とかどうしたの？」  
「もう全部ブロックして消した。……写真はまだ消せてないけど」

「まあ落ち着いたらいろいろ考えればいいよ」

「……うん」

「大丈夫？」 大丈夫じゃないよね」

「おはようとかおやすみとか、毎日連絡してたのがなくなるのが辛い。自分  
からブロックしたのにね。あいつだつて浮気したのに、もしかしたら通知き  
てないかなとか思つてトーク画面開いちやう」

「そつか……」

穂香は少し言いづらそうに、だけど心を決めたような顔をして私の方を向  
いた。

「美桜さ、【理想の恋人生成A-I】って知ってる？」

「なにそれ。聞いたことない」

「実はさ、私の彼氏もそれで作ったんだよね」

「え？ どういうこと？」

「今流行ってるんだよ！【理想の恋人生成AI】はね、容姿も性格も自分が好みに出来てほんとにいいの！話せば話すほど自分が欲しい言葉をくれるようになるし。学習してくれるっていうか。気休めにしかならないかもだけど、おはようとおやすみは言つてほしいとかなら設定すれば言つてくれると思うし！やつてみたら？」

「うーん、でも今はいいかな……」

「そつかあ、まあ気が向いたらやつてみて。これだから」

穂香のスマホには薄いピンク色のボックスに赤いリボンが結ばれた、プレゼントのようなアイコンがインストールされていた。下には【リソコイ】と書かれている。まさか穂香の彼氏がAIだとは思わなかつたけど。でも今の時代つて多様性だし、飛行機と結婚したとかでニュースなつてた人もいたよね。今思えば、あの高い理想に当てはまる人が急に現れるとは奇跡すぎるような気もする。昼休憩が終わり午後の仕事をこなし、自宅についたときもなんとなく頭の片隅に【リソコイ】の話が残つていた。こうやつて部屋を見ると、どころどころに大樹の私物が残つていて。この色違ひのマグカップとか、

旅先で買ったシーサーのストラップとか。歯ブラシとか髭剃りとかは昨日捨てたけど、こういう思い出の品みたいのはまだ捨てるのに躊躇する。でも大樹の私物が残つたままのものなんだか気持ち悪い。もう家に来ることはないはずなのに、玄関を開けてただいまつて言つてきそうな気がする。私はまだ寂しいんだろうな。

【リソコイ】、やつてみようかな

そんな寂しさを埋めるために、私はスマホで検索をかけた。この一番上に出てるやつかな。私はためらいながらも、人差し指でクリックすると、自動的にアプリがインストールされていく。膨大なデータの量があるのか、インストールするのに一時間くらいかかるものの、アイコンと同じような【理想の恋人生成A.I】という薄ピンクの可愛らしいページに飛んだ。

【あなたの理想が恋人になる。あなたの名前を教えてください】

という質問から、年齢、相手の容姿、どんな性格かなど十個の質問に答えていった。特に明確なタイプもないのに、あまり深く考えずに回答していく。次に赤い文字で注意事項が書かれている。

【誹謗中傷、過激な要望、危害を加えるようなことはしてはいけません。もし、理想の恋人を解約したい場合は、契約者様から「別れたい」と伝えてください】

そして最後には要望欄があり、

【要望があれば、入力してください】

私はおはようとおやすみの連絡を毎日してほしい、と打ち込んで確定と書かれたボタンをクリックする。アップロード中と表示され、意外と簡単に作れるんだな、彼氏って。特に私は穂香のようにはつきりとした理想もないし、本当に理想の恋人なんて A.I. に作れるのだろうか。

【理想の恋人が完成しました】

待つている間に彼氏ができたらしい。すると、画面が急に明るくなつてフラッシュを焚いたときのようにはまばゆい光が部屋の中にあふれた。

【はじめまして、和紗です】

光の中から飛び出してきたのは、艶やかな黒髪にすらつと伸びた足、切れ長の瞳。どこかの俳優のような顔立ちとスタイルのよさに、私は茫然とした。

「う、うわ……」

「美桜ちゃん？ 大丈夫？」

「あ……え？ 大丈夫です」

「そんな敬語使わないでよ。僕たち同じ年でしょ？」

そうだった。私はこのイケメンを同じ年に設定したんだった。人とはたとえ彼氏と別れた直後でも、目の前に息をのむほどの男が現れるとすぐに元カレとの記憶に霧をかけてしまえるのだと、このとき初めてそう思った。

「これからよろしくね」

「よろしく……お願ひします」

「だから敬語じやなくていいって」

簡単な挨拶が終わると、私はとりあえず部屋の案内をした。トイレはここ、お風呂はここ、和紗くんの部屋は私がもう着ない服を置いている物置と化した場所を、二人で一緒に片づけて使えるようにした。

「ごめんね、来て早々掃除手伝つてもらっちゃつて」

「いやいや、むしろ部屋作つてもらつてごめん」

「全然だよ。あ、これどうしよ大樹のじやん」

「大樹？」

私としたことが迂闊だった。物置には大樹からもらったなかなか捨てられないプレゼントなどが置いてあつた。

「元カレなの。最近別れたんだけど、まだ捨てられないものとか多くて」

私は大樹とお揃いで買ったマグカップを手に取つて見つめる。

「無理に捨てる必要はないよ。大切なもののなんでしょ？ そのプレゼントたちをどうしたいか、一緒に考えようか。今無理に決める必要はないから、いつでも相談してね」

自分が欲しい言葉をくれる、という穂香の言葉を思い出した。人は迷つているとき、頭の中が混乱していて自分の考えが正しいのかわからなくなってしまう。そんなとき、誰かに「それでいいんだよ」と肯定されることで、自分の考えは間違つていなかつたと思うようになる。和紗くんはきっとそういう存在。私のことを肯定して、尊重して、いつも私の欲しい言葉をくれる彼氏になる。

「……和紗くんありがとう」

「まつて泣いてる？ ちょっと泣かないでよお」

自分勝手で浮気するようなアソーツとは違う、私はこんな彼氏が欲しかったんだ。

\*

「今日はディナー連れてきてくれてありがとう」

「いやいや、和紗くんいつも家にいてつまらないでしょ」

「えー？ 部屋の掃除とかするの僕好きだし、晩ご飯の献立考えるのも楽し  
いよ」

「そういってくれるのはありがたいけど……」

「本當だよ、あ、ソファー座つて。僕こっちは座るね」

【リソコイ】を利用して数週間。私なりにわかつたことがある。それは、  
設定に忠実だということだ。大樹が浮気したのはお互の仕事が忙しくてす  
れ違ひが起きたことが原因だと感じた私は、和紗くんの職業を【専業主夫】  
に設定することで、浮気の可能性を少しでも潰すこととした。すると和紗く

んは、家事も掃除もすべて完璧にこなしてくれる理想の恋人になつたのだ。

「これおいしそう、こつちもおいしそう！」

「たしかに……じゃあ両方頼んで、半分こにしよつか」

「え、和紗くん食べたいものなかつた？」

「僕もこれおいしそうだと思つてたから、全然大丈夫だよ」

和紗くんは気遣いが素晴らしい。テーブルにソファーアと椅子があつた場合、絶対にソファーアを譲つてくれるし、私の意見を尊重できる最善の策をいつもとつてくれる。車道側を歩くだとか、荷物は持つてくれるだとか、世間一般的な気遣いポイントはもちろん、些細なことも気遣えるところが素晴らしい。

「お肉もお魚もおいしいね」

「ね、めつちや柔らかい」

大樹と付き合つていたときつてこんな気遣われたことあつたつけ。外食するときはだいたい遅刻してきてたし。それで私が怒つて大樹が捨てられた子犬のような目でいつも説教を聞いてた気がする。

「美桜ちゃん、大丈夫？」

「え？ うん」

「そつか、なんか疲れてそだと思つて。サクッと食べて早めに帰ろうか」「そんなことないよ、ごめんごめん」

理想の恋人を手に入れておいて、どうして大樹を思い出すんだろう。今付き合つてるのは和紗くんで、こんな気持ちのままでは和紗くんに申し訳ない。私つてこんなに面倒な女だつたつけ。

「みーおちやん！ まだどつかいつてる」

「違うよ、和紗くんのこと考えてたの」

「えつ本当？ うれしい」

「和紗くんとまたいろいろなとこ行きたいなつて」

「行きたいよね！ 僕水族館とか行きたい」

「水族館？ チヨイスがなんかかわいいね」

「水族館つてバカにできないから！ 大人になつたらなつたで、違う楽しみ方ができるんだよ」

そして次のデートの行先や日程を決めつつ、私たちは他愛もない話をしな

がらディナーを食べ終えた。お会計を払うと、「僕払うよ！」と和紗くんが申し訳なさそうにする。私はいつも家事してくれるお礼だから、と笑って言った。

\* 「最近和紗くんとどう？ いいかんじ？」

穂香とベンチに座りながらランチを食べる。穂香のお弁当箱には彼氏が作つたであろう、彩り豊かな野菜やふわふわな卵焼き、小ぶりな豆腐ハンバーグなどが入っている。

「うん、今度水族館行くの。和紗くん好きなんだって、かわいいよね」「いいね！ よかつたよ満喫してるみたいで」

和紗くん特製本日のお弁当は鯖の塩焼き、きんぴらごぼう、ブロッコリー、ゆで卵と健康によさそうなものばかりだった。

「すごいよね、やっぱAIだと自動的に健康志向になるもんなのか」「彩りとかもすごい考えてくれてるよね、私にはできないよ」「みんなAIと付き合えば健康になりそう」

和紗くんも穂香の彼氏も完璧に家事をこなしてくれる。手伝おうとしても、仕事で疲れてるんだから休んでての一点張り。大樹は料理があんまり得意じやなかつたから、大学生のときに初めて作つてくれたお弁当は生姜焼きにワインナー、ご飯の上にはそぼろと謎の目玉焼き。申し訳なさそうにせめてもの彩りとしてミニトマトが入つていた。ザ・男飯のような感じで、お弁当の蓋を開けた瞬間にフリーズした私を見て、友達は大爆笑。みんな私のお弁当の写真を撮つていた。

「なんかさ」

「どうしたの」

「和紗くんつて完璧だなと思つて」

「そりやA.I.だからね。ネットのありとあらゆる情報が頭の中に入つてゐるし、なんていうか会話の最適解を常に出来るんだよ。だから喧嘩になることもない。そう考えれば、幸せじやない？」

「まあそうなんだけど、なんていうんだろうな」

「家事全般やつてくれて、気遣いもできて、博識で、もちろん性格も容姿も

自分好みな相手と付き合えてるんだよ。これ以上幸せなことなんてないよ」「幸せか……」

私の幸せっていつたいなんだろう。たしかに和紗くんは完璧な彼氏で、この先これ以上の人には会えるかと聞かれれば確実にノーだ。それならどうして、不器用で気遣いとは無縁な大樹を思い出してしまうんだろう。

「何が私にとつての幸せなんだろう」

\*

私と和紗くんは約束通り車で約三十分の水族館に来た。有名な観光地というわけでもなく、こぢんまりとした水族館ではあるが、地元民に愛されるような場所だった。

「きれいな水族館だね。ショーとかもあるんだ」

「私こここの水族館大好きなの。なんか寂しいときとか来たなあ」

「おすすめの魚何?」

「寿司ネタみたいに聞くじやん。ショーもいいんだけど、私はクラゲの水槽が好き。ふわふわでかわいい」

「えー楽しみなんだけど」

そんな会話をしながら私たちはいろいろなブースを見ていった。昼食は水族館の生き物パンを売店で買って食べた。私はウミガメ、和紗くんはマンボウのパンに決めて、クリオネの水槽を眺めながら和紗くんは私にいろんな話をしてくれた。それは昼食を食べ終えても、いろんな水槽を見ながら魚の特性だつたり豆知識だつたり。私が知らない知識をたくさん教えてくれた。和紗くんは本当に博識だ。完璧な私の彼氏。でも私が思い出すのは、水槽を見ながらこれはアイツに似てるとか言つてはしゃぐ、かつての恋人の姿だつた。ゆつたりとした水の動きが、私たちの周りの時間だけを止めてしまっているようだ。

「美桜ちゃん、僕のこと好きじゃないでしょ」

クラゲの水槽に着くなり、和紗くんはそう言つた。私は本当に時が止まつたんだなと思った。誰もいない、クラゲだけが私たちの話を聞いている。和紗くんは悲しそうに笑つていた。私が和紗くんをこんな顔にさせてしまった。「美桜ちゃんがなんとなく僕に気がないのはわかつてたんだ。僕と出会つた

ときから。美桜ちゃんは元彼さんのことをずっと想つてゐるよう見えた。僕にはわかるよ」

「私、私ね、本当に和紗くんのこと理想の恋人だと思つてた。かつこいいし優しいし、私が知らないこともたくさん知つてて、気遣いもできて、完璧で、私にはもつたいたい人だつて思つてる」

「もつたいたいなくないよ！ 美桜ちゃんのほうこそ、僕にはもつたいたいくらいで……」

「そうじやないの！ 完璧な和紗くんを見てると、些細なことで喧嘩したりしようもないことで笑つたりしてた日が余計懐かしく思えてくるの。大樹と付き合つてたときは楽しいことばつかりじやなかつたけど、辛かつたことも悲しかつたことも私には必要だつたと思う。和紗くんを嫌いになつたわけじやない。大樹にまだ情とか未練があると思われても仕方ないと思うし、最低なことしたと思つてる。……本当にごめんなさい」

「……そつか。気づいてあげられなくてごめんね。僕はわからないんだ、A Iだから。完璧な恋人と理想の恋人は違うんだね」

「でも、でも和紗くんと過ごした時間は楽しかった。本当だよ……嘘じやないよ……」

「それくらいわかってるよ。ありがとう」

「和紗くん、別れてください」

まばゆい光が和紗くんを包む。まぶしくて目を瞑り、再び開くと和紗くんは消えていた。スマホにも【リソコイ】というアプリは無くなっていた。

「美桜!!」

そんなとき、私の名前を呼んだのは、忘れもしない私と五年間を共にした大樹だった。

「大樹……」

「美桜は絶対ここにいると思つたんだ。だつてここは俺が告白した水族館だからさ。美桜は本当に誤解してるんだって！ お願ひだから話聞いてくれよ……」

私が連絡先をすべて消してしまったから、直接しか会う方法はない。大樹はきっと私に会うためにたくさんこの水族館に来たんだろうな。

「それで！ 証拠連れて来たんだ！ ほら」

大樹の後ろから現れたのは、色白で目が大きくて可愛らしい顔立ちの男の子だった。

「あの僕、恵つていいます。大樹の高校の同級生で、メン地下やつて、あのリップ僕のなんです」

「え、え？」

「本当にごめんなさい！ 謝つても許されないのはわかつてます。このリップ僕がファンの子にもらつたもので、えつと、インスタにも載せてて、あとこれ僕の免許証です！ 本当に恵つて名前なんです。ちょうど何人かで飲んでたときにリップ居酒屋に置いてきちゃつて、次の日取りに行つてくれたのが大樹で」

もののすごい勢いで恵は話し始めた。そして、証拠となる写真や当時の大樹との連絡のやり取りを順を追つて見せてくれた。

「俺も美桜に誤解を生むようなことをしてしまつたのは本当に悪いと思つてる。ごめんなさい。でもさ、もうちょっと俺の話も聞いてくれよ……」

そうだった。明るくて素直な大樹は嘘がつけない。五年も付き合っていて、私は大樹を信じてあげられなかつた。

「ごめん、私もごめん……」

「また俺たちやり直せるかな……？」

「うん、やり直したい。五年記念もお祝いしたい」

そういつて私たちは復縁して、水族館を後にした。今までとは違う、清々しい気持ちで。

\*

俺と美桜はとつくに過ぎていた五年記念日をやり直した。苺のタルトにビーフシチュー、カブレー。俺の好きなものがテーブルにたくさん広げられている。美桜は本当に可愛い。一度も染めたことのない絹のようなさらさらな黒髪と、ぱつちりとした二重。面倒見がよくて怒ることはあっても、最終的には俺を許してくれる。どんなことをしても。

【あなたの理想が恋人になる。あなたの名前を教えてください】

【田中大樹】

【あなたの誕生日、年齢を教えてください】

【八月五日、二十歳】

【彼女の容姿を教えてください】

【黒髪（地毛）、二重、色白、身長..百六十センチメートル、体重..四十五キロ、清楚系アイドル顔】

【彼女のファッショングを教えてください】

【ワンピースやロングスカートなど、女性らしい品のある服装】

【彼女の性格を教えてください】

【優しい、自立している、彼氏想い、面倒見がよいお姉さん】

【彼女の誕生日と年齢を教えてください】

【二月一日、二十歳】

【彼女の職業、将来の希望年収を教えてください】

【銀行員、四百五十万円】

【彼女の興味・関心を教えてください】

【料理】

【彼女の考え方の傾向を教えてください】

【現実的】

【彼女の感情表現の仕方を教えてください】

【喜怒哀楽ははつきりしていて、怒るときは怒る】

【要望があれば、入力してください】

【彼氏がどんなことをしてても、最終的には許してほしい】

【理想の恋人が完成しました】



## あとがき

本当のことと言いますと、このような内容を書くつもりはありませんでした。最初は純愛小説を書き始めましたが二千字程度で終わり、次はホラー小説を書きましたが三千字程度で終わりを迎えました。とりあえず、最後がどんどん返しで終わるような作品を書きたくて、なんとなくで書き始めたものがまさか完成してしまうとは、何があるかわかりませんね。さて、『理想の恋人』ということで理想のタイプを持つ人は多くいるかと思います。私もあります。題名をつけたとき、最初は『完璧な恋』を描くつもりでした。でも書き終えた今、理想という言葉の裏には、必ず『現実』の影があるのだと感じています。誰かを愛することは、相手を思い描くことよりも、その人の欠けた部分を受け入れることなのかもしれません。A.I.のように整った恋人よりも、不器用で、言葉足らずで、それでもそばにいたいと思える存在こそが、本当の理想なのだと思います。書きながら、美桜や大樹、そして和紗の中に、自分自身の一部を何度も見つけました。理想を追いかけて、現実に戻つて、

## あとがき

それでもまた夢を見る。そんな人間のくり返しが、きっと誰の心にもあるのだと思います。

この物語が、誰かの中の「理想とは何か」を少しでも揺らせたなら、作者としてそれ以上の幸せはありません。



匿名の人生

永田  
志生

午後五時を過ぎて、水平線と空の際がわずかに黄みがかつてきた。海水浴シーズンはとうに折り返しを過ぎたが、町で唯一の観光地であるこのビーチはまだそれなりに賑やかだ。夏らしい青さが残る上空にはジェット機が白くきらめき、飛行機雲ができたそばから消えていく。

今年で六十三歳。未婚、男。

小説家、そして作詞家としてデビューして三十五年。このごろ、体力の低下が仕事に影響を及ぼすようになつてきた。この朽ちゆく肉体では、連載を抱えながら作詞の仕事をこなすのは難しい。

もし私生活が健康的で充実したものだつたのならば、こうはなつていなかろう。しかし独身の私のそばには生活を気遣つてくれる人などいない。なぜ病院通いになつていなかの不思議だ。それに、唯一私の暮らしぶりを知る出版社の社員たちも、ただ原稿を催促するばかりである。「孤高の作家」などと長年もてはやされてきたが、その実態はとにかく執筆と打ち合わせ、それから気晴らしの独り身小旅行を繰り返すだけの寂しいものであつた。

そんな状況ではあるが、つい先月、単行本上下巻の出版をめでたく終えた。

月刊文芸誌での三年にわたる連載は、なかなかに骨の折れる仕事である。もう長編は書きたくない、しばらくは作詞で食つていくと担当に伝えると、「はは」とだけ返された。老人の戯言だと思われたのだろう。私はしばらく出かけてくるとだけ言い残し、保養のためこの町へとやつてきたのだつた。

背後の山の方へと向かっていく飛行機を目で追いかけていると、目の前に立つホテルが視界を阻んだ。ここは海水浴客の大半は、このホテルの宿泊客でもある。私もまた、その一員だ。

そのままぼんやりとホテルを眺めていると、バルコニーに男の人影を見つけた。

五階の角部屋。あれは、私の隣の部屋だ。

男はカメラを構え、ファインダーを覗いたり顔を上げたりを繰り返している。歳は私と同じくらいだろうか。レンズはこちらのほうを向いている気がするが、シャッターは切つていないうだ。

まさか、彼は私が誰なのか気づいてカメラを向けている？

しかし、そんなはずはない。なぜなら私は、デビューから一度たりとも本

名も姿も明かしていない、いわゆる覆面作家だからだ。世間から孤高の作家などと呼ばれる所以はここにある。

それに、そもそも私の容姿は「どこにでもいる六十代」そのもので、特徴もなければ魅力的でもない。つまり、彼が私を被写体にする理由は全くなきおおかた、私ではなく背後の海を撮っているのだろう。

しばらくすると男は満足したのか、部屋に戻つていった。私も日光浴に飽きてきたため、そのまま客室に戻ることにした。

山田徳一。あるいは、野沢修二。どちらも私のペンネームである。私の覆面作家人生は、ひよんな思い付きから始まつた。

約三十五年前、私がまだどこにでもいる普通のサラリーマンだつたころ。雑誌で新人文学賞の募集を知つた私は、文学部時代に未完のまま放つておいた「寄港」という小説に加筆し、応募することにした。昔から文章を褒められることが多く、作品の出来には自信があつた。

それにもかかわらず、私は小説を書いていることを同僚や地元の同級生に

知られるのが嫌だった。思春期特有の恥ずかしさが心に深く根を張っていたのだと思う。そのため、応募の際には本名にはかすりもしない山田徳一というペインネームを付けた。

同じ頃、私はこれまた雑誌で見つけた新人発掘の作詞コンペに「真夜中の指輪」という題で応募した。歌詞は小説よりも字数が少ないと、正社員として働きながらでも書きやすかったのだ。そして、もし小説と歌詞のどちらも受賞した場合、「ダブル受賞の新人」と注目を浴びても困ると皮算用し、野沢修二と名乗つて応募した。

しかし、その皮算用は無駄にならなかつたのである。応募から約一年後、私は一年で二つの作品を世に送り出すこととなつた。小説は単行本として出版され、歌詞は売り出し中の歌手・河合明美の新曲に使われる。山田徳一、そして野沢修二という二人の作家が誕生した瞬間だつた。

その後は会社を辞め専業作家になつたが、シャイな私は本名や顔を出さないまま活動することにした。『寄港』と「真夜中の指輪」はどちらもヒットし、私は人気作家への道を駆け上がつていつた。

夕食バイキングや大浴場を満喫したところで、エレベーターで部屋に戻る。ドアが閉まりかけたそのとき、ひとりの男が駆け込んできた。

「失礼、申し訳ない」

さつきの男だ。バルコニーでカメラを構えていたあの男。どこかで見た覚えのある顔だが、なかなか思い出せない。

記憶を辿りきれないうちに、エレベーターは五階に到着した。しかし、会釈して先に降りていく彼の横顔を見たとき、ようやく気付いた。

「丹波和彦さんですか、写真家の」

私は思わず声をかけた。彼の横顔は、有名写真家・丹波和彦の宣材写真と全く同じだったのだ。

しかし私はその瞬間、自分の発言を悔やんだ。覆面作家ならば、プライベートで声をかけられない心地よさを誰よりも知っているはずなのに、と。  
「そうですが……。あら、さつきビーチにいた方かな、あなたは」

声を掛けられることは日常茶飯事なのか、さほど動じていない様子だ。そ

してこの返答からして、やはり先ほどは私のことを見ていたのだろう。

「ああ、いましたが」

「これはいいところに。突然で申し訳ないが、実はひとつあなたに頼みたいことがありますね。僕の名前に免じて、聞いてくれると嬉しいのですが」

彼は立ち話もなんだからと言つて、部屋に通してくれた。窓の前に置かれた椅子に座ると、

「本当は下のバーで話してもよかつたけど、面倒でしよう。もう一度降りるのは」

と言つて、私の向かいに腰掛けた。

一息ついたところで、私が何者なのか名乗つていなることに気づく。挨拶のため口を開くと、先に彼が話し始めた。

「さて。单刀直入に言うと、あなたには僕の新作写真集のモデルになつてしまいのです」

「はあ」

「知つてゐるかも知れないけれど、僕は今までたくさんの女優の写真を撮つてきました。しかし最近は少々考えが変わりましてね。少し違うものを撮つてみようと思つて海を眺めていたら、あなたが歩いているのを見つけてビビつときたんです」

そうだ。この人はファッション雑誌の表紙写真や女優のポートレートで有名な写真家だ。なぜ彼が一般人を、しかもこの私を選んだのだろうか。

「それにしたつて、私は被写体にふさわしいとは思えませんが」

「それは、撮つてみればわかることですよ。ちょっとそこに立つてみてくれませんか」

彼はそう言つて、ベッドの前を指差した。言われるがままに立ち上がり背筋を伸ばすと、

「いや、かしこまらなくていいですよ。普段通りに立つて、顔だけ少しこちらへ向ける」

と言われる。果たしてこれでいい写真が撮れるのか、疑問でならない。

「そんな感じです。じゃあ、撮りますよ……」

おそらく数枚しか撮つていないうちに、撮影は終了した。プロの手際の良さに驚いていると、再び窓際の椅子へと案内された。撮つたものを見せてくれるという。

「撮つて出しですが。どうですか？」

カメラのモニターに映し出されていたのは、何の変哲もないホテルの客室に白髪の男が立っているだけのモノクロ写真だった。しかし、どこか懐かしい感じがする。私には妻も子供もいないのに、家族旅行中の写真のように見えるのはなぜだろう。私はこんなにも自分の父親に似ていただろうか。

「……記憶の中の親父、という感じですかね。見当違いないことを言つていたら申し訳ないのですが」

「いや、その通りですよ。失礼を承知で言わせてもらうと、あなたの容姿は極めて一般的。どこにでもいそうな感じです。でもそれは時に、強い匿名性を發揮し、既視感を喚起させる。つまり、あなたの容姿は見る人に『誰なんかわからないが、いつかどこかで見た覚えがある』と思わせる力がある、ということです」

褒められているのか貶されているのかわからないが、ともかくこの写真が素晴らしい作品であることは確かだ。どれだけ私の容姿が平凡だからといって、写真の心得がない人が撮つてもこうはならないだろう。プロ写真家の力を見せつけられ、これなら被写体になつてもいいかもしされないとすら思う。

「それで、撮影日時や場所などは決めているんですか」

「いや、乗り気になつてくれましたか？　希望としては、徳島と北海道で撮りたいと思つています。知つているはずなのにどこかわからない、そのような場所で先ほどのような写真を撮るのです。もちろんギヤラもお出ししますよ。……まあでも、そちらも都合があるでしようから、僕の希望通りに撮るのは難しいでしようね」

思わず、笑いだしそうになつた。こんなにも私に都合のいいことがあるのだろうか。次の新作は紀行文で決まりだ。

「ぜひそのお話、受けさせていただきたい」

「彼の顔に安堵の色が浮かぶ。」

「本当ですか！　よかつた。断られることを承知で提案しましたから」

「いえ、こちらにとつてもいい条件ですよ。そういえば申し遅れましたが、私は……山田徳一という名前で、作家をしている者です」  
プライベートの場でペンネームを教えるのは、三十五年の作家生活で初めての経験だった。

幸いにも彼は私の読者だったようで、「写真を発表する際に私の身元は明かさないでほしい」「撮影地を特定できないようにしてほしい」という要求をすんなりと受け入れてくれた。予想外の事態がとんとん拍子に進んでいることに心底驚くが、私も早く最良の出版社に紀行文の執筆計画を連絡せねばならない。どこか一社くらいは掲載したいと言つてくれるだろう。あんなにも連載に苦労していた過去の自分がまるで別人のようだ。

私は二日後に帰るため、一度別れてそれぞれ準備をすることになった。丹波さん曰く、撮影場所の許可取りや宿の手配などは彼の事務所で済ましてくれるという。

私も出版社での打ち合わせや執筆の計画、それから旅に必要なあれこれを行

揃えるために忙しく走り回ることとなつた。長年の座り仕事がどれだけ人の体力を奪うものであるか実感したが、気力が失われるることはなかつた。

三ヶ月後、私たちは羽田空港で落ち合つた。

丹波さんはひときわ目を引く洒落た秋服で現れた。同行者の自分まで目立つてしまふのではないかと不安になつたが、多くの人が行き交う空港において私たちは群衆の一部でしかなかつた。

撮影は十一月と十二月の予定で、初めの一週間は徳島で撮影する。そして丹波さんの仕事のため一度東京に戻り、撮影はしばらく休みとなる。その後は北海道へと向かい、稚内に滞在する。

徳島では、丹波さんの仕事仲間でありコーディネーターの吉岡さんという方が全面的に協力してくれるという。彼は徳島出身の四十代で、私のことは撮影に参加する友人として伝えてあるそうだ。

徳島空港の到着ロビーで吉岡さんと合流すると、さつそく名物である渦潮の観光船へと向かつた。船上にて、大迫力の渦潮を前に「ぼく、晴れ男なん

です！」と誇らしげにしている吉岡さんが妙に面白く、丹波さんと共に大笑いしてしまった。

その後も吉岡さんの周到な事前準備により、美術館や人気の居酒屋などを楽しむことができた。一日目から順調な滑り出しで、紀行文の出来にも期待ができそうだ。

翌日、私たちは美馬市脇町へと向かった。そこは江戸時代の商家が立ち並ぶ地域で、今日はとある旧宅での撮影を行う。

大きなリュックを背負ったまま手際よく受付をする丹波さんには、プロの風格が漂っている。ギイギイと鳴る床板を踏みしめながら離れに入ると、古い木材といぐさの香りに包まれた。中庭から柔らかな秋の日差しが差し込む縁側が、今日のメインの撮影場所になるようだ。生活感を出すため湯呑や本、竹箒などの小道具を設置し、光源のチェックを済ませるとすぐに撮影が始まつた。

まずは部屋の中央で机と座布団を使ったポーズを撮る。丹波さんの指示を

聞いて、中腰になつて片手で座布団の端を持ち上げたり、老眼鏡と新聞を持ちながら座ろうとしたりする。今日の撮影テーマは「年老いた実家の父親や幼少期に見た祖父を想起させる感じ」とのことなので、普段よりも少しだけ背中を曲げてみた。これは丹波さんだけでなく、後ろで見ていた吉岡さんからも好評だった。

室内での撮影が済むと、次は縁側に出る。モノクロ写真は光と影のコントラストが重要らしく、陽光がきれいに差し込む縁側は丹波さんにとって絶好の撮影スポットだという。ここでも座つたり立つたりを繰り返し、さまざまな角度から撮影する。時折外から聞こえてくる鳥の声で心を安らげつつ眠気に抗つていると、まどろむ感じもいいですねと言われて少し恥ずかしくなつた。

長めの昼休憩を挟んで、午後からは庭での撮影が始まった。西日の中、縁側からの出入りの場面や、私が竹箒で掃除している様子を撮る。暮らしの中のなんてことない動きを再現していると、自分が昔からこの家に住んでいたのではないかと錯覚してしまう。そのまま家の主になつたつもりで、夕飯は

何を食べようか、買い物に行く必要があるな、などと妄想していると、「いい表情ですよ」という声が飛んできて可笑しかった。

初日の撮影は無事に終わり、翌日は別の旧家にて喪服を着て撮影することになった。親戚の家での法事をイメージしているそうだ。朝からどんどんよりとした曇り空が広がっていたが、丹波さんは「昨日とは違う写真が撮れる」と喜んでいた。

食器やビール瓶が置かれた机の前に座つたり、縁側で煙草を吸う仕草をしたりと、たくさんの小道具を使いながら法事の日の場面を再現していく。途中、雨が降ってきて急いで雨戸を閉めたが、丹波さんはこの瞬間もしつかりとカメラに収めていたようだ。

翌日は、次の目的地である剣山へ向かう準備のため、撮影は休みだつた。しかし丹波さんたちは忙しそうで、私だけ休んでいるのも申し訳なく思い、執筆作業を進めた。

そして翌朝、私たちは紅葉シーズン真っ盛りの剣山へと出発した。もつとも、モノクロ撮影をしたい丹波さんに紅葉はあまり関係がないようだつたが、紀行文の取材を兼ねている私にとっては心躍る目的地だつた。

しかし、山の天気は実に変わりやすい。晴れていたのもつかの間、リフトに着くころにはうつすらと雲が広がつてきていた。吉岡さんの晴れ男宣言はどこに行つてしまつたのだろうか。

リフトを降りると、いよいよ登山がスタートした。初心者向けの遊歩道コースを進むにつれて、霧は濃くなつていく。もはや紅葉どころではない。

体力も登山経験もない私だつたが、道が整備されていたため一時間半ほどで山頂に着いた。結局霧が晴れることはなかつたが、丹波さんは「表紙に霧の写真を使おうと決めていたからちようどよかつた」と嬉しそうにしている。

私が休憩している間、丹波さんは人がいないタイミングを見計らつて霧中の山並みを撮つていた。その後の私の撮影ではやけに顔ばかり撮られたが、帰りの車で「疲労した顔を自然に撮るための登山だつた」と種明かしされた。

翌日は休養日で、私は旅館で紀行文の続きを書くことにした。紅葉がすぐそばに見える広縁の椅子に腰掛け、登山で疲れた脚を休めながらこれまでの体験を記していく。丹波さんが場所を特定できないように撮影しているおかげで、私は身元の特定を恐れずのびのびと各地での出来事を書くことができた。

ふと、もしこの紀行文が成功すればエッセイ連載の話を持ち掛けられるかもしれないな、などと調子のいいことが頭をよぎったが、これは気晴らしに飲んだビールのせいだろう。吉岡さんがおすすめしてくれたすだちの地ビールは、執筆のよいお供になつてくれた。初日の渦潮から霧の剣山、宿泊先での食事までしつかりと書き記し、明日のフライトに向けて床に就いた。

早くも徳島を発つ日がやつてきた。

空港内で昼食をとりながら、私たちは吉岡さんとの別れを惜しんだ。思えば、初対面の人と山を登るなんて、不健康で孤独だったこれまでの私では考えられなかつたことだ。「次の撮影も楽しんでください」という嬉しい言葉と

ともに送り出された私たちは、羽田へと飛び立った。

十二月中旬、私たちは北海道稚内市にやつてきた。ここは丹波さんの生まれ育った土地である。ここからは私と丹波さんの二人旅だ。

稚内空港に着いたのは昼過ぎだつた。レンタカーの手続きを済ませ、丹波さんの運転で宿に向かう。荷物を下ろしたあとは近くの食堂に入った。

丹波さんの地元での知名度は抜群で、出会う人々は皆スターの帰郷を喜んでいた。あまりにも注目を浴びるので少し困つてしまつたが、そのたびに丹波さんが「仕事で來た」と言つてくれるので私の職業がバレることはなかつた。

その日の夜は、行きつけだというスナックに連れて行つてもらつた。客は常連ばかりだつたが、雰囲気のいい店だ。

酔いが回つてきたころ、ママが私に「丹波さん、すごく歌がうまいんですよ」と言つてきた。丹波さんは近くにいた常連におだてられ、せつかくだから十八番を披露してくれることになつた。

拍手の中、イントロが流れ出す。その瞬間、思わず声が出そうになつた。  
「真夜中の指輪」作詞、野沢修二。

三十五年前の私が書いた歌詞を、丹波さんが艶やかな声で歌い上げる。そこには、かつてこの曲で一世を風靡した河合明美の姿が重なる。私はこのときようやく、丹波さんと河合明美が元夫婦だつたことを思い出した。

「元妻の曲が十八番だなんて、未練がましくて嫌な男でしよう」

私が野沢修二だと知らない丹波さんは、常連たちの歓声を浴びながら席に着いた。

「いや、とてもいい歌声でしたよ。あのころの河合さんが宿つていた」

自分が初めて書いた歌詞が、自分の知らない土地で歌い継がれている。時や場所を超えて、今この最北端のまちで。私の書いた言葉は、誰かの人生に存在し続いている。

もし私が野沢修二だと明かしていれば、スナックカラオケの日常風景をこうやつて眺めることはできなかつただろう。偶然が重なり合い、この光景に立ち会えたことを私は心から嬉しく思つた。

翌日、私たちは丹波さんの実家が建っていたという場所で撮影を開始した。そこは既に広い空き地になつており、積もつた雪から雑草がぼさぼさと飛び出している。撮影許可について訊くと、丹波さんはいたずらっ子のような笑みを浮かべながら「地元はいいですよ。みんな協力してくれるから」と言つた。

これまでの撮影ではずっと私服を着ていたが、稚内では丹波さんに見繕つてもらつた服で撮影する。雪に不慣れな私が選ぶアウターや靴は、地元の人から見るとどうも観光客らしすぎるというのだ。

そんな地元仕様の装いで撮るのは、「ブレ」を使った写真だ。被写体の輪郭を曖昧にし、記憶の遠さを表現するという。カメラのことは詳しくないが、三脚で固定したカメラのシャッタースピードを下げ、私が少し動くと意図的にブレた写真が撮れるらしい。

それを撮り終えると、今日一番の大仕事の時間がやつてきた。

「では、いきますよ」

合図とともに、私は走り出した。丹波さんはカメラを持つて追いかける。幼少期の追いかけつこの記憶を写真で再現する試みだ。

走るといつても、若者の駆け足にも満たないスピードだ。それでも、丹波さんに言われた通りに手足を大きく動かせば、必死さが演出できる。重たい曇り空と殺風景な空き地、そしてがむしやらに走る老人が寂寥感で結びついでゆき、奇妙な調和を生み出した。なんとか走り抜けて丹波さんと顔を見合わせたとき、これはいいものが撮れたと確信した。

明朝、丹波さんの運転で大沼を訪れた。春や秋はバードウォッキングで賑わうが、十二月に訪れる人はほほいないという。今日は晴れているものの、マイナス五度の風が鼻先や耳に痛みをもたらす。結氷した水面には雪が積もり、まるで大地のようだ。日が昇りきつて照り返しがきつくなる前に撮影を済ませる。

午前中のうちに稚内港周辺に戻ると、港を背景に数カット撮影した。閑散

期のため周囲に観光客はおらず、撮影はスムーズに進んだ。

キリのいいところで近くの飲食店に入り、昼食をとる。提供を待っている間、地元民らしき二人組の「明日は天気が荒れる」という会話が聞こえてきて、明日を撮休にしておいてよかつたと胸を撫で下ろした。

店を出ると、雪が降り始めていた。このままホテルに帰る予定だったが、丹波さんがもう少し外で撮りたいと言つたのでフェリー乗り場まで歩くことにする。

港には濃紺と茜色のラインが入つたフェリーが停泊していた。あれは利尻島か礼文島への便だという。いつかフェリーに乗つて小説の取材先に行くのもいいなと思つていると、カメラを構えた丹波さんが「寒いですけど、もう少しそのままぼんやりしていてください」と言つて笑つた。

丹波さんの創作意欲に動かされ、自分の作品が愛されているさまを目撃した私は、もう長編は書きたくないと思つていたことなどとうに忘れていた。

二人組の話どおり、翌日は一日中強風が吹いていた。せつかくの撮休にも

かかわらずどこにも出かけられなかつたが、カンヅメで執筆を進めるのには都合がよかつた。早いもので、明日はもう撮影最終日だ。

この旅最後の撮影地は、私のリクエストで宗谷岬にしてもらつた。ここで朝焼けを見てみたかったのだ。天候はすっかり回復し、丹波さんの運転に身を任せて海沿いを走つていく。

左手一面に海が広がる一本道を進んでいると、突然「ほんの少しだけ窓を開けてみてください」と言われた。車内の暖かさを逃がしてしまうのではないかと疑問に思いつつ、わずかに窓を開ける。すると、夜明け前の透き通つたような冷たい風が車内に細く流れ込み、頬を撫でた。籠つていた熱から解放されたような感じがして、非常に心地よい。

「どう？ 気持ちいいでしよう。ちょうど暖房で顔が火照つてくる頃だろうと思つて。冬に帰ってきたときはよくやるんです」

そう言つて丹波さんは窓を閉め、暖房の温度を下げてくれた。何気ない出来事ではあるが、北の寒風を心地よく感じられたのはこのときが初めてだつ

た。私はこのことを絶対に紀行文に書こうと思つた。

出発から三十分ほど経ち、駐車場に到着した。ここからでもあの有名な三角形のモニュメントが見えるが、もちろん無人である。あまりにも寒いので、日の出時刻になるまで車の中で話しながら待つことにした。

「そういえば、なぜ徳島と稚内で撮影しようと思つたんですか？」

昨夜、紀行文の続きを書きながら考えていたことを訊いてみた。もう何日も一緒に撮影しているが、丹波さんがロケ地の選定理由を語つたことは一度もなかつた。

「それは、あなたが僕の父に似ている気がするから、ですね」

「……どういうことですか？」

「はじめて海岸であなたを見たとき、僕が子供のころの父がそこにいると思いました。見た目は全く似ていないのに、なぜか父の姿が僕の中で蘇つたんです。だから、僕が生まれ育つた稚内、そして親戚の家があつてよく訪れていた徳島であなたの写真を撮り、僕の記憶の中にある曖昧な父の像を形にし

ようとしたんです

「じゃあ、この写真集は丹波さんがお父さんを思い出すためのものなんですね」

「そうとも言えます。でも僕は、これまで撮ってきたあなたの写真が、単に僕の記憶の再現に留まるものではないと思っています。⋮⋮前にも同じようなことを言いましたが、あなたの容姿は見た人の既視感を喚起します。そんなあなたを『どこなのかはわからないが、知っているような風景』で撮れば、写真を見た人があなたの姿に記憶の中の人を重ね、その人を思い出すきっかけになると思つたんです。ぼやけたような写真をたくさん撮つたのは、記憶の曖昧さとリンクさせるためです」

私の写真を見た誰かが、私を通して大切な人を思い出す。これは私がこれまでの作家人生でやつてきたこととよく似ている。私の写真を見る人は、私を介して大切な人を見る。それと同じように、私の作品に触れる人もまた、私の作品を介して自分の人生を見る。私というひとりの人間のことは、誰も見ていない。

それでも私は、私が持つ全てを駆使して誰かの人生に寄与する。小説で、そして歌詞で。たとえ最期まで本当の私を知る人が現れなくても、いつまでも書き続ける。

輝く朝日を背に、最後の一枚を撮つてもらつた。逆光で顔は全く見えないが、これこそ私を象徴する一枚だ。丹波さんの写真と私の作品がこの岬を超えたはるか先まで届くことを祈り、その場を後にしてた。

永田志生

## あとがき

この世には、心地のよい孤独が存在する。

旅行先の知らない電車でまどろむとき、映画館で着席して一息つく瞬間、混雜するデパ地下の総菜売り場を通り抜けるとき。誰に注目されるわけでもなく、ただ行き交う人々の一部としてその場にいることを心地よいと感じる。しかし、もしその孤独が一時的なものではなく、何十年も続くとしたら？そもそもなぜ、孤独を心地よいと感じるのか？

本作の主人公「私」は、覆面作家として活動している男だ。名の通つた作家だが、彼の周りには彼がかかる有名な「山田徳一」、そして「野沢修二」であると知つてゐる者はいない。彼は素顔で街を歩けど、誰に声を掛けられるともない。覆面作家であり続ける限り、「心地のよい孤独」を享受し続けるのだ。

三十五年の匿名人生で獲得した「何者でもない自分」を初めて他者のため

に使うとき、はたして彼は何を思うのか。

丹波和彦がぼやけた写真ばかり撮るという設定は、「距離こそが懐かしさを生む」という話から着想を得た。遠い記憶が霧の中からわずかに顔を覗かせるとき、ふと懐かしさが湧いてくる。その瞬間を他者の胸の中に再現しようとする試みこそが、彼らがつくった写真集なのである。

丹波和彦の思惑は小説の世界を飛び出し、今そこにいるあなたの胸にもやつてくる。彼が撮った写真がどんなものなのかイメージするとき、参照されるのはあなたが持つ遠い記憶だ。丹波和彦の写真、そしてそこに写る「私」を通して、あなたはどんな記憶に手を伸ばしたのだろうか。



ピーターパンが来ないから  
フレンチトーストをつくる

七輝

## ピーターパンが来ないからフレンチトーストをつくる

生まれてから早十四年。私の家の窓をピーターパンが叩いたことは一度もない。昔は信じて待っていた。窓を開けて、空を見上げて。でも結局、いつまでたつても来なくて。来たのは蚊だとか蠅ばかり。ピーターパンの靴の先さえも現れなかつた。だから、私は大人になつてしまふ。子供じやなくなつちやつたから母さんを引き留められない。

母さんは看護師だから月に何回か夜勤に向かう。私が小さいときは頑張つて夜勤を減らしてくれていたけれど、中学生になつたとたんに夜勤に行くようになつてしまつた。一人きりの静かな家は不安と寂しさで満たされる。だから、私はおまじないをするようになった。寂しい夜を越えて明日を迎えるための、おまじないを。

### 第一夜 ピーターパンが来ないからフレンチトーストをつくる

勉強机に向かい、教科書の上を目が滑つていく。文字の羅列は何の意味も持たず、見たそばから頭から抜け落ちていく。右手に握つたシャーペンは、

もう五分以上も同じ場所で止まっている。頭の片隅にある僅かな思考力が、「このまま勉強は続けられるのか?」という議題を立てた。それに対し、心と身体は即座に「無理である」という結論を下す。無理なら仕方がない、と私はシャーペンを置いて、大きく伸びをする。体からぱきぱきと音が鳴り、大きく息を吐き出す。頭がぼーっとするほどの極度の疲労感だ。疲労感を言いい訳に、私は自然とキッチンへと向かっていた。

さて、今夜は何を作ろうか。この時間、母さんがいたら「こんな時間に食べないの!」って怒られる。だから、母さんがいない今日は特別。冷蔵庫をあさり、買い足されていた新鮮な卵と、賞味期限の近いヨーグルトを発見した。牛乳の代用としてヨーグルトを使つて、今日はフレンチトーストを作ることに決める。頭の中では、コツク服の私が、満足げな表情を浮かべるお客さん役の私に料理を説明している。すべて私一人の、虚しい一人芝居だ。

ボウルに卵とヨーグルトと砂糖を混ぜていく。泡だて器を卵黄に押し付けると、温かい橙色がボウルの中に広がる。静まり返つたキッチンに、泡だて器の金属がカシャカシャとぶつかる音だけが響く。顔を近づけると、ほんの

りと甘い匂いが漂つてくる。この匂いは、夜の静けさの中で私だけに許された密かな幸福の予感だ。卵液をタッパーに移し、いよいよ食パンを浸す。その前に、私はフォークで食パンにぶすぶすと無数の穴をあける。このひと手間が、卵液を早く、深く染みこませるための、夜食のプロとしての譲れないこだわりだ。

食パンを浸し終え、この浸している数分間を利用して、ボウルや泡だて器を効率的に洗う。もう染みたか、まだ早いか。迷いながら、意を決して食パンを慎重にひっくり返す。真っ白だつた面は、卵液を吸つて淡いクリーム色へと姿を変えていた。おお、と小さく声が漏れる。この劇的な変化の瞬間が、たまらなくわくわくするのだ。すぐにでも焼きたい衝動に駆られるが、もう片面も浸さなければならぬ。この待つ数分間は、まるで永遠にも等しい。待つ間におなかがぐうと鳴る。晩御飯は食べたはずなのに。きっと、部活も勉強も頑張つた私を「えらい、えらい」と褒めてやるための、身体からの正当な要求なのだろう。

ついにもどかしさが限界を迎へ、焼きの工程へ。冷蔵庫から取り出したバ

ターを、フライパンへ落とす。バターは熱でじゅわじゅわと音を立てて溶け始め、その一連の音とともに、バターの甘くコクのある、どこか背徳感を纏つた匂いがキツチン全体に充満する。バターは間違いなく「幸せの素」だ。溶かしたバターを広げたフライパンに食パンをそつと置いた瞬間、じゅわああつと一層大きく、まるで喝采のような音が響いた。

「これこれ。やつぱフレンチトーストといつたらこれでしょ」

焦げ付かないように弱火でじっくりと焼き、フライ返しでちらちらと確認すること二回。約三分待ち、三回目の確認で焼き色が深まつたので、勢いよくひっくり返す。火が通っていないクリーム色の面が隠れ、代わりにこんがりとした美しい黄金色の面が現れた。まばらになつていたバターの拍手が、再び勢いを増す。もう三分ほど待ち、お皿と飲み物の水を準備する。ちようどいい時間だ。バターはフレンチトーストに吸収され、綺麗な焼き色のフレンチトーストが完成した。

テーブルまで運ぶのもどかしく、キツチンで立つたまま食べる。行儀は悪いが、それも夜食の醍醐味だ。

「いただきます」

ぱちん、と誰もいないのに手を合わせる。ナイフをそつと差し込むと、じゅわっとバターがしみだしてくる。フォークで口元まで運ぶと、甘い匂いが鼻を満たす。ふうふうと冷ましつつ、満持して口に入れる。

「はふ、はふつ。ん！ うんまあつ！ ははつ」

歓喜の声が漏れる。ヨーグルトを使つたおかげで、普段より少しさっぱりしている。バターと砂糖の甘みに、ヨーグルトのさわやかさが加わり、最高のタッグになつていて。中心が少し染み込みが足りなかつたが、それもまた全体の味を調和させるアクセントになつていて。美味しすぎて無我夢中で食べ進め、十分もしないうちにフレンチトーストは消えてしまった。

「ごちそうさまー」

食器を洗いながら、口の中に残る甘さに幸せが続いている。こんな時間に食べたら太ることは承知の上だが、この深い幸せが味わえるなら構わない。心もおなかもぽかぽかのおまじないが深く効いている。だからこそ、私以外の音が無い静けさにも、部屋の広さにも、目を瞑つていられる。トッピング

も無いし、盛り付けも映えなかつたけど、熱々のフレンチトーストは笑つちやうほど美味しかつた。

ピーター・パンが来ないから、私は一人で夜を越える羽目になる。

### 第二夜 ピーター・パンが来ないから素麺をつくる

ただひたすらに暑い。体がぐつたりとするほどの熱帯夜だ。外の気温は未だ三十度近くあり、こんな夜でも勉強しなければならないのが受験生のつらい定めだ。これだけの暑さでは、ピーター・パンもさすがに飛べまい。窓を開けたらむわっとした熱気が入り込むだけだろう。机に向かい、ひと踏ん張りしようとしたところで、手元の麦茶が空っぽなことに気づく。イライラしながらコップを持ってキッチンへ向かう。ついでに何か食べちやおうかな。暑い暑いとは言つても、夏バテとは無縁な身体であるのでおなかはちゃんと減るのだ。

「おまじない、おまじない。ちちんぷいぷい。あぶらかたぶら」

夏場に熱々のものは到底食べたくない。棚をがさがさとあさつて見つけたのは、夏には冷たくさっぱり、冬にはぽかぽか温かく食べられる万能な食材、素麺だ。鍋に水を入れて、火にかける。トッピングを探して冷蔵庫や棚をさらにはがさがさあさると、見つけたのは白ごまと梅干しの二つ。このシンプルな組み合わせなら、濃いめんつゆではなく、白出汁で、あつさり風味で食べるのが最もふさわしいだろうと決める。

お湯が沸いてきたので、素麺を一束、ぼきつと半分に折つて鍋に入れる。長いと焦げやすいのが面倒だし、短い方が啜りやすい。タイマーで茹で時間 を計る間に、他の準備をする。冷凍庫から小口切りのねぎを出し、梅干しは種を取つて粗めのみじん切りにする。種を取つた梅干しを口に入れて転がし、「すつっぱ……」と酸味に顔をしかめる。種についている梅肉を舐めるのは、夜食の準備中における、ちよつとしたささやかな楽しみだ。

梅干しを切り終わる寸前、タイマーがけたたましく電子音を叫ぶ。「あー、はいはい。待つて待つて！」とタイマーに苛立ちを覚えながらも答え、火を止める。誰かに急かされるのは好きじやない。コンロの前に立つと、鍋から

の大量の湯気が、湿った熱気となつて一齊に襲つてくる。顔をしかめつつ、素麺をざるに上げる。暑い、暑い。この熱気を憎みながら、ざるに移した素麺を冷水でしつかりともみ洗いする。最初はぬるかつた水は、素麺の熱を奪うことで次第にきんと冷えていき、手先から涼しさが体内に伝わつてくるようだつた。水の冷たさが肌から体内に染み込み、熱帶夜の苛立ちを沈めてくれる。

素麺をシンクに置いて待たせ、白出汁の用意をする。大きめの器に白出汁と水を自分量で入れていく。人に出すわけではないのだから、適當でいい。つゆが用意できたら、素麺をざるからそのままばしやつと移し、最後にトッピングの梅干しとねぎ、白ごまをざばつと振りかければ、白出汁素麺の完成だ。夜食に映えは一切必要ない。一に美味しさ、二に手軽さだ。三は特に思いつかなかつた。

麦茶も用意し、手を合わせる。

「いた…………あつ、氷入れようと思つてたんだつた」

慌てて冷凍庫から氷を出し、つゆに放り込む。気を取り直して、手を合わ

せる。

「いただきます」

キッチンの灯りを反射して白く輝く素麺をすくつて口へ運ぶ。

「んぐ、んん。冷たい。生き返るわ」

この冷たさのおかげでのどごしが最高だ。白出汁にしたことで全体的に柔らかくござつぱりとしている。そしてなんといつても梅干しの存在感が大きい。最初にすっと酸味を伝えてくれるが、その後に続く白出汁と素麺が、この酸味を良い感じに調和させてくれる。完全に無くすのではなく、後味には梅特有のさっぱりとした風味を残してくれるのが最高だ。氷を入れたことでキンキンに冷えているのが、この熱帯夜にはさらにいい。キンキンに冷えた麦茶と交互に食べ進め、あつという間に食べ終えてしまった。

ふう、とおなかをさすりながら一息つく。満点、満腹、満足だ。この満足感が、私の心を守る盾となる。落ち着いたからか、ふと「これから」を考えてしまう。夏休みが始まれば朝から晩まで勉強漬けだとか、部活引退で運動しなくなるから太るかなあ、とか。色々な「これから」が思い浮かんできて

しまう。

「ああ、もう！ 関係ないっ！」

頭を振り、その思考をぽろぽろと振り落とす。関係ない。そう、関係ないのだ。未来のことなんて明日の私が考えればいい。今はただ、素麺のくれた幸福を抱えながら夜を越すことだけ考えればいい。だから、今やるべきことは後片付けだ。後片付けまで含めて、この夜のおまじないは完結するのだから。

ピーターパンが来ないから、私は私に私を押し付ける。

第三夜 ピーターパンが来ないから焼きおにぎりをつくる

はあ、と一つため息をついて、のそのそと緩慢な動作で食材をあさりだす。以前と私の様子が異なる理由はただ一つ、迷うようになってしまったからだ。何に？ 夜食を作ることに。おまじないを続けることに。周囲も自分も、一刻と変わっていく。部活を辞めてから、見た目は変わらないものの、体重

は一・五キロほど増えた。それでもおまじないを止めることはできなくて、するすると続けてしまう。先週は、ニキビが二つ同時にできてしまった。自分が「ちゃんと」できてないんじやないかって不安で眠りにつけなかつたこともある。夏休みだって友達と一緒に夏祭りに行けたし、母さんとは映画とハイキングに出かけた。ちゃんと楽しくつて、充実した夏休みを過ごせたのに。その思い出が押しつぶされちゃう。なんだか、最近ずっと上手くいかない。どうして、止まれないんだろう。どうして、大人になつていくんんだろう。ピーターパンの薄情者め。私の手を引いて、連れ出してはくれない。

夜食づくりも、以前のように積極的に頑張る気になれない。でも、全部を諦めてしまうのは、多分違う。もしかしたら明日の朝、後悔するかもしれない。明日の私は「馬鹿、何で食べちゃつたの」って責めるかもしれない。それでも、作っているとき、食べているときだけは必ず「幸せ」だから。この幸せがある限り、いつか、きっと何とかなるつて自分を励ますんだ。

「久しぶりに、焼きおにぎりとか食べたいかもな……」

ぼそりと呟く。私が食べたいと言ったのだから、焼きおにぎりで決まりだ。

明日の私が今日の私を責めるのなら、今の私が今日の私を甘やかしてあげなければ。

そうと決まれば、さつそく作ろう。まずは冷凍ご飯を電子レンジで解凍する。ブウウンと電子レンジが作動する中、冷蔵庫にあつた一つのタッパーを手に取る。ふたを開けると、中には母さんが作ってくれた南瓜の煮つころがし。作り置きのものは食べてもいいって言われてるし、ちょっともらおう。大きくごろごろとした南瓜を四つほどお皿に移す。電子レンジはまだ音を立てて働いている。手持ち無沙汰に、お皿の上の南瓜をじつと見ている。それは目にいたいほどの鮮やかな朱色をしていて、どこをとつてもつやつやと綺麗だ。流石は秋の色だなと、ぼんやりと思う。いつの間にか季節は進んでいた。そういうばあ街路樹も紅葉が進んでいたかもしれない。

ピーッ、ピーッ、ピーッと電子レンジが知らせ、扉を開ける。熱いご飯をあちつ、あちつとわたわたしながら取り出し、ラップを開く。ぽわつと湯気が立ち上るとともに、お米のいい匂いが漂つてくる。ほかほかと湯気を立てるご飯をお茶碗に移したら、醤油、みりん、和風だしを混ぜていく。白米が

調味料で均一に色づくように、しっかりと混ぜ終えたら、もう一度ラップで包んでおにぎりにしていく。ぎゅつ、ぎゅつと、焼いてる間に崩れないよう少し固めに握っていく。そうして握ってできたのは、綺麗な三角形ではなく、すこし、いやかなり丸っぽいおにぎりである。昔から、どう頑張つても三角にならない。いびつな形。だが、これもまた愛嬌というやつだろう。

お次はいよいよ焼いていく。フライパンにごま油を敷いて温まつてきたら、直前に握ったおにぎりをそつと置く。焼きおにぎりがフライパンに触れると同時に、ぱちっ、ぱちっとはじけるような小気味良い音と、じゅううと唸るような重低音が合わさつて聞こえてくる。その音とともに運ばれてくるのは、醤油の焦げる香ばしい香りだ。この匂いに抗うことはできない。思わず涎をごくんと飲みこんでしまう。じゅうじゅう、ぱちぱち。おなかも共鳴し始めた。

五分ほど経ち、焦がしすぎる前に一度ひっくり返してみる。慎重にフライ返しを差し込み、こびりついていないことを確認して優しくひっくり返す。現れた面は、醤油の色が濃くなりつやつと光っていた。そしてなにより、

全体的に綺麗な焦げ目がついている。濃い目の茶色と黒い焦げ目のコントラストがたまらない。多少焦げのあまい所もあるが、このアンバランスさがまたいいのだ。

この間に最初に出しておいた南瓜を電子レンジで温める。焼き終わつてから温めるとおにぎりが冷めるし、温めなおしてから焼いたら逆に南瓜の方が冷めてしまう。焼きおにぎりも南瓜もどつちも温かい状態で食べたいからね。三十秒、二十秒、十秒、五、四、三、二、一。ゼロになつた瞬間に扉を開ける。お皿を取り出すと、湯気にのつて南瓜の甘い匂いが強く漂つてくる。ほくほくとしていることで、冷蔵庫から取り出した時よりも幾分か美味しそうに見える。南瓜が温まつたので、残るはおにぎりだけだ。時間的にはもうそろそろいいはずだと判断し、もう一度フライ返しを差し込み、ぽんと軽くひつくり返す。

「よしつ」

現れた面にもこれまでこんがりと焼き目がついていた。これは上出来と言つていい。いそいそと焼きおにぎりをフライパンから南瓜のお皿へと移す。

これで完成だ。食べる前にコップに一杯、冷たいほうじ茶を注ぎ、しつかりと手を合わせて、

「いただきます」

まずは焼きおにぎりから。ふうふうと冷まして、いざ！

「はふつ。…………うん、うん、うまい」

醤油の香ばしい匂いとうつすら香るごま油の匂いが鼻を抜ける。外はパリッと固いのに、中の方は柔らかいまま。醤油に、焦げの食感やちよつとした苦みがアクセントを加えてくれる。大満足だ。ここで、南瓜を一口いただき。大きくごろんとした南瓜に箸を入れると、ほろほろっと崩れていく。わくわくしながら口に運ぶと、それはもう美味しかった。南瓜本来の素朴な甘みに、嘷むたびにぶわっと染みこんでいた煮汁が押し寄せてくる。ほくほくの南瓜と甘じよっぱい煮汁は、どちらもほつとするような、安心感を与える組み合わせだ。口の中が混雑したこのタイミングでほうじ茶を一口飲む。すつきりとした口当たりが、口の中をリセットしてくれる。そしてまた焼きおにぎりをほおばる。この心地よいサイクルが、私を不安から遠ざけてくれる。

おまじないをやめたくない、でも、やめたい。自分のことなのに、あんまりよくわからない。どうすればいいのか誰も教えてくれないから、苦しいのかもしれない。でも、もし誰かが「やめろ」って言つたら、やめるのかな。

「美味しかった。ごちそうさま」

美味しかったんだよ、本当に。幸せだったの。この幸せはちゃんと明日に持ち越せるかな。持ち越せたなら、明日の私は今日の私を責めないのに。

ピーターパンが来ないから、苦しい。

#### 第四夜 ピーターパンは来ないけど

受験まであと二週間を切つた。刻一刻と迫る時間に、いくらやつても勉強が足りない気がする。焦燥感とイライラがぐるぐると身体の奥底を埋め尽くす。うう、とうめき声を上げつつ、どさつと勢いよく机に突つ伏す。ごん、と額がぶつかる鈍い音がしたが、痛みを感じる気力もない。ノートに頬をべたりと押し付けたまま、はああ、と深く大きくため息をつく。

「疲れたあ」

ぼそりと絞り出すような声で呟く。もし落ちてしまつたら？ これまでの努力が報われなかつたら？ 不安が無限に広がり、そつと目を閉じる。まだ寝るには早いし、眠くもない。ただ単に、何もかもが億劫で、やる気が起きないだけだ。

そのまま何分経つたのか。コンコンと部屋の扉が控えめにノックされた。私はのつそりと顔を上げながら「なあにー？」と返事を返す。すると、ガチャリと扉を開けて母さんが顔をのぞかせた。

「勉強ちゃんと頑張つてるー？」

「今やつてる！ なんか用？」

私は少しむつとして、苛立ちを滲ませながらぶつきらぼうに答える。そんな態度を、母さんは気にした様子もなく続けた。

「今、卵焼き作つたら食べる？」

「……えつ、なん、なんで？」

私は不自然なほど動搖してしまつた。夜食を食べていることがバレたのだ

ろうか？ 心臓がドクドクと鳴り、この音量が母に聞こえてしまうのではな  
いかと不安になる。

「勉強頑張つてのなら夜食にどうかなと思つて。いらなかつた？」  
「……いる」

少し不貞腐れたように言う。私の夜食は、誰にも知られてはいけない特別  
な行為、秘密のおまじないだつたはずだ。母の「夜食にどうかな」という普  
通の一言は、それが怒られるようなものでもなく、ただのありふれた夜食だ  
と思い知らされたような気がした。私がきらきらした宝石だと思つていたも  
のは実は安価なプラスチックだつた、というような、ひどい落胆に襲われる。  
私の不機嫌が伝わつたのか、母さんが少し眉を下げて言う。  
「別に、無理に食べなくてもいいんだよ？」

「食べたいから食べるの！」

対照的に私は眉を上げて投げやりに答える。まるで子供の八つ当たりだ。  
大人になりたくないとは思つていたけど、こんなふうに情けない形で駄々を  
こねる子供になりたかつたわけじやない。自分の態度が情けなくて仕方がな

い。

「そう？　じやあ作つちやうからね」

母さんは微笑みながら、そつとドアを閉めた。とんとんと階段を下りる音を聞いてから、私はがばっと勢いよくベッドに転がり込み、枕に顔を埋めて叫ぶ。

「んむううううう…………」

たつた二、三分のやり取りなのに、後悔の念が次から次へと押し寄せてくる。このままだといつまでも起き上がれないと確信していたため、無理やり反動をつけてベッドから起き上がる。運んできてもらうのはさすがに申し訳ないと思い、キッチンまで取りに行こうとするが、部屋のドアを開けようとして、ドアノブを握ったまま立ち止まる。やっぱり気まずい。運んできてもらう方がいいかな。ドアノブを握ったままの手から、ひんやりとした金属の冷たさが失われていく。大きく深呼吸し、ええい、ままで！　とドアノブに力を籠め、勢いよく扉を開けて部屋を出た。

とん、とんと一段一段静かに階段を下りていく。キッチンへ向かうと、ふ

んわりと出汁と卵の混ざった食欲をそそる匂いが漂ってきた。キッチンではちょうど母さんが卵焼きを巻いているところだった。私が下りてきたことに気づいた母さんが、フライパンから私へと目線を移す。

「あれ、来たの。部屋にいてよかつたのに。何かあつた？」

「ん、いや別に。何となく」

ぶつきらぼうな返答に、母さんはただ一言小さく「そっか」とだけ返した。

「もうちょっとでできるから、待つてね」

そう言うと母さんは目線を戻し、慣れた手つきで綺麗に卵を巻いていく。じゅうじゅうと音を立てる卵焼きが黄色だけではないことに気づいた。

「あ、何か混ざってる」

「気づいた？ 特別にしらすとねぎも入れてあげたからね」

「へえ……ありがと」

「受験勉強頑張ってるからね。ちょっとしたご褒美」

母さんはこちらに視線を向けることなく言う。それが何だかともむず痒くて、居心地が悪くて、「普通だし」とまたもやぶつきらぼうに返事をしてし

まつた。母さんは小さく笑つてから、「ほらできた」とまるで芸術作品のように角が整つた卵焼きを見せてくれた。

「切つちやうから、お皿出しておいて」

私は「はあい」と間延びした返事をして、戸棚の中から少し小さめの平皿を取り出す。まな板の上では、一点の曇りもない完璧な卵焼きが、母さんの手によつて等間隔に切り分けられていく。ふわりと出汁と卵の香りが湯気に乗つて夜の空気をやわらかく染める。

「……上手いね、卵焼き」

あまりに手際が良く、出来栄えが完璧だつたため、気づいたら声に出ていた。すると、母さんは虚を突かれたようにきょとんとした表情で私を見たあと、ゆっくりと笑つた。

「何さ、今更。昔から食べるでしよう?」

「……でも、今思つたから」

「そう、ありがとうね。ねえ、覚えてる? 昔のあんた卵しか食べなかつたのよ。一時期卵以外は何を出してもいやだいやだつて突っぱねる時期があつ

たの」

母さんは包丁を握る手を止め、懐かしむように遠い目を細めた。

「その時期があつたからよ、綺麗な卵焼きが作れるのは」

「……そんなの覚えてない」

ひどく照れ臭くつて、目線をきよろきよろと動かしながら、気にしない風を装う。母さんはそんな私を気にせずに「ほら、できたよ」と皿を渡してくれた。綺麗に切られた卵焼きからは、まだほんのりと湯気が立つていて。

「へへ、ありがとう。美味しそう」

「んむ、どういたしまして。ちゃんと美味しくできたよ」

「？ あつ、今切れ端食べた？」

「あはは、食べたよ、目ざといねえ。こういう端っこは、作った人だからこそ食べられる特別なところだよ」

そう言つて母さんは、いたずらっ子のような笑みを浮かべた。私もわかる。特別なところ。きっと卵焼きの端っこには、作ってくれた人の頑張りや、愛情が詰まっている。だから、綺麗な断面だけじゃなくて、少し歪な切れ端も

私が食べたかった。ほんのちょっと残念。

ずっと聞きたかったこと、今なら聞けるかも知れない。

「…………ねえ、高校生になつたらさ」

「ん、なに？」

「えっと、その、お昼つてどうするの？」

本当は「お弁当作つてくれる？」って聞きたかった。でも、母さんは忙しいだろうし、万が一違つたらどうしようつて思つて、怖くて。今だつて母さんの顔を直視できない。

「そりやあ、お弁当作るよ」

ぱつと顔を上げると、母さんは当然のことのような顔をしていた。

「まあ高校入つたら夜勤はちょっと増えるかもしれないけど、それでも作れるときは作るよ。…………なに、寂しくなつちやつた？　まだまだ子供だねえ」「ちがう、気になつただけ」

少し声が震えちゃつたかもしれない。でも、嬉しくつて、心から嬉しくつて仕方なかつた。まだ甘えられるつてわかつて安心しちやつた。私の頬も耳

も熱い。

「あつ、ありがとつ。夜食作ってくれて！」

箸をつかみ、ばつと背を向けて逃げ帰るように部屋へ戻ると、まだ熱い頬をそのままに卵焼きを食べる。卵焼きの温かさがじゅわっと口の中に広がる。それとシンクロするように、母さんの声もゆっくりと心にしみていった。ねぎとしらすの入つたちよつぴり豪華な卵焼き。何だかいつもよりしょっぱい気がしたけど、すごくおいしい。涙がにじんで、気づけば頬がゆるんでいた。空っぽの皿を見つめるころには、あんなに重かつた身体が、ポカポカしてほぐれたみたいに軽くなっていた。いつか、このおまじないのことも、笑つて話せたらいいな。ピーターパンが来なかつたから、料理が上手になつたんだつて。最後にぱちん、と手を合わせたら、

「ごちそうさまでした」

ピーターパンは来ないけど、寂しくないよ。

## あとがき

皆さんは初めて食べた夜食を覚えていませんでしようか。私は小さな缶のぶどうジュースです。果たして「食」かと言われば微妙な気もしますが、當時の十歳にも満たない私にとっては、深夜に親に隠れてこそそと飲んだあぶどうジュースこそが初夜食でございました。主人公は初めて夜食を作つたとき、どんな気持ちで、何を作つたのでしょうか。

さて、この話の主人公にとつて、「夜」は二つあります。母親のいる安心できる夜、そして一人きりの孤独な夜。これは私の主観ではありますが、一人きりの夜は、普段よりも音を気にするよう思います。それは、防犯のためであつたり、恐怖心によるものだつたりと理由は様々ですが、どんな小さな物音でも耳に入りやすくなります。冷蔵庫のモーター音や、救急車のサイレン。それらが孤独の中では大きく響き、時に不安を増幅させます。けれど、そんな夜だからこそ彼女は台所へと向かいます。食材を探す音、包丁の小気味よい音、油のはぜる音。それらは孤独を強調するどころか、むしろ「自分

がここに生きている」という確かな実感を与えてくれるのです。夜食を作るという行為が、彼女にとつては恐怖や寂しさを和らげるおまじないであり、自分の存在を支える小さな証でもありました。

この話を読んでくださった皆さんの中にも、それぞれの「夜食」が浮かべば幸いです。それは食べ物に限らず、音楽や読書や、ひとりの時間を支えてくれる小さな習慣かもしれません。夜を越えるための自分だけのおまじないを、どうか大切にしていただければと思います。

最後までお付き合いください、ありがとうございました。



# 100万円のマジック

石橋わたる

道端で一人泣いている少女がいた。すると、通りすがりの男性がハンカチを差し出す。その男性が指を鳴らすと、一瞬でハンカチが一輪のバラへと様変わりする。

「おじさん、だあれ？」笑顔になつた少女が問いかける。

「おじさんは、通りすがりのマジシャンさ」

カウンター席で一人うなだれて酒を飲む男がいた。名前は犬塚翔。普通の大学を卒業し、普通の会社に就職し、順風満帆とはいからくとも、平和で平凡な日々を過ごしていた。

あの日までは——。

「マスター、聞いてくれよ」

あからさまに肩を落としたような声が、店内にどんよりと広がる。BARの名は「シルトクレー<sup>テ</sup>」、名前の由来はマスターに何度か聞いたが、一向に頭に定着しない。

店内にはカウンター席に犬塚を含めて三人、店の奥側にあるソファ席に

カツプルが一組と、深夜一時という時間もあってか、かなり落ち着いた雰囲気である。

「なにか、お困り事ですか」

ここマスターはとても綺麗な女性で、マスター目当てに来る客もそう少なくない。言わざもがな、犬塚もその一人である。仕事の愚痴をこぼしたり、人生相談をしたりと、特に趣味もない彼にとつて、ここで時間はまさに至福の時間であった。

「この前、付き合ってる子がいるって話したと思うんだけど」

犬塚には付き合って三ヶ月になる白鳥美香という彼女がいた。大学時代の遠い遠い友達、というか友達とすら呼べないほどの、語学授業で一緒だっただけの虎太郎だか虎之助だかいうやつからの紹介で付き合った女性であった。

白鳥は決して美女ではなかつたが、品があつて、知的な女性だつた。

そして何より、犬塚と波長が合い、結婚するならこの人しかいないとまで感じさせるような女性であった。

そして、今から一週間前のことである。

犬塚は彼女からの「結婚したい」という猛アプローチを受け、プロポーズに踏み込んだ。確かに時期尚早な気はしたが、どうせ自分には白鳥しかいなないと決め込んでいた犬塚にとつて、遅かれ早かれ結婚するつもりだつたため、決心をした次第である。何事も早いに越したことはない。

「こちらこそよろしくお願ひします」

プロポーズは成功だつた。

「でも弟の手術費に100万円必要なの」

プロポーズは失敗だつた。

典型的な結婚詐欺だつた。恋は盲目とはよく言つたものだ。犬塚は何の疑いもなく、貯金を全て彼女に手渡した。妻の家族を大切にするのは当たり前のことだと心の底から思つていたのだ。

その日は眠れなかつた。100万円をあげたことなど忘れ、ただただ白鳥との婚約生活のことを考えては浮かれていた。おそらく寝てしまつた彼女からの返信を楽しみにしつつ、目を閉じた。

しかし、朝になつても、夜が来ても、また朝になつても、返信が来ることはなかつた。

事故にでもあつたのではないか、そう思い、駅まで無我夢中で走り出す。白鳥の家までは二駅。いや、白鳥の家だと思い込んでいた場所まで二駅だつた。

電車の中、自分の力では急ぐことができないという焦燥感に駆られ、唯一の共通の友達である虎野郎に電話をかける。

「おかげになつた電話番——」

すぐに電話を切る。そこにはただ認めたくない現実だけが宙に浮かんでいる。

それなのに、自分の足にはどつかりと重力がのしかかつてくる、そんな感覚だ。

駅に着き、もう走るのはやめて、牛歩の如く、重く、ゆっくりと歩き、白鳥の家へ向かう。

「ただ、ずっと寝ていただけかもしれない」

そんな可能性は雀の涙ほどしかないとわかつても、犬塚はそう信じるしかない。

少し寂れたアパートの二階。一番角の日当たりの良い部屋。インターフォンを押す。扉が開く。俯いていた犬塚は一縷の望みを賭け、顔を上げる。そこには見ず知らずの老婦の姿があつた。

犬塚は、頭が真っ白になつた。

「……あの、白鳥、白鳥美香さんは、どちらに……」

絞り出した声は酷く掠れていた。

「白鳥さん？ 存じ上げないねえ、部屋間違いじやないかしら」

老婦は犬塚を明らかに不審がり、警戒してはいたが、丁寧に対応してくれた。

「……でも、ここは二〇五号室ですよね？」

「ええ、そうよ。もういいから」

様子がおかしい犬塚を見て、危険を察知したのか、老婦は態度を変え、会話に終止符を打つ。

扉が閉まるのと同時に、犬塚の膝はマンションの廊下のコンクリートに沈

んだ。コンクリートの冷たさだけが残つていた。

「結局、恋人も貯金も全て失つたつてわけですか」と、グラスを拭きながらマスターは犬塚に同情する。

犬塚は、タバコを取り出し、無心で火をつける。この苦さが今はちょうどいい。恋人を失い、タバコを始めた犬塚は、愛用しているシャツの胸ポケットにタバコを常備するようになつていた。

「ちなみに、その眼帯は……」

「ああ、これは最近泣きすぎて、目が腫れちゃつてさ」

そんな会話をしていると突然、カウンター席の一つ空けて隣の席の五〇代ほどの男性に話しかけられた。

「その100万円取り返しに行くというのはどうでしよう」

その男性はタキシードに、整えられた髭、白髪、丸メガネという、いかにもマジシャンを具現化したような人間だった。頭のてつべんからつま先まで、胡散臭い見た目をしている。

「厄介な客に絡まれた」そう思いながら、マスターの方に視線を送ると、「やれやれ」という表情を浮かべながらもグラスを拭き続けた。

「マスターが止めないということは、そこまで悪いおじさんではないのだろう。これも何かの縁だ、話だけでも聞いてみるか」そう思い、エセマジシャンの話に耳を傾けてみる。

彼の名は猿川雅史、元マジシャンであると。

「私が君に協力してその100万円を取り返してやると言つているんだ。悪い話じやないだろう？」

「あんたに何のメリットがあるんだ」と猿川の言葉に大塚は怪しさを感じた。つい先日、結婚詐欺をされた男は、そう簡単に人を信じることはできない。

不審がる大塚に対し、猿川は「ただの善意だよ、善意。困っている若者を助けたいだけさ」と陽気に振る舞つた。

ますます怪しい。

「じゃあ、ゲームをしよう。マスター、紙コップはあるかい？」

猿川はそう言い、マスターから受け取つた二つの紙コップを、底が上に向

くように、カウンターに置いた。

「タバコ、もういいのかい？」犬塚は猿川にそう言われ、灰皿に目を落とす。

「ああ、あんたの話に夢中で吸うのを忘れてたよ」

そう言いながら、タバコの火をグリグリと消した。

「それは申し訳なかつたね」猿川は慣れた手つきで、タキシードの中から布製の赤いボールを取り出し、右側の紙コップにボールを入れる。そのボールは丁度スッポリ紙コップの中に収まつた。

「カップ＆ボールという遊び、一度くらいやつたことがあるだろう？」

カップ＆ボールという言葉は聞いたことがなかつたが、おそらく、どつちにボールがあるでしよう的なあれだろう。

猿川は二つの紙コップをシャツフルしながら「もし君が、ボールがある方を当てたら、一杯奢つてあげよう。外したら、私と一緒に100万円取り返しに行こう。どつちに転んでも悪くはないと思うがね？」と提案する。

「100万なんて取り返せるわけないだろ。酒一杯奢らせて帰るとするか」

犬塚は上手く乗せられ、勝負に応じる。

油断しているように思えるが、この間、犬塚はボールが入った紙コップから目を一時も離さなかつた。

「さあ、どつちかね？」シャツフルを終えた猿川が問いかける。

「左だ」

「それは君から見て左かい？ それとも……」

「俺から見て左だ」

猿川は笑みを浮かべながらゆつくりと紙コップを上げる。

犬塚は自分の目を疑つた。なぜなら、そこにボールがないからだ。

「どうやら私の勝ちのようだね」

猿川にそう言われ、悔しさのあまり右側の紙コップを持ち上げる。中には

入つているはずのない赤いボールが。

「たしかに左側だつたはず……」

驚く犬塚に対し、猿川はこう続ける。

「約束通り、一緒に100万円取り返しに行こうか」

「ああ、わかつたよ。そのかわり、どんなズルをしたのか教えろよ」

「ズルとは人聞きが悪いな。簡単な話さ。最初から両方にボールが入つていたのだよ」

猿川はそう言い、左右両方の紙コップを持ち上げる。

たしかに、中からは赤いボールが二つ出てきた。

「でも、なんでさつきは左に入つていなかつたんだ」

犬塚は絵に描いたように困惑していた。

「君は純粹な男だね。中のボールを紙コップと一緒に持ち上げたんだよ。古典的なマジックだが、ボールが一個だと錯覚していたら案外、引っかかるものだよ。最初からどっちを選んでも当てることはできなかつたつてわけさ」

うすら笑いを浮かべ、猿川はさらに続ける。

「マジシャンが観客に何かを選ばせる時は、もうすでに答えは決まっているのだよ」

犬塚は腹が立つた。

「ちなみに、私がタバコの話題を出した時に、君は灰皿に目を落としただろう？ その隙にもう一つのボールを紙コップに忍び込ませたのさ。まあ、い

わゆる、ミスディレクションってやつさ」

聞いてもいなことをベラベラと。こういうおじさんにはなりたくないものだ。でも、きっと最終的には、自分がなりたくないと思つたおじさんに自分自身もなつていくのだろうなと思つてしまい、このおじさんに情が移つてしまつた。

「おじさん、あんたの勝ちだ。100万取り返す策はあるのか」

「もちろんだとも。まず、君から金を騙し取つたのは、おそらく『Rabbit』だろうな」

「Rabbit?」

「ああ、最近、巷で話題の詐欺集団だ。結婚詐欺から振り込め詐欺、マルチ商法にネズミ講、闇カジノまで、その辺の犯罪は全てやつていると言つても過言じやないな」

「そんなやつから金をどうやつて取り返すんだ? 詐欺師に詐欺するなんてできるのか?」

大塚は現実的に厳しいと考えていた。それは猿川も同じである。

「いくらマジシャンでもそれは厳しいな。だから今回狙うのは闇カジノだ」  
自信ありげな表情の猿川を見て、このおじさんならできるかも知れないと思  
少しだけ思つてしまつた自分に犬塚は落胆した。  
しかし、ここまできたらやるしかないと

「闇カジノの場所の目処は立つてある。決行は明日の夜、もう日付が回つて  
いるから今夜と言つた方がいいかな？」このBARで落ち合おう

「何で場所まで知つてるんだよ」

「マジシャンだからだ」

マジシャンはそんな便利な言葉じやないだろう、と思いつつ、あまり詮索  
するのはやめた。

「では。マスター、会計は彼につけておいてくれ」

「そう言いながら猿川は席を立つ。

「おい！ こつちは 100 万失つて……」

そう言う犬塚に、猿川は間髪を入れずに「100万円は取り返すんだ。問

題ないだろう？」

猿川はそう言い残し、店から颯爽と出て行つた。

「やあ、待たせたね」

「何時間待たせるんだよ」

「許してくれ、マジシャンだから」

段々、マジシャンの定義が曖昧になつてゐる気がする。

B A R の外に出ると、一台の黒のファミリーカーが止まつていた。運転席にはおそらく犬塚より少しだけ年上だと思われるふくよかな男性が座つていた。

猿川が後部座席のスライドドアを開けながら「悪いね。木嶋くん。よろしく頼むよ」と挨拶をする。犬塚も状況が飲み込めないながらも「お願いします」と当たり障りのない言葉を車内に放つた。

「猿川さん、あんたも人使いが荒いぜ」と木嶋はボサボサの髪をかきむしりながら小言を言う。

猿川は、木嶋の発言をひょろりとかわしながら、犬塚に一枚のカードを渡

す。

「カジノに入るための会員証だ。無くすんじゃないぞ」  
顔写真付きのカードを渡され、どうやつて作ったのか疑問に思つたが、聞いたところで返つてくるのはあの言葉だろう、と思つたので、聞くのはやめた。

しばらく車を走らせた後、「ここ地下にカジノがあります。俺はここで」  
木嶋はそう言つて、一人を街のはずれにある廃墟ビルの前で車から下ろした。  
いよいよこの作戦が現実味を帯びてきて、犬塚は唾を飲み込む。

その緊張を察したかのように猿川は「大丈夫だ。君にはマジシャンがついている」と言い、ビルの中に足を踏み入れる。

薄暗い階段を下つてゐるのに、心拍数は上がつていく。

「会員証を」

重そうな鉄扉の前でセキュリティが二人に声をかける。スーツ姿の上からでもわかるくらいムキムキの彼に刃向かつたら、きっとひとたまりもないだろう。

予定通り、偽の会員証を見せるとボディエックが始まる。特に大したものは持つていなかつたが、唯一、胸ポケットにタバコと一緒に入れていたライターだけが没収された。危険物は持ち込めないのだとか。

そして、意を決して鉄扉を開ける。やはり重かつた鉄扉が開くと、遮断されていた光と音が一気に飛び込んできた。

耳をつんざくジャズのBGM。高揚感を煽るドラムとトランペットが、心臓の鼓動をさらに早める。

地下というだけあって窓は一つもなく、外の明かりは一切入つてこない。それなのに、至る所にあるスポットライト一つひとつが太陽のように眩しい。犬塚は、まるで異世界に来たかのような感覚に陥つた。

先ほどまで居た薄暗いところから、急に明るいところにきたせいか、しばらく視界がやられてしまつた。

心許ない視界で辺りを見回すと、身分が高そうな人や強面の人、テレビで見たことがある人がちらほらと、まさに闇カジノという雰囲気である。

カジノの雰囲気に圧倒されていると、カードゲームのディーラーをしてい

る一人の女性が目に止まつた。

彼女もこちらに気づき、目が合う。白鳥美香だつた。

白鳥は一度目を逸らしたが、ディーラーを交代してこちらを冷たい視線で拘束するよう見ながら近づいてくる。

「どうぞこちらへ」

感情がないような声で、白鳥は二人をカジノの奥へ案内した。奥にはカジノの中でも一際目立つ、よく言えば煌びやかな、悪く言えば成金趣味の下品な扉があつた。

そこはVIPルームだつた。

白鳥は何の躊躇もなく扉を開けると、部屋の中にどっかりと座る男に耳打ちをした。

獲物を狙うような目つきで「君が噂の子か」とその男は犬塚に対し、圧倒的強者のような表情で語りかけた。色黒でオールバックの男は、入口のセキュリティの一・五倍ほどの体格を有していた。

首元には光を反射するのではなく、まるで内側から光を放つように煌めく

ネックレス、右手にはおそらく売れば100万円は下らないであろう指輪を身につけており、金持ちを表現したような見た目であった。

「私はこの団体のトップ、鬼山だ。君の噂は聞いているよ。何でも、100万円も貢いでくれたそうじやないか」

聞いてもいらないのにベラベラと、うちのマジシャンと一緒にやないか、犬塚は思った。

「いきなりラスボスか、クライマックスに向けて徐々に盛り上げていくのがエンターテイメントなのだが」

沈黙を貫いていた猿川がついに口を開いたかと思えば、またマジックの話だ。

「このカジノで100万円取り返そうって魂胆かな？　ちまちま稼いだってしようがないだろう。ここはひとつ、私と勝負しよう」

鬼山はテーブルに移動しながら、さらにこう続けた。

「この勝負に君たちが勝つたら100万円返そう。その代わり、君たちが負けたら……わかっているね？」

犬塚は負けてしまつたらどうなるのか想像もつかず、生まれたての子鹿のように足が震えていたが、隣の猿川は「うむ。いいだろう」と落ち着いた表情で答えた。

「どうせ、マジシャンだから落ち着いているとでも言うのだろう。

「勝負の内容は……じやんけんだ。と言つてもただのじやんけんではない」

そう言つて鬼山はグーチョキパーそれぞれ三枚ずつあるカードを見せた。「この計九枚のカードからお互い伏せた状態で三枚ずつ配られる。その手札を使って三回ジャンケンをして勝ちが多い方がこの勝負の勝者だ。もちろん、一度使つたカードは使えなくなる。引き分けの場合はもう一枚ずつ配られ、それで勝負だ」

「なるほど。手札の運と出す順番の戦略性が試されるゲームか。これなら勝ち目はあるんじやないのか」

この犬塚の言葉に猿川は何か言いたげだつたが、条件を呑み、勝負を受け入れた。

「ディーラーは君に任せよ」鬼山は白鳥に目配せをして、カード配りを任

せた。

犬塚と猿川の手札はグー、グー、チョキの三枚。対して鬼山の手札はパー、パー、グーの三枚。組み合わせ的に鬼山がとても有利な手札である。

実際、普段ディーラーをしている白鳥であれば、たった九枚のカードを思い通りにコントロールすることは容易だ。

そのため、鬼山が有利な手札で、相手のカードも一方的に把握していると、いう状況が出来上がる。

犬塚たちの手札をすべてグーに、鬼山の手札をすべてパーにしなかつたのは、仕組んだことを怪しまれないためである。

「このゲームは運だからな。考えてもしようがないだろう」鬼山はそう言つて、パーのカードを裏向きにテーブルの中央に置いた。

鬼山がパーを選択したのは、相手の手札がグー、グー、チョキのとき、いきなりチョキを出して残りをグーだけにするのは人間的心理的に考えづらいと思つたからだ。

一方で、犬塚は猿川に選択を任せた。なぜなら彼はマジシャンだからだ。

猿川は右手に持つ三枚のカードから、真ん中のカードをそつと中央に置いた。

「セツトが終わりました。ではじやんけんポンの合図で、同時にめくつてください。では、いきます」

「じやんけんポン！」

猿川と鬼山は二人で発声したのと同時に、中央のカードをめくつた。

鬼山のカードはパー。猿川はチヨキだった。

「一回戦、猿川様の勝利」

「よし！ まずは一勝！」犬塚は喜びの声を上げた。

「いきなりチヨキを消費するとはなかなかやるな。しかし、やつらの残りはグーが二枚。私はパーとグー。結果は一勝一敗一分けになる。サドンデスに持ち込めば、白鳥が私をかたせてくれるはず。この勝負、もらつたな」

鬼山がそう確信していると、猿川の右手からひらりとカードが一枚テーブルの下に落ち葉のようにこぼれ落ちた。

思わず、その場にいた全員がカードに目をやる。落ちたカードはグーだつ

た。

「おつと、これは失敬」

「おじさんなにやつてんだよ！ 相手にカードを見られるなんて一番やつちやいけないだろう！」

「大丈夫さ。だつてマジシャンだから」

そう言う猿川に不満げな犬塚だが、ゲームは二回戦へと突入する。

「じやんけんポン！」

鬼山はグー。猿川もグー。

「二回戦、両者引き分け」

「引き分けか、次が勝利か引き分けなら……。もし負けてもサドンデスに行くだけだ」

そう安堵する犬塚に対し、鬼山は「予定通り次は私が勝つてサドンデスでも勝利だな」と心の中でやりと笑う。

「では、三回戦参ります」

「じやんけんポン！」

鬼山のカードはもちろんパー。猿川は亀のようにゆっくりカードをめくる。見守る犬塚は唾をのむ。

「勝ちを願つたつて無駄さ。そいつの手はグー。私の勝……」

鬼山はそう言い切る前に言葉を詰まらせた。

猿川のカードはチョキだった。

「な、なぜ……てめえの手札はグー、グー、チョキだったはず」鬼山は白鳥の方を見る。白鳥も動搖していた。

「はい？ 私の手札はグー、チョキ、チョキでしたがね」と猿川はとぼける。周りが驚く中、この場で犬塚だけがタネに気づくことができた。

「そうか、カードを一枚落とした時に、テーブルの上のチョキと手札のグーを入れ替えたのか。これがあの時言っていたミスディイレクションってやつか」と心の中で感心していると、鬼山が猿川に右手を差し出した。

「素晴らしい勝負だったよ。約束通り100万円は返そう」

なんともあっけなく負けを認めたことを不審に思つたが、二人は握手を交わす。

「とでも言うと思つたかコラ」

予想通り、鬼山は態度を変え、猿川の手を固くつかみ離さなかつた。

後ろの扉からは続々とスーツ姿の男が入室してきては、二人を囲いだした。

「まずい、逃げないと」

犬塚がそう思つたとき、カジノの照明が一気に消えた。

「さあ、マジックの花形、脱出マジックの時間だ！」

聞いたこともないような大きな声で叫ぶ猿川とは裏腹に、犬塚は視界が真つ暗になり、動搖するが、猿川の「眼帯を外しなさい」という声に体が勝手に動いた。

カジノの明るさにも触れず、しばらく目をつぶつていた左目は、暗闇にもすぐに慣れた。

視界を失い、あたふたする鬼山の手を猿川から振り払い、カジノの外へ走つた。

「二人ともこつちだ」

外には木嶋が車で待機しており、なんとか逃げ出すことに成功した。

「何とか逃げたんだけど、100万は取り返せなかつたよ」

翌日、相も変わらず、犬塚は『シルトクレー』にてマスターに愚痴をこぼしていた。

「やあ」

声の方向を見ると、そこには猿川の姿があつた。

「結局、100万はだめだつたじやねえか」

「君はそう言うと思つてね。最後に私と勝負しよう」

猿川は両手をグーにして前に突き出した。

「両手どちらかに鬼山がつけていた指輪が入つてゐる。売れば100万円くらいいするだろう」

「最後の握手のときに盗んだのか」

「盗んだとは人聞きが悪い。当てられたら君にやろう。はずしたら私のものだ」

「左だな」

「それは君から見て……」

「俺から見てだ」

猿川は選ばれた手をゆっくり開く。  
空っぽだつた。

「残念。私の勝ちのようだ。では」

猿川は犬塚の右肩をポンポンと二回叩き、姿を消した。

犬塚は自分の選択を後悔していると、猿川の言葉を思い出した。  
「マジシャンが観客に何かを選ばせる時は、もうすでに答えは決まつていて  
のだよ」

「あの野郎、最初からどつちにも指輪なかつたんじやねえのかよ」

苛立ちながら胸ポケットからタバコを取り出す。

タバコと一緒に、指輪がカウンターテーブルの上にこぼれ落ちた。

「一度失敗したと見せかけて、成功させる。これがエンターテインメントの  
基本さ」

猿川は一人でつぶやいた。

石橋わたる

## あとがき

小さい頃からマジックを見るのが好きでした。新聞のテレビ欄にマジックの文字があれば、片つ端から録画しては、擦り切れるほど何度も見ていました。

動画配信サイトでも、マジックの動画を見ながら練習しては失敗しての繰り返しの日々を送っていた頃を懐かしく思います。家には折れまくりのトランプと、折れ曲がったスプーンが多数。

親にマジックを披露すると褒められ、それが嬉しくて続けていました。当時の私にとって、マジックは生きがいの一つと言つても過言ではなかつたです。

でも、いつからでしょう。マジックに興味がなくなつたのは。

年齢を重ねるにつれて、録画も動画も見なくなり、折れたトランプも曲がったスプーンも捨ててしまいました。時より、テレビでマジックが披露されても、タネを見破つてやろうと斜めから見てしまい、純粹にエンターテイ

メントを楽しむという視点を失ってしまったのです。

今回、小説の題材を考える上で、自分のルーツを辿った時、マジックが思  
い浮かびました。自称マジシャンの猿川は、昔の自分がなりたかった存在で、  
犬塚は今の自分だと思って書きました。猿川を書くにあたって、大切にした  
のは、心の内がよくわからない奇妙さと昔の自分のようにエンターテイメン  
トをこよなく愛する姿勢です。一方で、犬塚は今の自分のように、エンターテ  
イメントに対して斜に構えているが、本当は心が躍っているという様子で  
す。この犬塚の心情を描いているうちに、自分も心の奥底ではエンターテイ  
メントに心が躍っていることに気づくことができました。

また、お気づきだとは思いますが、猿川（猿）、犬塚（犬）、木嶋（雉）で  
鬼山（鬼）を倒すという桃太郎要素が含まれています。その他、さまざまな  
工夫もあるので、そこにも注目して読んでいただけると幸いです。ここまで  
読んでいただきありがとうございました。



アシンメトリー

味噌

綺麗な子だな、と思つた。

夜を全て閉じ込めてしまつたのかと思うほどの艶やかな黒い髪、アイドルらしいツインテール。つけまつげをしているのか、生まれつきなのか分からぬ長いまつ毛。

「チャームポイントはにっこり笑顔です！　この笑顔でいろんな人をメロメロにしちやいます！」

明るくて可愛らしく、良い意味で子どもっぽい声だ。

「みんなの理想のアイドルになれるよう！」とか、アイドルになりたい思いを身振り手振りで伝えて いる。

他のオーディション参加者たちも、私と同じくその子から目を離せない様子だつた。

もう少し、もう少しちやんと見たい。顔を少し左に向けた瞬間、ぎし、と静寂のさなかにパイプ椅子の無機質な音が鳴つてしまつた。審査員は私を一瞥する。

「では次、28番の方、自己紹介をお願いします」

いつの間にかその子のターンが終わっていた。……私の番だ。

「28番、宮口桃、東京都出身、十九歳です」

審査の中で何度も繰り返した言葉を、プログラミングされた機械のように口にする。

私は元々アイドルを目指していたわけではない。誰かに認めてもらいたいという承認要求の塊みたいな理由から、動画サイトに作詞作曲歌唱全てを自分で担当した曲を投稿していた。

人から褒められることも日常生活では少ないし、無名の投稿者だったが、動画サイトではかなりの確率で皆褒めてくれる。たまに「薄っぺらい歌詞」とか「自分に酔うな」とかコメントを残すアンチもいたけど。

そんな中、日課のネットサーフィンをしていたところに突如広告が現れた。「有名プロデューサーがプロデュース、新アイドルグループオーディション開催決定」

汚い世界にあつたそれは、ひときわ輝いて見えた。

⋮⋮ アイドルに、なりたい。

それは承認要求とは違う純粹な夢だ。

私がアイドルになることによつて、私のように引きこもつてネットの海に飲み込まれそうな人々に少しでも現実に希望を見出してあげたい。

よし、応募しよう。

過去に買ったはいいもののほとんど使つていなかつたメイク道具を引っ張り出し、顔写真と全身写真を撮る。そして基本情報や自己PRを入力して応募完了。

もし上手く書類審査が通つたら次は二次審査、そして最終審査⋮⋮アイドルになつて爆売れしてドームに立つて⋮⋮。

オーバーな妄想が止まらない。そんな妄想をしながら審査を受けていたら、いつの間にか最終審査まで辿り着いてしまつたのだ。

正直怖い。なぜこんな私が最終審査にたどり着いたのか正直訳が分からない。あんなにも自分がアイドルになつたときのことを想像してニヤついていたのに、いざここまで来ると正直恐怖が勝つ。

「宮口さんはなんでアイドルになりたいと思つたんですか？」

「引きこもつてばっかりだつたんですけど、そんな自分がアイドルになつて、可愛くなつてキラキラ輝ける存在になつたら、私と同じ境遇を持つ人に勇気を与えられるかな、と思つたことがきつかけです」

……やたらと視線を感じる。左隣を見るとさつきの美少女がキラキラした目でこつちを見ていた。やりづらい。

そのあとの歌唱審査では、私が一番好きなシンガーソングライターの曲を歌つた。少し声は震えたけれど、つものように実力を出せた気がする。

審査が終わつて、堅苦しい空気からさっさと逃げるよう参加者一同は控室になだれ込む。

控室は先ほどの緊張感が嘘のように華やかな雰囲気に包まれていた。参加者同士で雑談をしたり、次のダンス審査の不安を吐露する子、それに対して励ます子……。

やはり緊張感と恐怖感は拭えない。そんな不安を絶つように、自販機で適当に買った飲料水を飲み干す。

「さつきの歌声、本当にすごかつたです！」

唐突に話しかけられて口から水がこぼれそうになる。私の前に審査を受けていためちやめちや可愛い子だ。

「えと、どうも」

ペットボトルの蓋を閉めながら27番の子を見る。もう既にオーラが凄まじい。普段暗い部屋でブルーライトを浴びまくる私にとつては眩しすぎる。カーテンで光を遮断したいくらいだ。

「本当にすごいと思つたんですよ！　いいな、私もあんな風に自分を持てたらよかつたのになあ」

「……貴方も上手だつたと思ひますけど」

それっぽいことを言つた瞬間、27番の子はずい、と距離を縮めてきた。

「つな、なに」

「次はダンス審査ですよね？　一緒に特訓しませんか？」

「と、特訓って言つても、練習時間は30分しかないですよ」

「大丈夫です、私結構ダンスが得意で！　上手く教えられる自信が超～～あ

るんです☆

なんか語尾に星がついているような気がする。

「……何ですか？　自分の練習時間を増やした方がいいんじゃないですか」「うーん、なんか貴方のことが気になりました。真っ白で、何にも染まり切つていなかからこそ、素敵なアイドルにもなれるんじやないかなって」27番は首を少しがしげながら人差し指を顎に添えてそんなことを言う。仕草までアイドルだ。

「……私の行く末が見たいと」

「そう！　それが一番私の感情に近いかも！」

「こんな戦いの場で他人に協力するなんて……だいぶ変わった人だ。

「……分かりました。特訓しましょう」

「やつたー☆　うれしい！」

明るいオーラに圧倒される。ああ、こういう子がアイドルになれるんだろ

うな。

「宮口さん、こここの振りのとき、腕もう少し伸ばした方がいいかも！」

「は、はい」

「あと、一回後ろ向くときね、一応笑った方がいいかも、ほら、審査員に顔向けてないから休憩ゾーンっぽいでしょ？ でもさう後ろにカメラとかあって、もし撮られていたら怖くない？」

「あ、そうですね……たしかに」

「こういうの後々ドキュメンタリーで使われちゃうんだから！ だから後ろ向くときもにつこりしよ！ ほら、桃さん笑うとさらに可愛さに磨きがかかるから！」

「え、はい」

急に誉め言葉を投げかけるようなもんだから、困惑と喜びが混ざって変な相槌しか打てない。

とにかく付きつ切りで、27番は私の個性が發揮できるようにダンスの指導をしてくれた。

結局、その後のダンス審査はボロボロだった。右にステップを踏もうとしたらなぜか左に行くし、脳の指令に身体が追い付いていない。せめて表情とポージングだけ全力で……と思つたが、ぎこちない笑顔とぎくしやくしたポージングを審査員に披露してしまつた気がする。

27番は完璧だった。振りも間違えることなんてほとんどなく、なにかの舞台に立つているようなしなやかな動きに魅せられてしまう。悔しい思いなんて殆どない。それ以上に、この子がアイドルになつたらどう世間を騒がしてしまうのだろうとか、そういう思いが勝つてしまつた。オーディション参加者に対して勝手に希望を抱くなんて甚だしいと自嘲する。

「あは、ちょっとミスつちやつた」

「……全然そう見えませんでしたけど」

後は結果を待つのみ。私たちは控室でその時を待つていた。

「ね、桃ちゃん」

「……なんです」

「なんとなくだけど、貴方は合格すると思う  
やたらと真剣な表情。

「あのね、アイドルになつてほしい」

「え、急に真剣モードですか」

「うん、ガチ」

「え、そうすか」

「あなたみたいな子がアイドルになつたら、あなたに憧れる子がたくさん生まれて、アイドル業界が更に発展していくと思うの」

急に規模が大きすぎる話題を出されて、訳が分からない。

「私にそんな力はないんですけど」

「ううん、あなたならもつとアイドルを広められる」

雰囲気に圧倒されてしまい、私はただ頷くことしかできない。

その子の言葉を上手く咀嚼しきれない私は、不安と期待を抱いたまま結果発表が行われる会場へと向かつていった。

「それでは合格発表に移りたいと思います」

プロデューサーがステージに立つ。

私たちは目線を上げる。期待、興奮、恐怖、緊張、様々な感情が脳内を覆う。私の前には、小さい背中を震わせながら両手をぎゅっと握りしめる子がいた。じめじめとした空気がそのまま体内に侵入して、心臓まで浸食されているようで居心地が悪い。

「番号を呼ばれた方はその場で起立してください」

ちらりと左に目をやると、27番はただまっすぐ前を向いていた。綺麗だな。ああ、この子がアイドルになっている姿を早く見たい。

「8番、佐原みぞれさん」

「はい！」

凜々しい声が響く。

8番が呼ばれた瞬間から、不合格者が決まる。そう、1～7番の子は今不合格が告げられたのだ。間髪入れずにその男性は言葉を紡ぐ。

「28番、宮口桃さん」

「えつ」

私だ。

心臓の音がうるさい。驚きすぎて勢いよく起立してしまったおかげで、パイプ椅子がきつい、と緊張感のない音を立てた。嬉しい気持ちはある。だが、疑問が勝ってしまう。

27番は、不合格？

煽るつもりなど微塵もない。しかし、顔を左に向けることを止められなかつた。

まっすぐな目で射貫かれる。27番は私のことをじつと見つめていた。何を考えているのだろう。なんで私じやなくてこの子が合格してるの、協力しなきやよかつたとか思つていてるのかな。

「…よかつた」

その子は、ポツリと、本心がこぼれるように呟いた。

その声は、私だけにしか聞こえていないんじやないかというくらいに、か細かつた。

この子はどれほどまでに優しいのだろう。悔しいはずなのに、私の合格を喜んでくれている。

「39番、園優菜さん」

私たちの感情なぞ知らずに、淡淡と合格者発表は進んでいく。

27番は私から視線を外し、ただ前だけを向いていた。何を考えているのかよく分からぬのに、アイドルを追い求める純粋な子だつた。

会場は異様な雰囲気に包まれている。総勢四十人の最終審査で合格者数がたつたの三人だというのだから、こんなにもざわつくのは当たり前だ。

「それでは合格者のみここに残り……不合格者の皆さんは控室へ。」

27番は私をちらりと見て屈託のない笑顔で「バイバイ」と手を振った後、出口へ向かっていく。姿が見えなくなつたとき、もう一生会えないのかもしれないと思つてしまつた。

正直、そのあとのプロデューサーからの説明はほとんど頭に入らなかつた。

三人組として活動していくこと、今後約三か月間はレッスンに徹して、そのあとライブハウスでお披露目ライブを行うこと。「ゆるふわでかわいい」がコンセプトのこと。

⋮⋮合格したからには、あの子の思いを引き継がなければ。

なぜだか、受け継がないと本物のアイドルになれない気がした。

2

「めにきゅの皆さんでしたー」

女性アナウンサーの抑揚のある声が響く。

音楽番組の収録が無事に終了し、私たちは控室へと戻り、絶賛自撮りタイム中だつた。

「初めてあの階段降りましたねー」

「てかてか！モリタさんに会えたんだけど！」

めにきゅはデビューしてから約半年が経つ。デビューシングルがSNSでこれでもかというくらいにバズり、サビのダンスを踊つて動画を投稿する人

が急増中だ。

私がさんざん頑張ってきた努力の結晶である過去の個人チャンネルは登録者数が百二十人なのに、めにきゅの登録者数は既に十万人を超えている。何だか無性に悔しさもある。

「今日も桃ちゃんの生歌がかっこよかつたよー」

「そうかな、ありがと」

そう、自分で言うのもなんだが私は持ち前の歌声が高く評価された。生歌も文句なしで最初から最後まで歌いきることができる。ダンスは相変わらず微妙だが、リーダーと優菜さんが私の代わりにダンスを頑張ってくれている。

そして、私はあの時誓ったように、27番……あの子のようなアイドルを今でも目指している。髪を真っ黒に染め上げ、記憶を頼りにメイクもあの子に近づけている。アイシャドウやリップは少し青みがかつたピンク色で統一し、とにかく色白さと透明感を重視する。実際のところ私はそこまで色白いタインプではないが、無理やり色白肌を作ろうとして、青白い下地を首まで塗りたくなっている。

「特にですね、桃ちゃんの『恋心教えてあげる！』ってところが大好きで！」  
「わかるわー、桃の魅力が詰まってる！ かつこいい声でそんな可愛い歌詞  
歌うのずるい、やっぱギャップねギャップー」

とにかく、私たちは今波にのつてているアイドルだと思う。正直調子に乗つ  
ている自覚はあれど、調子に乗らなきや芸能界では生き残れない気がする。

「ただいまー」

誰もいらない四畳半の部屋へ帰宅する。

オーディションに参加する前からずっと住んでいるこの部屋は、寂れた木  
造アパートのはしつこにある。歩く度にギシギシ音が鳴るし、いつ崩壊する  
か分からぬけれど、家賃は東京都で1、2を争うくらいには安いと思つて  
いるし、木の匂いはかなり落ち着くしでなんだかんだ気に入つていて。

さつさと手洗いをして、お風呂の湯をためている間にSNS上でエゴサ一  
チをする。

めにきゅの公式アカウントを見ると、先ほど控室で撮つたばかりの3人の

集合写真が投稿されていった。

「みんな可愛い！」「リアタイしたよー」

誉め言葉だらけのコメント欄を見ると、二やつきが止まらなくなる。

だけど、たまに「宮口桃、もつとゆるふわ感を出してほしい」「あんまり笑わないから少し怖い」とか、私に対するコメントも見かける。

……やっぱり、そうだよね。敢えて笑わないアイドルもたくさんいるんだ  
よと反論したくなるが、反論よりも反省が勝つてしまつた。リーダーは明る  
さとかっこよさとかわいさが共存してゐるし、優菜さんは言わずもがなゆるふ  
わで可愛いし。

もし、私が不合格である子が合格して、今この場にあの子が立っているのならば……きっとこういうコメントなんてほぼゼロに等しくて、かわいいかわいいってたくさん褒められているのだろう。

もつと、あの子のようにならなければ。

もつと可愛いパフォーマンスをしよう。あの子が教えてくれたように、指先まで意識を集中して、笑顔も増やして。あの子のように、あの子のように

…。

『お風呂が沸けましたー』

無機質な音声が聞こえた瞬間、ハツとして現実に戻る。最近こういうことが多い。あの子と私を比べてしまつて、まるで別の私に無理やり手を引かれるよう、意識が持つていかれてしまうのだ。

この癖をやめないと。自分の良さを引き出すことに集中して、あの子のことは忘れよう。

心の中で決意を固め、風呂場へ向かうために立ち上がつた。

翌日、私は炎上していた。

さつきまで凄くかつこいい決意をしていたのにこのザマだ。

かつて私が自作の曲を投稿していたY o u T u b e チャンネルが見つかり、誰かが拡散したのだ。

思い当たる節しかない。そう、歌詞の治安がとにかく悪いのだ。現代のコンプライアンスにはそぐわない歌詞で混沌としており、現代社会を非難する

曲や自身の非難、更には人類への非難などあまり表に出すべきではない言葉ばかりなのである。

「かわいいがコンセプトのアイドルなのにこれはひどい w」

「いやいや、むしろ好感度上がったんだけど」

SNSでは素人たちの議論で溢れかえっていた。

過去の私を残したかった。だからチャンネルを削除しなかった。あの子に飲み込まれそうな私を、そこだけは本物の私を肯定してくれるような気がしたから。

やつぱりダメなんだ。本物の私は評価されなくて、というか炎上しちゃつて。無理やり可愛いパフォーマンスをして、あの子みたいに中身まで可愛くならないといけない。

『世間の声なんて気にしなくていいよー』

あの子のことを忘れようとしたのに、声が聞こえる。

「でも、あなたみたいに可愛くなきゃ、認めてもらえない」

『あなたは承認要求を満たしたくてアイドルになつたわけじやないでしょ?』

「そうだっけ」

『桃ちゃんみたいな境遇を持つ人に笑顔になつてほしいんでしょ?』

「…あー」

そういうえばそうだつたかも。でも正直今はどうでもいい。

そろそろありのままの私を表現することをあきらめなければならぬ。このままアイドルを続ければ、いつか脱退炎上のループをしてブルーライトを浴びるだけの生活に逆戻りをしてしまう。

覚悟を決めなきや本物のアイドルになれない。

自分の意思なのか、あの子の意思なのか分からぬ。私はいつの間にか、「Y o u T u b e チャンネルを完全に削除する」というボタンをクリックしていた。すつきりしたと同時に、後悔も残る。なぜかチャンネルと同時に「私」も消えたような気がする。

炎上から一ヶ月が経つた。あの炎上が嘘だつたかのように、めにきゅは世間の目を惹いていた。全国ツアーハンズは全席完売、アリーナで行われる単独公演も開催決定された。そして今日もライブハウスで定期公演が行われていた。

私はとにかく吹っ切れた。かわいいパフォーマンスをするようになり、ファンサも今まであまりしない方だつたけれど、「あの子ならこうする」と勝手に想像し、積極的にファンサをするようになつた。

「今日の桃ちゃん良かつた！ 特にあのステージ上での大ジャンプ、最高！」  
 「歌い方変えた？ 前のもかつこよくて好きだつたけど、今日超かわいかつた！」

すごい。みんな褒めてくれる。最近は非難するコメントが多く、SNSもまたもに見ていなかつたのに、もつともつとみんなの感想が見たくてスクロールが止まらない！

「桃……」

リーダーは心配そうな目で私を見つめる。心配なんてしなくていいのにね。

「桃ちゃん、すごかつたよ」最後の煽りがさ、限界を突破した感じで「優菜さんも褒めてくれる。私ってどんどん魅力的になってるのかも！」

スキップをしながら電車に乗る。いつも電車の中で下を向いてばかりだつたのに、最近は前を向くことが多くなつた。こんなに東京の景色つて綺麗だつたんだ、とか新たな発見が多くて気分が良い。

あの子も毎日こんな気持ちなのかな、目に映るものすべてがキラキラしているのかな。

電車の中から景色を眺めていると、手のひらに収まるスマホからブザー音が聞こえてきた。

「桃、最近どうしたの」「思い出して、アイドルになつた理由つて何？」  
リーダーからメッセージが一件届いた。一分ほど考えたあとに文字を打つ。  
「みんなに褒められたいから」

即既読がついて、五秒くらいで返信がきた。

「違うでしょ」「オーディションでみんなに勇気をあげたいって言つてたの

覚えてるよ

「そうだつけ？」

「とにかく、最初のころの気持ちを思い出してよ。承認要求なんて誰にだつてあるから否定はできないけどさ」「最近おかしいよ」「なんでも相談してよ、言いたくなつたらでいいから……」

「わかつた、ごめん」

「とにかく、今日みたいな無茶なパフォーマンスはしないでよ、ステージから落ちたらどうするの！ 終わりだよ！」

リーダーは優しい、でもこの気持ちは一人で抱えたい。たまたま隣だつたオーディション参加者を神聖視していること、その子を真似て私とあの子だけのアイドル像を作ろうとしていることなんて言えない。さつさと会話を終わらせたくて、ウサギが土下座しているスタンプを送信する。

相談事なんてどうだつていい。ようやくあの子になりかけて、同じ心情を共有できてるということに今は浸つていていいのだ。

「桃ちゃんメイク変えた？ めっちゃ可愛い！ どこのリップ使ってるの？」  
「サビで俺にレスくれたよね？ うわ、やつぱり！」

握手会でファンから言われた言葉を反芻する。今日は様々なアイドルが集う夏フェスが開催されている。私たちは無事にライブと握手会を終え、控室へ戻る途中だつた。

真夏ということもあり、汗が尋常ではないほどに流れてくる。汗でおでこに貼り付いた前髪が鬱陶しい。

ハンディファンが生み出す風も生温くて、暑さからどうしても逃れられない。

### 『桃ちゃん、こつち』

ふいに、冷たい風が頬を撫でる。

急にあの子の声が聞こえた。なんで。

頭が痛い。なんか、別の何かに乗つ取られかけているようだ。

声が聞こえた方向に目を向けると、黒髪ツインテールの華奢な女の子の後ろ姿がそこにあった。

やつと、あの子を見つけた。

「桃？ どこの、そつちはステージだよ。……桃、ライブは終わつたんだよ!!」

リーダーを無視して、あの子に誘われるよう、私はその子の後を追う。いる！ ずっと伝えたかった。あなたのようないでるになれた。見てほしい。うれしい。やっぱりあなたもアイドルになつたんだね。話したい事がたくさんあるの、ねえ、一緒にステージに立ちたいよ。

「どうもー！ 私たち、『レプリカ』です！」

あの子はステージへの階段を上つていく。私も立ちたい。あなたの隣でパフォーマンスがしたい。ステージへ向かおうとしたが、スタッフに思いつきり肩を掴まれる。

「何やつてるの！ 混乱させないで！ 全くただでさえ忙しいのに……」

怒声なんてどうだつていい。私はそのステージを見上げる。やっぱりいた。

あの子が。

ツインテールで、黒髪で、……あれ、みんなツインテールなんだ。黒髪なんだ、ツインテールなんだ、かわいい。黒髪だ。

……あれ、みんな、あの子に見える……。

私の頭がおかしくなっているのか、おかしいのはこの世界なのか分からない。訳も分からぬまま、勝手に口が開いていた。

「わ、私ね、あなたのようないドルになつたよ、ね、一緒に踊りたいよ」五人組のあの子たちは誰一人私を見ようとしない。観客に向かつて笑顔を振りまいているだけ。

「つ、何を言つてるのこの子は……この子めにきゅの歌が上手い子ですよね、メンバーオーを呼んで！」

怒声を飛ばしたスタッフの手が更に肩に食い込む。気持ち悪い音しか聞こえない。

つんざく悲鳴のような、何かを壊すような音ばかり。

「つ桃！ 桃！ 誰か水を持ってきてください！」

「あ、あれ、27番だ……やっと会えた……」

「何を言つてるの！ リーダーよ私！」

「桃ちゃん、ごめんね、こんなに思い詰めてたなんて知らなくて……」

あ、リーダーと優菜さんか……あの子じやなかつた。

何かに飲み込まれそうで息苦しい。飲み込まれたら駄目なような気がして、でも飲み込まれたらもつとアイドルになれる気がする。

リーダーも優菜さんも、アイドル全員があの子に見えてしまつた。

……あの日、オーディションにいた27番の子つて何だつたんだろう。

夢を見た。

カラフルで、どこかのテーマパークみたいな場所。私とあの子が二人つきりでライブをしていた。たくさんの風船が飛び、メリーゴーランドの軽快な

音楽が狂ったようにループしている。歓声が聞こえるのに私たち以外に誰もいない。

気持ち悪いのに、心地よい。なのに切なくて、涙が出そうになる。

何にも決められていない世界。自由に私たちはダンスを踊る。ステップを間違えたつていい。ファンサを必死にしなくても良い。立ち位置も気にしないでいい。

あの子はあの日のような笑顔で、私の手を引いてステージ上で走り回る。足がもたれる感覚なんてない。一緒に空の上を飛んでいるみたいで夢心地だ。

『桃ちゃん、楽しい?』

「…: 楽しい」

『じやあもつと楽しくならなきや』

「どうやつて」

『私になるの』

「どうして」

『だつて貴方は私になりたいんだよね？じやあ私にならなきや』

「…：そ、うか」

目指すんじやなくて、私そのものがあの子になればいいのか。

『そ、う』

「そ、つか」

『だから私に、その身体をちようだい』

横からとん、と押される。私はステージから落ちる。行き着く先は地面ではなかつた。暗闇だ。暗闇に落とされる。  
怖いのに、安心感がある。もう何も考えなくていい、母に甘える赤ん坊の  
ようだ。

「みんな～～つ！」

いつの間にか私はステージに立つっていた。さつきの「レプリカ」とかいう  
グループのパフォーマンス中に乱入したのだ。

「ね！ 今日、すごく楽しかったよね☆ …：桃のことだけ、見てくれた？」

浮気なんてしないよね？」

「しない！」「桃ちゃんが世界一だから！」

「あはっ！ 最高～☆ ならいいの！ ね、ずっと一緒にだからね？ 約束！」

すごい、全部が輝いて見える。ペンライトってこんなに輝いてたの？

もういい、今までの私なんて知らない。

やつと本物の【アイドル】になれた、やつとあの子に会えた、やつとあの子になれた。

そして私も、あの量産されたあの子たちの仲間になれる。みんな褒めてくれる。

4

「チャームポイントはにっこり笑顔です！ この笑顔でいろんな人をメロメロにしちゃいます！」

今回もばつちり決まつた！ よしよし、審査員も参加者もみんな私のこと

を見ている！

私はめにきゅでのアイドル生活を謳歌し、めにきゅは王道かわいいアイドルとして大人気アイドルのまま、解散した。

それでも私は止められない！ まだまだアイドルを続けたいし、私のようなアイドルがたくさん生まれるために、「私」を広めていかないと。

ふと、右の子の視線が気になつて、ちらりと横に座っている子を見る。綺麗な子だな、と思つた。

クールな表情をしている、というか目に光が宿つていない。

すつごく素敵な子だ、まだ何にも染まりきっていない。こういう真っ白な子が一番染まりやすい。

よし、私がこの子にアイドルを教えてあげよう。この子なら、みんなの理想の、本物のアイドルになれる！

そう、アイドルを量産し続けられる。

## あとがき

『アシンメトリー』というタイトルは、私が中学生の頃に考えた作品のタイトルである。当時の『アシンメトリー』は、種族同士で争い、世界が二分化され、主人公は再び世界が一つになるよう戦うというような作品、魔法少女が主人公の作品など、様々な変遷を経た。その結果、最終的にはアイドルがテーマの作品が生まれたのだから何が起きるか分からぬものである。中学生の頃の自分に言うとかなり驚くと思う。

今回私が執筆した作品は少しダークなアイドル作品となつてゐるが、実のところ私は根っからのアイドル好きである。

この小説を執筆している間、某アイドルグループの握手会に参加していた。名前を呼んでもらえることを期待し、手作りの名札まで用意した。

握手会ではアイドルのキラキラした笑顔が直撃し、顔面国宝とも言わんばかりの可愛さと美しさ、そして名前を呼ばれた嬉しさで脳内はお花畑に。やはりアイドルは素晴らしいと思つたものである。

握手会に参加して感じたことはやはりアイドルは凄いの一言。今回私が参加した握手会は「グループ握手会」と呼ばれる形式で、一周のうちに4人のアイドルと会話することができる。そう、我々ファンに入れ替わるためアイドル側は一人ひとりに素早く対応し会話しなければならない。

アイドルは歌唱、ダンス、ビジュアルに加えてファンへの対応やSNSの運用など様々なものを求められている。やはりアイドルはすごいな、宮口桃も文章外でかなり努力をしたのだろうなと思わざるをえない。そんなことを考えていたら、いつの間にか握手会でかなりお金を消費してしまっていた。

『アシンメトリー』というタイトルの作品をようやく最初から最後まで執筆し、幼少期から憧れていた「アイドル」がテーマの作品を執筆できたことを非常に嬉しく思う。そして、本作を読んでくださった皆様に心より感謝を述べたい。



愛すべき非日常

シロガネ

「夏休みくらい、非日常を過ごしたい」

七月の下旬、夏休みに入る前。

「クラスメイトと、そんな話をしたんです」

九月の始め。まだまだ茹だるような暑さが抜けない中、狭い室内でいろはは目の前の男にそう告げた。

「海が見れて良かつたです」

○○

「非日常、か」

「うん、よく言うじやない」

漫画や小説の導入のような話。あるいは、思春期によくある話題だ。

「非日常ね。うん、いいね。やろうよ、非日常」

いろはの目の前のクラスメイトの友人はうんうん、と頷いた。

「え？」

いろはは目を丸くする。ガタン、と頬杖を付いていた腕がズルリと頬から落ちてしまう。大金持になりたいとか、恋人が欲しいだとか、空想の願望のつもりだったから。実際にやろう、と言われて、いろははびっくりしてしまった。

「夜の遊園地とか、うーん、年齢制限掛かるかな、そこは。ああ、肝試しとかもいいかもしね」

つらつらと、友人がこれからの空想、いや予定を語る。いろはの胸中にじわじわと嬉しさが溢ってきた。

「他には何がいい？」

こてり、と首を傾げて友人はいろはに尋ねた。

「うみ」

「うみ？」

いろはの住んでいる場所は海沿いではない。ものすごく遠くでもないが、少し電車で遠出しなければあの力強い青を見ることはできない。高校生の身分であるいろはには中々できないことだ。

「海に、行きたい」

海。全ての始まり。そして全てを飲み込んでくれる存在。いろはは幼い頃から、海に行きたかった。

「いいね、すごく夏っぽい」

ふふ、と友人が笑う。

「じゃあ、海は最後、三十日に行こう！ きちんと宿題は終わらせておかないとね」

「うう……、そうだね、頑張る」

それなりに最初からコツコツやるタイプではあるけれど、今年は予定がいっぱいで、これは気合をいれなければ。

「よければ一緒にやる？」

「え、いいの！？」

目の前の友人の成績はなんだつか、あんまり思い出せないが、悪くはない、はずだ。

「これもまた非日常かもね」

「おお、確かに」

「夏休みには、たくさんの非日常をお届けしてあげる」  
にこり、と黒曜石のような黒い目が弧を描く。

取り込まれそうな、危険な魅力があつた。友人自身が、非現実的な存在であるような錯覚を覚えるくらいには、いろはの頭がくらくらした。きっと、茹だるような暑さのせいだろう。

「じやあまたね！ 近いうちに」

「あ、うん、また」

そういうえば、友人はどのあたりに住んでるのだつたか。まあ、そこまで気にしてることでもないか、と教室から見えなくなるまでバイバイ、といろはは手を振つた。

○○

「……、う」

アラームではなく、寝苦しさでいろはの目が覚める。身体に張り付くシャツはいい目覚めとはいえない。せっかくの夏休みだが、これでは二度寝する気も起きない。それよりも早くクーラーが効いてるリビングに急ぐべきだ。いろはは半開きの目を擦りながら、よいしょとベットから降りる。狭い賃貸だから、扉を開ければもうすぐそこだ。

「おはよういろは」

「ん、おはよ……」

ソファに座つて優雅にアイスコーヒーを飲む父が、テレビから視線を外さずでいろはに言葉を掛ける。

「夏休みだつていうのに、意外と早いな」

「暑くて……」

「ああ、ドア開けたらどうだ?」

「嫌」

親子とはいえ、仮にも年頃の娘に何を言うんだ。

「そうか……」

愛娘の間髪入れずのノートに、いろはの父は少し凹んだ。

「あ、そうだ。明日出掛けてくるね」

「そうなのか。……、彼氏か?」

「違うよ。友達」

遠慮気味に聞いてくる父が少し面白くて笑いが溢れながらも、いろはは訂正した。

「そう……なのか?」

「そうだよ」

「そ、そ、うか」

「遊園地にね、行つてくる」

「おお、楽しんでおいで。お小遣い、渡した方がいいか?」

「ええ、いや、あー、貰えるんなら欲しいけど」

ちよつと待つてろ、とテレビを付けたまま父が立ち上がる。寝室の扉が父を隠した。

いろはは代わりにソファに座つて、テレビをぼーっと眺めた。流れているテレビの画面には中々に壮絶な内容のドラマが流れている。いろはには遠い世界の話だつた。

「おう、これ」

テレビを眺めていたら、父が戻ってきた。手には、最高額の紙幣。しかも一枚じや、ない？

「えつ、こんなに？」

「夏休みはまだ始まつたばかりだからな。これからまだまだ、色々あるだろ？」

ふわり、と父が笑う。そう言われたら、遠慮することも出来なかつた。

「……：ありがとう」

そつとお札を受け取る。決して、裕福な家庭ではない。父親一人、娘一人の慎ましい暮らしだ。それでも、この数枚、数グラムに大きな愛がずしりと乗つていてるのを感じた。

「めいっぱい、楽しんでくるね」

「うん、土産話、よければ聞かせてくれよ」  
「おつけー、楽しみにしててね！」

ぐ、といろはは父親に向けて親指を立てた。いろはが照れ隠しにかつこつ  
けていると、くう、とお腹が鳴った。

「あ、朝ごはん、すっかり冷めちやつたけど食べる？」

「……いただきます……」

しゆう、と別の羞恥に顔を赤くしながらいろははぼそぼそと呟いた。

○○

「うつ……」

「大丈夫？」

「だ、だだ大丈夫……」

うつ、といろはは口元を抑えて迫り上がる気持ち悪さに蓋をする。周りの  
喧騒が、壁一枚隔てたように遠い。

「いきなりジエットコースターはハードルが高かつたか  
よしよし、と友人に背中を摩られる。」

「でも良い非日常だつたろ？」

「まあ、そうだね……」

「自分はあんまり三半規管が強いほうではなかつたらしい。」

「どうだつた？ ジエットコースター」

「うん、うーん……、楽しかつたよ、うん」

いろいろの身体はジエットコースターに合つてなかつたようだが、気持ちの  
方は上向いていた。

「楽しかつた！」

視界が縦横無尽に動き、風に逆らうような体験はまさに非日常で、いろいろ  
の胸はとてもドキドキした。

「それは良かつた！ 次はフリーフォールにする？」

「なんで絶叫系ばつかなの……」

友人はにこにこしながらいろいろはに提案する。

「そつちの方が遊園地！ つて感じするじゃない？」

「そうかもだけど」

この友人、中々良い性格をしている。ただ、その強引きがいろはにはありがたかった。遊園地は初めてだったから、引っ張ってくれるほうがありがたい。

「さ、お昼をお腹に入れる前に絶叫系は網羅しておかないと！」

「た、確かに……」

口から昼ご飯が出てしまうのは勘弁だ。そんなの年頃の乙女には許されない。

「……：そう言えばさ、今日は珍しく半袖なんだね」

「え？ そりや、こんだけ暑いんだから、半袖でしょ」

「あは、それもそうだね。まあいいや。よし、レッツゴー」

そう言つていろはを掴む手の温度は、高くも低くも無かつた。

「ほい」

「うわっと」

いろはは友人から半ば投げるよう渡されたテーマパーク仕様の形になつてゐるチュロスを受け取る。揚げ立てのそれは紙袋越しでも取り落としそうになつた。

「いやあ、遊園地様々つていうか、高いねー、やつぱ」

トスリといろはと友人、二人ベンチに並ぶ。度重なる絶叫系にグロッキーになつたいろはは、ベンチに座つて友人が軽食を買つてくるのを待つていった。夏休みなこともあり、園内の飲食施設は軒並み数時間待ちになつた。こんな炎天下でそんなことをしていたら倒れてしまう。

そこかしこに並ぶカラフルでポップな飾り付けがなされた屋台は、比較的空いており、回転も早かつたため、いろは達は屋台に売つてゐるもので軽食を摂ることにしたのだ。

「あ、いくらだつた？」

「この値段の八割が容器に掛かっているであろうドリンクと合わせて二千円くらいかな」

ピトリとガシャガシャと飾り付けがされたドリンクを頬に充てられる。いろははうひや、と声が出てしまった。

「分かつてたけど高いね……」

「いやあ、テーマパーク様々よネ！ 非日常税とでも言う」

「非日常税、ね」

映画館の食べ物、祭りの屋台、そういうものは得てして法外と思われるような値段設定が成されている。いろはも、その値段の高さに幼い頃はまともに買ったものではなかつた。しかし普段スーパーの特売日などを狙う人々は、その値段の高さに拘泥しないのだ。人々は、『幻想』或いは『理想』にお金を払つてゐる。特別な体験には、対価が必要ということだ。

「おいし？」

「うん、おいしい」

「噛めば、砂糖の甘さがじゅわりと広がる。別に特別においしい訳ではないけれど、きっといつも食べるご飯より美味しいのだと思う。」

「さて、食べ終わったらのんびりタイムにしようか」

友人はぺろりと指と口元についた砂糖を舐め取る。

「後は、パレードとかだけ」

「まあそれもメインイベントではあるけどさ、やつぱ遊園地といつたらさ」  
「ね？」と友人はいろはににんまりと笑って続きを促す。

「え？　えーと……」

「もう！　夕日に照らされて、頂上で二人恥ずかしながらも口づけを交わす

……

「口づけって……」

「ほらほら」

うーん？　といろはは視線を巡らせる。そして一際目立つ遊具を見て、友人の言いたいことを理解した。

「観覧車か」

「ひんぱーん」

正解だよ、とやつぱり狐のような目で友人は笑つた。

○○

ガタゴトと、少しづつ高度が上がつていく。夕焼け色に染まつた遊園地は、いろはには寂しげに映つた。

「今日は初めてのことばつかりで楽しかつたよ、ありがと」

正面切つて言うのは照れくさくて、いろはは窓ガラスを覗き込みながら背後の友人に告げた。

「いろははファーストキスつて済ませた？」

「え？」

いろはは思わず振り返つてしまつ。友人は、癖なのか、またもや目元が狐のようすに弧を描いている。

「いや、まだ、だけど」

シロガネ

恋人がいたことは無いし、生まれた時に家族からそれをもらっているかもしれないが、如何せん記憶が無いのでそれは体験してないのと同じだ。それに、頭のどこかでもらつてはいないと断言していた。

「しとく？ キス」

「いつ、!!」

「……あははっ、そんなにびっくりしなくても！」

くつくつと笑う友人に、いろはは揶揄われたと気づいた。

「もう！ そ、そういう君はしたことあるの！？」

「ええ！ ……、どつちだと思う？」

ツン、といつの間にかいろはの目の前に迫っていた友人が、自分の唇といろはの唇を交互に突いた。その目元も口元も、ゆるりと弧を描いている。

「……、いひつ、冗談だよ！」

あ、八重歯がある、といろはは漠然と見たままを考えた。そしてはつとする。ぶわっ、と顔が空と同じ色に染まる。いろははぽかぽかと友人を叩いてやつた。

「あはっ、ゴメンつて！」

「ううつ、！」

「あつ、ほら見て、頂上だよ」

その言葉に、いろはは振り返つて外を見る。黒が、夕日を呑み込んでいる。いずれ、遊園地も闇に包まるのだろう。楽しい時間は終わりだとばかりに。

「大丈夫、まだ終わらないよ」

「わあ……！」

ポツポツと、闇に呑まれかけている遊園地に光が灯る。光はあつという間に、遊園地全てに広がつた。見事なライトアップだ。

「夏休みは、始まつたばかりだろう？」

やはり、そう言つた友人の目元は、狐のように細められていた。

扇風機の音、セミの鳴き声。なんて風情は、この時代には無い。クーラーで快適であるし、暑すぎるのかセミの鳴き声は近年聞いていない。「……なんで高校生にもなつて一日一言みたいなのを書かなきやいけないんだ。書くことないよ」

あー、といろははシャーペンを組み立て式のロー・テブルに投げ出した。

「そう？ 一日一日、決して同じことにはならないよ」

友人は涼しい顔をしてすらすらとペンを動かしている。

「生きるの、楽しそうだね」

「うーん、どうだろうね。そうじやないと長いジンセイ、やつてられないだけかもよ」

にんまりと友人の目が細められる。

「まあ、そうかも」

「それに、今日の分は書けるじやかい。友人と一緒に家で宿題をした、つて」

「……確かに」

面と向かって言わるとちよつと照れくさい。いろはは三日ほど書き溜めていた一日日記に、今日の『非日常』を記す。

そうして思う。ああ、これは夏休みの『非日常』を書き留める作業なのだと。そうすると俄然、いろはは明日の『非日常』はどうしようかとわくわくしてきた。

「夏休みの宿題はためる派かい？」

ふと、友人がそう尋ねてくる。どうだろう、と思い返すが、あまりためるタイプでは無かった。それくらいしか、やることも無かった。

「ううん、結構コツコツやつてたよ」

「でも家にいると、ついダラけちやわない？」

「いや、大体は図書館とか行つてやつてたから」

「へえ、凄いね」

いろはは答えながら、どうして図書館で宿題を片付けていたのだろう、とふと疑問に思う。家でやればいいのに。まだ、クーラーがついてなかつた頃の話だつたか。それとも、家にいたら集中できなかつたから？

「……ほら、家だとダラダラしちやうから」

「多分、そうだ。記憶は曖昧だけれど。」

「暑すぎて、記憶も曖氣なのだろうか。」

「合理的だね」

「……まあね」

ポキ、と持っていたシャーペンの芯が折れてしまつたことに、いろはは気づかなかつた。

○○

八月三十日。楽しかつた日々もあつという間に過ぎていく。明日は、いろはが待ちに待つた海へ行く日だ。

「いろは、随分ご機嫌だな」

「ふへ、うん！ 明日は海に行くんだ！」

尋ねてくる父に、いろはは楽しみを隠そとせずに答える。

「……そういえばお父さん、最近いつもテレビ見てるね。何か気に入つたドラマとかアニメとかあつた？」

父は最近、いろはが見かける度にテレビに向かっている。

「ん、ああ……」

今も、父はテレビを見ているところだつた。内容はいちいち確認していいが、そう言えばいつも同じドラマを見ているよう思う。  
「うーん、どんなドラマだつたかな……」

父が首をかしげる。

「いつつも見てたのに？」

「あー、だとかうー、だとか、父は要領を得ない返事をする。何だか不気味だつた。上向いていた気分が、一気に沈んでしまう。

「やめてっ！！」

「っ！」

女性の鋭い声に、いろははびくりと肩を震わせた。声の発信源は、テレビだつた。一体、父はナニを見ているのかと、恐る恐るいろははテレビに意

識を向ける。

画面に映っていたのは、少女に暴力を振るう男性だ。薄暗い部屋の中、少女がやめて、と繰り返している。

「……」

どうしようもなくそれを見ていられなくて、電源を切ろうといろははリモコンを探すが、中々見つからない。ガタンツ、とテレビから大きな音が聞こえた。いろはは思わずそちらに視線を向けてしまう。画面には、虚ろな目をした少女が映っていた。少女の顔がアップのカットになる。

「え……、」

いろはは絶句した。

だつて、その少女は。

「……いろはあ？」

「ひつ……」

ゆらり、と背後で男か立ち上がる気配がする。先程まで優しかった父親の声が、ぐにやりと歪む。いや、こちらが、正しいのだ。

「うわわああ！？」

テレビから男の悲鳴が上がる。釣られて見ると、少女が男に包丁を振り上げていた。

ああ、そうか。そうすれば、良かつたのかも。

普段なら、きっとそんなことは考えないのかもしれない。でも、もういろはは疲れてしまつたのだ。優しい父親なんて、幻想で非日常だつた。幻想は、現実ではあり得ないから幻想たり得るのだ。

いろはは足を縛れさせながら、台所へ向かう。いろはは、父が台所に立つ姿は見たことがなかつた。調理器具が入つてゐる棚に、包丁が何本か収納されている。普段使いの包丁を一本取り出した。

「いろは？」

父だつた男の声がする。いろははゆつくりと、男に近づいて、そして。

「ありがとう。お父さんのまま、死んで」

父と認識できるまま。家族だと思えるまま。そうすればまだ、いろははまともであるから。

ブスツ、といろはは勢い良く男に包丁を突き刺した。男は何も言わずに倒れ込む。赤い血溜まりが、広がった。

「……、

これで良かつた。だつて明後日にこの魔法は解ける。そうしたら瘦せつぽつちで痣だらけのいろはは、何も出来ずに殺されていくだけだつた。抵抗できたとしても、男が死ぬところを見届けることは無く共に冷たくなつていただろう。

「……うみ」

行きたかったなあ。

ピンポン、といろはが項垂れでいると、インターほんが鳴つた。何も考えられないまま、フラフラといろははドアを開けた。

「やつほー」

「え……」

そこにいたのは、友人だつた。

「さ、海に行こうか！」

にんまりと、友人は狐のように微笑んだ。

時計の針は、どちらも一番大きい数字を指していた。

○○

二つほど電車を乗り継いで、いろはと友人は海へとやつてきた。もう終電もないはずなのに、なぜか電車は動いていた。

駅から少し歩いて、砂浜をさくさくと踏む。闇夜の中、キラキラと藍色が輝いている。寄せては返す波は、いつでも変わらない。

「うみ、だ」

「うん、海だよ」

全ての始まり。生命の母。全てを飲み込み、包み込んでくれる青がそこに広がっている。

シロガネ

「綺麗だね」

「……恐ろしくはないのかい？」

友人の問いに、いろはは頭を振った。

「ううん。キレイ、綺麗で優しいよ、海は」

ずっと、海に行きたかった。

ずっと、全てを飲み込んで欲しかった。身を投げて、海に全てを委ねてしまいだかった。

「いろは」

「……何？」

「これからどうする？」

「うーん……」

「このまま海に飛び込む？ 警察に自首する？ 束の間の夢を見せたワタシ

を殺してみる？ それとも……、ワタシと一緒に世界という劇場を観て回る？」

アハツ、と友人は笑つた。

彼かも彼女かも、名前も知らない友人が。

「ワタシは貴方の選択を尊重する」

海より空より黒い瞳が、いろはをまっすぐに見据える。それはにんまりと弧を描いている。黒髪交じりの白髪が、海風に揺れている。

「……」

いろはは、その黒曜石から目を離せなかつた。考えて、考えて、いろはは答えを口にした。

「……警察に行つてくる」

「それはどうして？」

「……今ここで飛び込んだら、君に迷惑が掛かるかも。そんなことないのかも知れないけど、それは嫌だからさ」

「……ふーむ、そつか。分かった。それが君の選択なんだね、もちろん尊重するよ」

うんうん、と書生服の彼、または彼女が頷いた。

「名前、最後に教えて」

「名前？」元の名前はもう忘れてしまったなあ……、そうだな、じやあ  
ムボウ、そう呼んでよ、と友人はいろはに笑いかけた。

「バイバイ、ムボウ」

「うん、さようなら、いろは。ワタシは何処にでもいるから、いつかまた出  
会えるよ」

「でも、それはきっと今の貴方じやないでしよう？」

その言葉に、ムボウは首を傾げた。

「それって、大事なこと？」

「うん、すごく大事なこと」

「ふーん……、まあ、いつか会えるといいね。君の選択、しつかりと覚えて  
いるよ」

「ありがとう、さようなら、ムボウ」

「うん、ばいばい！」

ムボウはにんまりと目を細めていろはに別れを告げた。何より黒い霧がム  
ボウといろはを包み込む。

「私に日常をくれて、ありがとう」

その言葉が、ムボウに届いたかどうかは分からない。次に会えたときに聞こう、といろはは黒い霧に身を委ねた。

○○

「いやー、今回もいいシナリオができたね！」

どことも知れない空間を、ムボウは歩いていた。

懐から手帳を取り出して、今回の冒険を記す。

「やはり人間は面白い」

にんまりとムボウは目を細める。次はどんな世界に旅立とうか。

「人間もーー、この世界も面白い、全てが非日常だ！」

アハツ、と笑い声を残してムボウは黒い霧の中に消えていった。

## あとがき

ムボウの正体、分かる人にはわかります。まあ私も詳しくはないのです  
が、楽しく遊んでいますよ。ムボウの口調がちょっとブレているのもわざと  
です。主人公は親からの虐待を受けている、という設定でしたが、正直（幸  
いなことに）ふんわりイメージで書いてるので、解像度は低いです。

さて本編のことを少し。みんなのなんでもない日常が、いろはにとつては  
手に入らない非日常だったわけですね。最初の場面は警察に自首した場面で  
した。

「いろは」という名前は、皆さんご存知であろう「いろはにほへと」から  
きています。現代版にすると「いろは」という名前は「ああああ」「あい  
う」みたいなイメージですね。もちろん、「いろはにほへと」が現代の五十  
音順と同じ役割を持つていたかというと違うと思いますが、そのあたりは  
目をつむつていただきて。……でも「あい」という名前でも皮肉が効いてい  
てよかつたかもしれません。

あとがき

普段は二次創作を中心に書いているんですが、一次創作も今後書いていきたいなあ。



ウオトウ力を一箱

相良茂

## 1 あの日のバトケン

まだ二十歳そこそこだろう。タジク人らしい男は、銃を抱えたままうつ伏せに倒れた。

「これ以上奴らを近づけるな、バトケンを守れ！」

俺は銃声に負けないよう大声で叫んだ。弾丸は死の口笛を吹きながら耳元をかすめる。IMU（注）は若い戦闘員を繰り出して防御線を崩そうとしたが、道路が赤く染まつただけだつた。まるで俺たちのいる峠だけ世界から取り残されたみたいだな。肌を焦がす日差しの下でこだまするのは、敵味方の怒号と銃声だけだ。太陽は俺たちを干物にするのかと思うほど照りつける。銃撃と太陽にさらされ続けて、集中力が切れてきた。

見たところIMUの軍勢はそれほど多くない。だが、新手が加われば水がホースの裂け目から噴き出すように、物量の差で突破されるだろう。俺たちは、ホースの裂け目に貼り付けられた一枚の防水テープだった。テープの下から水が染み出でるのは時間の問題だ。すべてを投げ出したくなるが、俺

たちがこの場を離れれば、ここら一帯は水浸しになる。

なに、味方が来ればなんとかなるさ。バヤン軍曹が装甲車の中で各方面に連絡を取っている。そういえば俺たちが出動する時、訓練で留守だった部隊も、無線で呼び戻しを受けていた。もう少しすれば、俺たちの後方に到着するだろう。あるいは国境警備隊が増援に来れば、敵を挟み撃ちにできる。敵もそれを恐れているだろう。どうりで攻撃を続けるわけだ。

残弾は数発。もう弾倉の替え時だ。俺は土嚢の陰に座り、マガジンポーチに手を突っ込む。弾倉のストックはあと二つ。

「カトウコフ伍長、突撃しましようか。相手はたかが乗用車四台ですよ」  
セイジトが隣で A K - 七十四の弾倉を外しながら言う。

「そうしたいのはやまやまだが、爆弾を積んでいるかもしれない。不用意に近づかんほうがいい。ジエンギス、弾丸の追加だ」  
「はい！」

ジエンギスが中腰で装甲車に走り去る。

I M Uがバトケン州に侵入したため、俺たちは道路を封鎖すべく派遣され

た。だが、俺たちが土嚢を積んで間に合わせの防御線を築いた時、数台の乗用車が現れ、増援を待つ暇もなく銃撃戦が始まつた。装甲車は砲塔が故障してしまい、エディールとジヤクプが必死に直している。

両側から絶壁の迫る峠道で敵と出くわしたことは、幸運というべきか不運というべきか。開けた場所ではないため敵も散開することはできないが、奴らが後退して姿を隠し、両脇の山によじ登れば。あるいはもし、新手が山上から忍び寄ってきたら……。駆けつけた友軍が、俺たちの死体を見つける様子が目の前にちらつく。敵を進ませることはもちろん、退かせることもしてはならない。俺たちの視界におさまる場所で、奴らを足止めしろ。

「皆がんばれ、応援は必ず来るぞ！」

セイイツが半ば自分に向かつて叫ぶ。

「あの車、クルグズの村人のものだな。あとで敵に弁償させなきや」

ムルザンが俺たちを笑わせようとする。

敵の車が一台、唸り声をあげて動き始めた。突つ込む気か。俺は連射に切り替え、前輪に狙いを定める。

その時、何かの影が俺の左手に飛び込んだ。咄嗟に銃口を向けた瞬間、國中のタイヤを破裂させたような音がした。

影は両腕を広げたまま、ゆっくりと崩れ落ちる。

逆光で見えなかつた顔が地面に横たわり、あどけなさと精悍さのせめぎ合  
う目が閉ざされていく。

日に焼けた頬に、一筋の紅い川が流れ落ちた。

叫び声とともに目の前のすべての景色が白く溶け落ちた。

俺は全身に巻き付いた景色を振り落とそうともがく。重たい景色は灰色の布団に変わった。心臓の音がアパート中に響き渡つているようと思える。俺は左腕で汗ばんだ額をぬぐつた。イリーナとユーリヤを起こしていいなか耳を澄ませる。時計に目をやると、まだ三時半だった。窓の外では、モミの木がひつそりと佇んでいる。

また夢を見たな。白み始めるにはまだ早い空を眺めやる。今は二〇一七年。

最後に銃を撃つてから十年以上が過ぎたが、心のどこかには、いつもあの

日が居座っている。ビシケクは、今年も暑くなるだろうな。度々戦いの夢を見るので、イリーナとは部屋を別々にし、ユーリヤと同室で寝てもらつていた。咽喉が夢の中の太陽を覚えていたので、俺は音をたてないよう台所へ向かつた。コップに水を注いでいると、ソ連製の冷蔵庫が慎ましくも厳かに音を立て始める。くすんだクリーム色の冷蔵庫には、どこで手に入れたのか、サングラスをかけたスイカのマグネットが貼りついている。古びた把手には赤地で銀の星がかたどられていた。

ショロ社への出勤にはまだ早いが、満足のいく二度寝をするには遅い時間だ。まあ、横になつて目をつむるぐらいはしておくか。今日はとにかくトラックの運転に集中し、ウォトウカを一杯飲んで早く寝るとしよう。

## 2 バトケン 一九九九

「犯罪者どもは交渉の呼びかけに応じず、同胞や日本人技術者を拉致したままだ。我々はこれより西から××村に突入りし、敵を殲滅する。前進のみが勝

利と平和をもたらすことを忘れるな。諸君の日頃の訓練の成果に期待している。各員、配置につけ！」

ウルマット大佐の訓示が終わり、俺たちの部隊は装甲兵員輸送車に乗り込む。二十四日の夕方までに十人ほどの戦闘員を殺したが、IMUは頑強に立て籠もっている。脱出した村人の話では、敵は村のあちこちに潜んでおり、一部が東西の出入り口にバリケードを築いたらしい。クルグズ軍の他部隊が東の道路を突破し、俺たちの部隊は西から突入することになった。

走り出した装甲車の座席で、敵がさつさと逃げ出すことを祈った。村ごと人質にされている住民のことを思うと、車内が一層暗く感じる。

「カトウコフ伍長……震えが止まりません」

ジエンギスが俺の右手でささやく。握りしめた銃が、車内の揺れよりも小刻みに動いていた。

「心配するな、俺たちがついている。基本を思い出せ。敵より先に、真ん中を狙つて二回撃つ。同士討ちや全滅を避けるため、仲間とは一定の距離を保つ。いいな？」

俺は銃を確認しながら念を押す。ジエンギスはまだ震えていたが、無言で大きく頷いた。

「打ち合わせ通り、左に乗っているカトウコフとジエンギス、セイットとムルザンで二組になるぞ。右に乗っているヴィクトルとマクスイム、ザキールとティムールも頼んだぞ。ジャクプ、村に着いたら速度を落とせ。エディール、砲手として周囲をよく警戒しろ」

バヤン軍曹が車長席から指示を出した。

「了解っ」

全員をしばし沈黙が包み、エンジン音だけが辺りを満たす。

反対側に座っているヴィクトルは俺と同じカトウコフという苗字なので、皆は俺たちを区別したいとき、俺をカトウコフ、戦友をヴィクトルと呼ぶ。

「俺たちは二人ともカトウコフだから、どちらか一人戦死しても困らねえな」と普段は軽口をたたくヴィクトルも、今は黙つたままだ。

熱心なムスリムのザキールは、小声で「神の名において」と呟く。マクスイムは銃を念入りに点検しているのだろう。

ムルザンとセイツトは、数カ月前にマフィアの拠点で実戦を経験した。戦いをさっさと済ませて、浴びるほど馬乳酒を飲もうと話していたな。もつとも今回の相手は、マフィアよりも手強いが。

「ティムール、お前はウズベク人だが、IMUと戦うのは平氣か」

エディールが、天井から吊り下げられた砲手席を回しながら言う。

「もちろんさ。自分はクルグズ国民だし、IMUはウズベク人にとっても敵だからな」

ティムールは即答した。兵員室の座席は背中合わせになつてゐるため、ティムールの顔は見えないが、いつもより声に影が感じられる。テロリストが相手とはいえ、同胞であるウズベク人に銃を向けるのは気が重いだろう。

ジエンギスにとつて初陣が夜であるのはまだマシなのかもしれない。自分が撃つた相手の血の赤さは見えないから。もつとも、目と違い、鼻は暗い中でも鈍つてくれないが。ナゴルノ・カラバフで嗅いだ鉄の臭いは今でも忘れられない。

頭から血を流していたアルメニア人の少年のうつろな目、その少年の手を

引いてわずかな手荷物を抱えていた母親、足を引きずり何事かを呟いていたアゼルバイジヤン人の老人のせわしない口元から、兵員室の座席に意識を引き戻す。

「了解、砲手には準備させている。間もなく村境だ。バリケードを突破したら、左右から装甲車を降りて散開しろ」

バヤン軍曹が無線機から顔を離し、潜望鏡を覗く。

「村境です」

ジヤクプが鋭く叫ぶ。

「砲手、構え」

バヤン軍曹の声とともにエディールが前を向く。

その途端、装甲車の車体に鉛の弾丸が叩きつけられてきた。前方だけでなく、左右からも。ジエンギスが肩をこわばらせる。

「撃てえ！」

軍曹が叫ぶより前に、エディールは右へ左へと回転する。威勢の良い機関銃の金属音が、車内を満たす。味方の装甲車も前後左右へ攻撃を始めるのが

聞こえた。鉛の小雨は次第に降りやんでいく。

「バリケード制圧した、突入だ！」

バヤン軍曹が指令を出し、ジャクプがアクセルを踏み込んだ。ドラム缶などの障害物、そして瀕死の人間が跳ね飛ばされていく。

「いよいよだ、俺の後に続け」

俺はジエンギスの左肩を強く握る。青年は一瞬こちらを見て頷いた。

「出撃、武運を祈る」

軍曹の掛け声とともに装甲車が止まり、俺たちは側面のハッチを開いて飛び出した。

\*

俺たちは二人ずつ通りの両端に分かれ、塀に身を寄せながら物音を立てないように進む。猫が一匹、慌てたように通りを横切っていく。その向こうに生えているポプラの陰で、何かが動いた。

「誰だ！」

右を進んでいたセイジトが叫んだ。答えの代わりに木陰から黒い人影が走

り出す。セイツトは逃げようとする人影に撃ち込んだ。相手は声にならない叫びを発して銃を取り落とし、よろめいて左の塀にぶつかった。銃と持ち主の距離は七メートルくらいだろうか。相手は荒い息遣いで塀に寄りかかり、こわごわ両手を擧げる。薄暗い街灯で照らし出された顔に、脂汗と精悍な黒髪が光る。

「動くなつ」

俺は鋭く叫び、A K - 七十四の引き金に指をかけたままにじり寄る。ジエンギスが俺の数歩後ろに従う。ムルザンが敵を縛り上げるため、ロープを取り出した。

あと十五メートルの所まで敵に近づいた時、どこからか弾丸がうなりをあげて飛んできた。遠くからも銃声が聞こえてくる。村のあちこちで戦いが始まつたようだ。

「敵だ、散れつ」

俺は咄嗟に伏せた。ジエンギスも地面に身を投げ出すのが聞こえる。ムルザンがロープを手に慌てて右端へ走り出す。セイツトも右に走りながら敵は

どこだと悪態をついた。見れば、倒れている敵よりも五十メートル前方、斜め右に銃火が閃く。どうやら曲がり角に隠れているようだ。

「右だ、右の曲がり角にいるぞ！」

俺は叫びながら撃ち返すが、なかなか当たらない。ジエンギスの弾丸も、残念ながらいたずらに射手の居場所を知らせている。道路の上には遮蔽物がなく、こちらの姿は丸見えだ。

「伍長、ジエンギス、早くこっちへ！」

ムルザンが屏に身を寄せて叫ぶ。移動したいのはやまやまだが、敵が右へ行かせまいと狙い撃ちしてくる。せいぜい後ろにずり下がることしかできない。

「ムルザン、お前も早く援護しろよ！」

セイツトが怒鳴りながら前方に撃ちまくる。

こんなことなら、初めから通りの右端に行けばよかつたな。後ろからも銃弾が飛んできた。くそつ、取り囲まれたか。舗装が不十分な道路は石ころだらけで腹が痛い。

「ムルザン、向こうの敵は任せた、俺は後ろをやる」  
セイツトが応戦の方角を切り替える。

「うわあセイツト、向こうから五人も襲つてきた！」  
「ムルザン、何とか足止めしろ！」

そうだ、さつきの敵はどうした。一瞬そちらに目を向けると、降参しかけていた敵は味方の出現で気が大きくなり、自分の銃に這い寄っていく。仕方ない。俺は敵の背中に照準を合わせた。

その直後に、新兵が最後の迷いを断ち切る叫びとともに銃声が鳴り渡り、一人目の敵は使い古した銃の上に崩れ落ちた。

\*

俺たちは今、××村から撤退し、近隣にある○○村の警戒に当たつている。夜の闇は気味悪く、数時間後の夜明けが待ち遠しい。結局、××村を解放することはできなかつた。夜間だつたこと、敵が巧妙に逃げ隠れしたことから、早期の奪還は不可能と判断された。情報統制で詳しいことは分からぬが、他の部隊で戦死者が出たほか、民間人も巻き込まれて亡くなつたという。無

理に攻め込めば、犠牲者は増えるばかりだ。

「さつきのが、初めてでした」

ジエンギスが呟く。

「お前のおかげで、あの場を切り抜けられたのさ。ありがとよ」

俺は銃を左右に向けながら微笑む。部下が一人目の敵を射殺した後、俺たちは装甲車の援護を受けて敵を追い散らしたが、マクスイムとティムールが負傷して病院へ運ばれ、移動中の車内は一層重苦しい空間となつた。いつ自分の番が回つてくるだろう。皆、そのことで頭がいっぱいだった。

「自分、これから普通に暮らしていけるんでしょうか」

ジエンギスが台尻を肩に当て、銃を撃つ真似をしながら言う。

「大丈夫さ。考えるのは、戦争が終わつてからにすればいい。今は目の前のことだけに集中するんだ」

「はい……カトウコフ伍長は、いつも勇敢で落ち着いていらっしゃいますね。

自分はどうしても怖いので、早く伍長みたいな軍人になりたいです」

「はは、俺も最初は怖かったな。というか、今でも怖いよ。戦いが始まつた

ら、ただ銃を撃つことに必死なだけさ」

「そうですか……戦うことそれ自身にひたすら意識を向けるんですね」

「そういうことだな……始まる前はどうしたつて緊張するが、戦闘中に自分の恐れを見つめる余裕はないしな」

「なるほど、勉強になります。そういうえばカトウコフ伍長は、どちらで生まれたんですか？」

「ああ、俺はカザフで生まれてクルグズで育ったんだ。俺はロシア人だけど、クルグズが故郷さ。子ども時代は、夏休みに友だちと山に登るのが楽しみだったな」

「そうなんですか！　自分が生まれたのはオシユ市なんんですけど、親父が死んだあと弟が養蜂を」

銃声が闇を引き裂いた。

ジエンギスも俺も銃を構えなおす。見回りをしていたセイツトとジエンギスが、息を切らせて走ってきた。

「伍長、敵が攻めてきました！」

「何人だ？」

「暗くてよく分かりませんが、五十人くらいかと。続々と攻めてきます」

「ちよつと多いな、俺たちだけでは村を守り切れん……セイツト、マルザン、ジエンギス。バヤン軍曹に敵が攻めてきたと報告しろ。できれば、この路地の角で装甲車とともに待つていて欲しいと伝えてくれ。ひとまず村を脱出だ」

「伍長は？ 自分も残ります」

ジエンギスが意気込む。マルザンやセイツトも頷いた。

「いや、お前たちは先に逃げろ。俺も後から行く。ヴィクトル、時間稼ぎに手を貸してくれ」

「いいともさ。ナゴルノ・カラバフ以来の仲じやないか」

ヴィクトルは銃を軽く叩いた。

××村と違い、今俺たちがいるコゴイ通りは両側にポプラが並んでいる。ジエンギスたちが走り去るのを確認し、ヴィクトルと俺は左右に離れた。

「いいな、ヴィクトル、昔みたいに撤退するぞ」

「了解、”チエスの駒”だな。一分ずつ交代で撃とう。俺が最初に撃つから

一分経つたら替わってくれ

よしつ

俺はポプラを盾に銃を構えた。十数人の人影が氣勢を上げながらこちらへ歩いてくる。

「今だ」

ヴィクトルが引き金を引いた。たちまち二、三人の敵が倒れる。相手は慌てふためいて散らばり、躍起になつて撃つてきた。俺は一分数えながら後ろへ下がり、射撃を始める。ヴィクトルが後退していくのが目の端に映つた。交代で四、五回撃つただろうか。途中で弾倉を付け替えるときには、一人がボルソツク（揚げパン）と叫び、もう一人がミョツト（蜂蜜）と叫んだ。俺もヴィクトルも、子ども時代はこれが好物だった。揚げたてのボルソツクには、蜂蜜がよく合う。弾倉の交換が済んだら、チャイ（茶）と叫ぶのも十年前と同じだ。

「カトウコフ、あと数本でポプラが途切れるぞ」  
ヴィクトルが後ろを振り返つて叫ぶ。

「分かった、だいぶ距離が取れてきたし、並木が途切れたら一気に走るぞ」「了解っ」

突撃するのは簡単だが、撤退するのは難しくて怖いものだな。いよいよ脱出だ。最後のポプラの後ろに立ち、先頭の敵を撃つ。

「走れ！」

俺たちはダッシュした。弾丸が肩の上をよぎる。曲がり角から、自動車のエンジン音が聞こえる。音源にたどり着けるか否かで、俺たちの生死が決まるだろう。角を左に曲がると、装甲車が砲座を後ろに向けた態勢で待機していた。排気ガスの臭いが、イリーナの作るクレープのようにかぐわしい。

「伍長、早く！」

ジエンギスがハッチから手招きする。

俺たちが飛び込むのを確認し、バヤン軍曹が発車を命じた。

\*

「村を奪われたのは残念だが、勇敢に戦い、味方に損失を出さず撤退できたのはたいしたものだ。お前たちには三日間の休暇と褒美を与えるよう。何がい

いかね？」

ウルマツト大佐がヴィクトルと俺を交互に見る。八月二十四日に戦闘が始まつてから、一ヶ月が過ぎていた。

「はつ、ではウオトウカを一箱頂きたいです。今回の戦いでは、若い兵士たちも奮闘しておりますから」

俺は直立して答えた。

「よかろう。思う存分飲んで、しつかり羽を伸ばしてこい」

ウルマツト大佐は外出許可証にサインをして笑った。

\*

「ジエンギスも強くなつたな。訓練時代とは見違えるほどだ」

セイツトがウオトウカの瓶を片手に、顔を真っ赤にして言う。

「ほんと、ほんと、これでお前も一人前の兵士だな。近所の人たちも喜ぶだろう」

ムルザンがニコニコとカルバサ(サラミ風ソーセージ)をかじる。

「ありがとうございます！ まだまだ足を引っ張つてますが、先輩たちのよ

うになれるようこれからも頑張ります」

ジエンギスが照れくさそうにウオトウカを口に運ぶ。

「お前、長男だつてな。弟と違つて家を離れて自立しなけりやならんから、入隊前も仕事探しや一人暮らしで大変だつたろう。今までよく頑張つてきたな」

バヤン軍曹がジエンギスをねぎらう。ザキールも、ウオトウカの代わりに乳酸飲料を飲みながら静かに笑つてゐる。

「いえいえ、バヤン軍曹殿や先輩たちがいろいろ教えてくれたおかげですよ。そういえば軍曹殿、ティムール上等兵やマクスイム上等兵はどうしていますか？」

「ああ、ビシケクの病院に移つて少しづつ回復してきている。二人とも、自分たちだけ戦えなくてすまないと言つていたぞ」

「そうですか、それを聞いて安心しました」

青年兵士は数ヶ月ぶりに満面の笑みを浮かべた。

「戦争が終わつたら、早く可愛い嫁さんをもらつてお袋さんを安心させてや

れよ」

ヴィクトルが上機嫌でジエンギスの右肩を叩く。

「はい！ 仕事が軌道に乗つたら、親戚にいい人を紹介してもらつて、式の日程が決まつたら皆を呼びます」

ジエンギスがカルバサを手に皆を見回す。

「おいおい、自分も忘れずに呼んでくれよ。砲手として、陰ながら支えているんだから」

エディールが笑いながら言つた。ジャクプも煙草をふかしながらニヤリと笑う。

いくら飲んでも、流した血の赤さを忘ることはできない。だが、せめて休暇の前くらいは浴びるほど飲んで、生臭い記憶を遠ざけたかった。

\*

「ただいま、ユーリヤ。元気にしていたか？」

ドアを開けて顔をのぞかせた娘に声をかける。ユーリヤは目を丸くして台所へ駆けていった。

「ママ、知らないおじさんが来たよ！」

「なにいってるのよ、お父さんに決まつてるじゃない」

「ううん、違うよ。だつて髭がいっぱい生えてるもん」

「なるほど手を顔にやると、口も頸も髭で埋もれている。そういえば、一力

月髭を剃つていなかつた。俺は台所にいる妻に声をかける。

「イリーナ、湯を沸かしてくれないか。久しぶりに髭を剃りたい」

\*

十月になり、日本人たちは無事に解放され、国に帰つていつた。

「日本人の人たち、無事に帰れてよかつたな」

ムルザンが銃を点検しながら言う。

「そうだな、きっと今ごろは家族と一緒に味噌スープでも飲んでいるだろう」

セイットが弾倉に弾丸を詰める。

「いいなあ。俺たちも早く家に帰りたいよ」

「まあ、そなへやくなよ、ムルザン。もう少しで戦いは終わるはずさ」

俺は努めて明るく言つた。

I M Uは政府との交渉により、ひとまずクルグズを去つていつたが、翌年に再び攻めてきた。

3 バトケン 二〇〇〇

敵の車が一台、唸り声をあげて動き始めた。突つ込む気か。俺は連射に切り替え、前輪に狙いを定める。

その時、何かの影が俺の左手に飛びこんできた。咄嗟に銃を左に向けた瞬間、世界中のタイヤを破裂させたような音がした。影は両腕を広げたまま、ゆっくりと崩れ落ちる。

逆光で見えなかつた顔が地面に横たわり、あどけなさと精悍さのせめぎ合う目が閉ざされていく。

日に焼けた頬に、一筋の紅い川が流れ落ちた。

「ジエンギイイイイイイイス」

俺は敵の狙撃手を、それ以上に俺自身を決して赦さない。山上に向かつて

弾倉が空になるまで撃ち続けた。斜面を一丁の狙撃銃が転がり落ちてきた。戦友を失った装甲車が、悲しみと怒りの火を噴く。突進してきていた車は沈黙させられた。

\*

「兄のことを受け入れるまで、母も自分も、しばらく時間がかかると思います……」

ジエンギスの弟、サマツトは穏やかに、だがきっぱりと言った。

俺は黙礼し、ソファを立ち上がった。

ジエンギスの母アイーシヤさんは

「息子は……最後まで務めを全うしたんですね……」

と言葉を絞り出し、自室に籠つてしまつた。

全財産をはたいても、いや俺の命を投げ出しても、あいつを連れ戻すことはできない。窓から見える天山山脈よりも遙か遠い所へ行つてしまつた。パミールの高原を歩き回つても、イシクル湖の底を泳ぎ回つても、二度とあいつの纖細な笑顔を見ることはできないのだ。表通りが妙に眩しい。道を行き

交う人の足音も、自家製の牛乳を売り歩く老人の声も、馬車に乗つて市場に向かっていく一家の話し声も、すべてが路上の逃げ水だ。バス停のある大通りへ、どのように歩いて行つたのか思い出せない。俺の目は開いていながら、何も映らなくなつていた。

伍長！

誰かが心のなかで叫んだような気がした。

周りを見回すと、俺は道路の真ん中にいて、車が盛んに行き交つていた。慌てて反対側へ渡り切る。一步間違えれば自動車にひかれるところだつた。もしかしたら、今のはジエンギスだつたのかもしれない。あいつは三度も俺の命を救つてくれたんだ。

\*

ウルマツト大佐は窓辺に佇み、しばらく風に揺れる木々を眺めてから振り向いた。

「気持ちは察するよ。自分もアフガンで多くの部下を失った。だが、満期退役まで残りわずかだから、もう少し続けないか」

俺は床に目を落とす。

「十年間戦つてきましたが、だいぶ動きが鈍つてきております。自分の判断力や注意力が低下したことから、若い兵卒を犠牲にしてしまいました。これ以上軍隊に居ても、クルグズを守ることは難しいかと……」

「そうか……兵役が終了する前だと年金を受給することはできないが、それでもいいか？」

「はい」

「……分かった、上層部に打診してみよう」

「はっ、よろしくお願ひいたします」

俺は敬礼した。

\*

俺は今、飲料会社の運転手として働いている。仕事帰りに仲間と近くの小売店に寄り、店先のベンチでチーズやビールをつまむのが月一回の楽しみだ。

家に帰つたら、イリーナが夕食を用意して待つてくれている。ウォトウカで晩酌をする、これに勝る喜びはないな。

戦友たちは心から別れを惜しんでくれた。若い兵士たちを残して軍隊を去つたのは心苦しいが、もう限界だ。ティムールも戦争の後遺症で軍隊を離れ、今はパン屋で働いている。

国を守るために戦つたことは後悔していない。だが、戦争はいつだつて若者や女、子どもや老人を犠牲にする。それに、敵も俺たちと同じ人間だ。一時はジエンギスの敵討ちのつもりで戦つたが、戦争がもたらしたのは、未来を絶たれた者たちの墓標と、遺族たちの癒えない傷だけだった。もし、もう一度銃をとることがあるとすれば、ただ立場の弱い者たちを守るためだけに戦う。

今でも休憩時間や寝る前など、考える余裕が出てしまうと繰り返し思う。

あいつが駆けつけるのが、あと数秒遅ければ。あるいは敵が引金を引くのがあと数秒早かつたなら。だが、あいつが死をもつて与えてくれた生を一日たりとも無駄にしてはならない。だから、今日も俺は仕事に出かける。いつ

の日か、もう一度ジエンギスに会つて謝れる時がくるまで。

相良茂

（注） ウズベキスタン・イスラーム運動。ウズベキスタン政府の打倒や、中央アジアにおけるイスラーム法に基づいた国家の樹立を掲げて活動したテロ組織。一九九九年にフェルガナ盆地でクルグズ（キルギス）治安部隊と交戦し、日本人技師などを拉致した。

## あとがき

二〇一七年の夏、家族と共にクルグズ共和国に滞在していた時、父と私は偶然ロシア人の退役軍人Yさんと知り合い、様々な思い出を聴かせていました。Yさんはソ連時代末期から兵役につき、現在は軍人をやめて第二の人生を歩んでいます。私は挨拶程度のクルグズ語・ロシア語しか話せませんが、父に通訳してもらしながらお話をうかがい、その方の実直で温かい人柄を感じました。この作品は、Yさんの戦争体験に着想を得て書いたものです。

私は戦後日本に生まれた人間であり、兵役や従軍の経験はなく軍事にも疎いため、軍隊や戦闘のリアルな描写は苦手です。ですが、Yさん、そしてYさんをかばつて命を落とした一人の若者の『生きざま』を誰かに伝えたく小説を書きました。二〇一七年の日記に書きつけた、バトケン戦争に関するYさんの断片的な証言を当時の新聞記事と照合し、登場人物の人生を疑似体験しつつ歴史の一断面を描く試みは、ときに楽しく、ときには憂鬱な作業でした。

た。

快活なYさんが、戦争の話になると目に涙を浮かべて語られていたことを今でも思い出します。考えてみると、Yさんに限らず私たち人間は皆、生きることの大変さや病苦、過去の辛い記憶など、本人にしか分からぬ“なか”を抱えながら必死に生きているのかもしれません。人生という旅路を懸命に生きている皆さん、カトウコフたちの喜びや苦しみ、悲しみと決意を通して何らかの“生きる力”を見出してくだされば幸いです。ここまでお読みいただき、本当にありがとうございました。

なお、本作品は一部事実に基づいていますが、物語 자체はフィクションです。登場人物はすべて架空の人物であり、同名の実在する人物とは一切関係がありません。



なりやまづ

幾里

眩い光に満ちた舞臺から客席を見回す。座席ひとつひとつは視認することが出来ない程に小さく見えた。客席の照明は點いてゐないため、觀覽席は黒いヴエールを被せたやうに薄暗い。その光景は、無數の歯を生やした口がこちらに向かつて開いてゐるやうであつた。ピノッキオが鮫に呑まれる瞬間に抱いた頼り無さとは、このやうなものであつたのだらうか。

これ程廣い劇場で演奏するのは初めてであつた。一步進む度に、足音はあつといふ間に遠くへ飛んで行つてしまふ。かと思へば、すぐに傍へ返つて来る。足音は反響を繰り返すうちに磨かれて、光澤が出て、煌びやかになる。この國最大の劇場ともなると、ただの足音までも華やかに飾り立てられてしまふのか。見慣れた近所の風景でも、畫家が油繪にした途端に素晴らしい藝術作品になつてしまふやうな、さういつた感じがする。結局はどのやうに見せるか、それに盡きるといふことか。

視線を天井へ。

この世界に、太陽より明るいものが存在しても良いのであらうか。自然の

攝理に反してゐるのではないか。そのやうな問ひが浮かぶ程に、幾つもの照明が目を灼くやうに輝いてゐる。反射的に目を瞑ると、眼球にこびり付いた光の殘滓が見える。強い光に遮られ、どれほど目を細めても天井の最奥まで見通すことは出来なかつた。夜の繁華街で、ビルとビルとの間を覗き込んでゐる時のやうな氣分になつた。闇が、蠱惑するやうな眼差しをこちらに向けてくる。深淵もまた、こちらを覗き込んでゐるといふやつだ。

手にジツトリと汗が滲んだ。舞臺照明が放射する熱によるものではなく、恐怖心によつて分泌される冷たい汗であつた。明日、この舞臺では、たくさん人の音樂が演奏される。觀客席は、恐らく人で埋め盡くされる。

人で出來た檻。樂器は枷。衆人環視。娛樂。

●  
目抜通りには人が溢れてゐた。彼等の頭上では旗が穏やかな風に揺れてゐて、その上には透き通る青空があつた。雲と鳥とを我が身に泳がせた、人々を唆すやうに爽やかな青である。街中のスピーカーからは音樂が鳴り續けて

ゐた。勇ましく突き抜けるラッパの音。爽快なスネア。記念日に相應しい、鼓舞されるやうな音樂。

祝日に浮かれる群衆の中に、ギターを背負つて歩く男があつた。彼は吊り目であるために、仲間から狐と呼ばれてゐる。狐は音樂番組に出演するためニ、放送局に向かつてゐた。戰勝記念日恒例の特別番組であつた。この國には數少ない、娛樂を扱ふ番組であるといふこともあつて、毎年高い聽取率を記録してゐた。

彼のバンドは、今回が初めての出演である。音樂を生業とする者にとつて、この番組に出演することは「箔を付ける」ことを意味してゐた。實際、出演を祝ふ言葉が彼等の許に多數届いてゐた。それらの言葉を思ひ出す度に、狐は眉間に皺を刻み、顔を歪めた。その度に切長の目が威壓感を醸し出して、モーセが海を割るやうに群衆を真ツ二つに割く。彼はその眞中を進んだ。

彼のバンドは寡作で知られてゐた。それは樂曲の制作が遅いためではなく、×××によつて樂曲の發表が差し止められてしまつたためであつた。×××によれば、彼のバンドは頹廢的であつた。新しさと、それに付随する刺激的な

魅力を、そのやうに判断したのであらう。

彼等は楽曲を制作する度に、歌詞の改変や楽曲のトーンダウンを度々要求されてゐた。それはレコード會社が自主規制といふ形で行ふこともあれば、××××××から内閣といふ形で指示されることもあつた。修正に修正が加へられ、レコードにプレスされた楽曲は、原型を留めてゐないことも多かつた。不本意な修正を施したもののが自分達の作品として世に送り出されることに、それが商業的に一定の成功を収めてゐるといふ現實に、狐は薄ら寒い心地がする。自分の子供であると差し出された嬰兒が、全く自分と似てゐなかつたときのやうな。

立ち止まる。横断歩道の白線が覆ひ隠されるほどに通行人の多い交叉點の中央。人々の流れは大きく亂れ、舌打ちがあちらこちらから聞こえてくる。検閲を逃れる方法は、無い訳ではなかつた。ライブをやりたいなら、地下で秘密裏にやれば良い。楽曲を賣りたいなら海賊盤を賣れば良い。法律と、生活の安寧を考慮しなければ、検閲なんて簡単に逃れられる。自由なんて簡単に手に入る。現に、路地裏には無數の出版物や外國の音樂が溢れてゐるで

はないか。

結局、狐には勇氣が無いのだつた。

音楽で生計を立てるといふ夢を叶へてしまつて、それを手放すことが出来ない。その一方で、大人しく検閲に従つてゐることに情けなさや恥ずかしさを感じてゐる。

ひとは食はなければ生きて行けない。餌にありつくためには、ひとは國や組織に飼ひ慣らされる以外に手立てが無い。命じられたら××××××××になつて、遠い所で戦うこともする。彼等はこの不思議な構造を疑問にも思はず、終ひには疑間に思ふ人を氣違ひ扱ひする有様だ。

狐は、彼等に言はせれば氣違ひであつた。不幸なことに、彼はそれを自覺してゐた。何の疑問も持たずに盲従することが出来たら、それはどれほど素晴らしいことだらう。何の罪悪感もなく音楽を供出することが出来たら、彼は晴れやかな顔でギターを搔き鳴らしてゐたはずだ。丁度、今日のやうな青空の如く。

エレキギター、エレキベース、キーボード、ドラムセットがラジオブースに所狭しと並んでゐる。アンプリファーやドラムセットの傍にはマイクが設置されてゐて、床にはケーブルやシールドが縦横無盡に走つてゐる。

マイクは監視のために、ケーブルやシールドは捕縛のためにあるのではないかと感じられるほど、ブースには閉塞感が満ち満ちてゐる。その源泉はガラスの向かう、副調整室から睥睨する×××××——検閲に關する人々の事を彼等はさう呼んでゐた——であつた。狐が餘計な事を話したら、×××××は放送を即座に中斷させるだらう。そして、狐は處分を受ける。詳しい事は知らない。

通常、出演者は公開放送用の大きなスタジオで歌唱するのだが、彼等のバンドは小さなラジオブースで演奏することを希望した。修正を繰り返した、繼ぎ接ぎだらけの楽曲を演奏する事に對する恥ずかしさや後ろめたさがあつた。そのやうなものを抱へながら観客の前に出たくなかつた。

いつそ音量を最大にして、こいつの鼓膜を破裂させてやらうか。

ギターを握りながら、狐はそんなことを考へる。感情を解さないやうな、

なりやまず

×××××の冷たい眼光を無遠慮に浴びせられてゐると、沸々と怒りが湧いて来る。今回演奏する全ての楽曲は、自主規制や検閲によつて歌詞を書き換へたものや、知らない作詞家が書いた歌詞に曲を附けたものであつた。本来の、本當の、自分達の曲はひとつもなかつた。

何故？

自分達の音樂は頽廢的だから。

頽廢！

右手で六本の鉄線を亂暴にストロークする。

理解できないもの、あるひは目新しいものを排除しやうとするための論理は、結局のところ、道徳の問題に根據を求める。

右手で六本の鉄線を亂暴にストロークする。

道徳……。

右手で六本の鉄線を亂暴にストロークする。

辭典に載つてゐる言葉だけが正しく、それ以外の言葉を間違ひだと思ひ込んでしまう。

右 誰も、そんなことは考へない。だつて、面倒  
右手で六本の鉄線を亂暴にストロークする。  
では、誰がその辭書を作つたのであらうか?  
右手で六本の鉄線を亂暴にストロークする。  
何故、他の辭書を參照しないのであらうか?  
右手で六本の鉄線を亂暴にストロークする。

右手で六本の鉄線を亂暴にストロークする。では、誰がその辭書を作つたのであらうか？右手で六本の鉄線を亂暴にストロークする。何故、他の辭書を参照しないのであらうか？右手で六本の鉄線を亂暴にストロークする。誰も、そんなことは考へない。だつて、面倒臭いでせう？

幾里

手で六本の鉄線を

なりやまず

亂

暴

に

ス

ト

口

！

ク

す

る

！

「狐、音が滅茶苦茶だな」

巨漢が胴間聲で狐に尋ねた。彼は仲間から熊と呼ばれてゐた。

「弦を張り替へたばかりなんだ」

×××××は既に退室してをり、睥睨はもう無かつた。身體の内側に熱が

籠つたのか、狐は額に少し汗を搔いてゐた。

「弦を張り替へたんですか。張り切つてますね」

梟も會話に混ざる。瘦身の眼鏡を掛けた男である。

「そんなんぢやない」

實際は、鎧びるまで弦を放置してしまつてゐたのであつた。

「狐、機嫌悪いな。どうした」

「熊さん。また何かしたんですか」

「俺だつたか！」

「何もされてゐない」

「梟の野郎か」

「僕でしたか！」

「何もされてゐない」

「栗鼠のちんちくりんか」

栗鼠とは、ボーカルとベースを擔當してゐる女のことである。背が小さいために、さう呼ばれてゐた。

なりやまず

「しつこい。俺の機嫌は、今この瞬間に悪くなつた」

頭を搔き筆りながら、狐はブースから出て行つてしまつた。

「怒つちやいましたかね」

「何、煙草だろ」

「狐は群れを作らないつてことですか」

狐は苛立つてゐた。寝不足によるものでもあり、監視されてゐることによる精神的な息苦しさによるものでもあつた。そして、それを自身の内部で處理出来てゐないことに、狐は自己嫌悪した。

「今日の狐は様子がおはひい」

副調整室の隅で煙草を吸つてゐる狐の顔を、栗鼠が訝しげに覗き込んだ。アーモンドを口一杯に頬張つてゐる彼女の様子は栗鼠そのものであつた。

「いつも通りだ」

「とてもさうは見えない」

栗鼠は狐の肩に両手を置いて、問ひかける。

「今、何を考へてゐるの？」

「何も考へてない」

「狐のくせに、嘘が下手」

栗鼠は口の中で轉がすやうに笑つた。狐は決まりが悪いやうな顔をして答えた。

「昔のこと考へてゐた。小學校の時のことだ」

「随分と昔のことだね」

「音楽室にマンドリンがあつて、それをずっと弾いてゐた。同級生が休み時間に校庭へ飛び出して行くのを見て、ひどく氣分を悪くしてゐた頃の事だ」

「うん」

「新しい脚に慣れてきた頃だつた。それでも、走ることは出来ない。それに苛立つて、音楽室に行つたんだと思ふ。音楽を、運動と對極にあるものだと思つたんだな」

栗鼠は黙つて耳を傾けてゐる。

「偶然目に入つたのがマンドリンだつた、といふことだ。音楽といふものは、

なりやまず

もつと前向きな人間がやるものなのかもしれない

「それなら私、今日で脱退しなきやいけないな」

栗鼠は天井の照明を眩しさうに見た。

「私は満たされない奴らに向けて歌詞を書いてゐるつもりだ」

狐は俯いたまま黙つてしまふ。煙草の先から燃える音が聞こえるほど、場は静まる。

「××××××は、全員が満たされてゐることにしなければならないらしいけどね」

栗鼠は吐き捨てるやうに言つた。

「いつそ……」

「止めとけ」

狐は栗鼠の顔に煙を吹きかけると、そのまま副調整室を出て行つてしまつた。

廊下で壯年の男が狐に聲を掛けた。レコード會社の社員であつた。

「何してゐんですか？」

「様子見だ」

「子供ぢやないんですから、お守りは要らないですよ」

「あまり暴れるなよ。お前らはこれからだ。ここで摘まれるやうなことになつたら勿体無い」

「暴れたことなんて無いんですけどね」

「大人しくしておけといふことだ」

「いつも大人しいですよ」

ライブから數日経ち、レコーディングスタジオに全員が集まつてゐた。

狐は鞄から樂譜を取り出した。栗鼠も原稿用紙を取り出した。どちらにも修正の跡が切創と血飛沫のやうに飛び散つてゐた。曲に合ふ歌詞を、歌詞に合ふ曲を……といふやうに、曲や歌詞が修正される度に、兩者の擦り合はせを行はなければならなかつた。レコード會社との契約を履行するためには、深夜まで作業をする日が續いてゐた。

「やつてらんない！」

栗鼠は、歌うたひが出してはいけないやうな汚い聲で叫んだ。本來なら行はなくとも良い作業を、地雷原を進むやうな緊張を覚えながら、さらに期限を決められた状態で課せられることに、強い焦燥感を募らせてゐた。こんな事をやつてゐる暇があれば、もつと有意義な事が出来るはずなのだ。

検閲は明らかに厳しさを増してゐた。發賣されて數年経つた L P 盤にすら物言ひがついて、再販するために修正させられるといふ有様であつた。他のレコード會社も同じやうな状況にあるやうで、狐はこのやうな話を聞く度に、その背後にある苦惱や、殺された言葉達のことを考へずにはゐられなかつた。  
 ××××××の弛みない努力のお蔭で、新しく發賣される樂曲はどれも退屈であつた。同じやうな詞、同じやうな旋律、同じやうなリズム。歌手の技量によつて辛うじて保たれてゐる多様さも、さう長くは續かないだらうといふ雰圍氣があつた。そのうち、全て同じ人間が歌ふ、同じ詞の、同じ曲しか販賣されなくなるのではないか。さうなつたら、××××××××××××  
 ××××××××。××××、××××××××××。×××××××、××

×××××、××××××××××××××。××××××

スタジオの螢光燈は、壽命が盡きかかつてゐた。連日、深夜まで扱き使はれてゐるのだから當然である。その薄暗さの下で狐は煙草を吸ひ、熊は椅子に踏ん反り返つて座り、栗鼠はペンを指先でクルクル廻す。梟は机に突つ伏して寝てゐた。彼は梟と呼ばれてゐるくせに夜が苦手であつた。全員が疲れ切つてゐた。

「もう要らないんじやねえか。曲も歌詞も」

熊が大きく伸びをしながら言つた。彼は飲酒してゐた。

「どうした」

「曲と歌詞に問題が無ければ發賣出来るんだらう？」

「さうだと思ふが」

「曲も歌詞も無くしてしまおうや。さうすれば×××も文句は言へねえだらうさ」

熊は酔ひ過ぎたのか、顔を眞赤にして叫んだ。呂律は所々怪しかつた。  
「何を收録するの？」

なりやまず

「そんなの何でも良いだらう」

「そんなヘンテコな物、會社が賣つてくれない」

「ソノシートなら安くて済む。それに赤字になつても、それが帳消しになる位には俺たち稼いできただらう」

「まあ……」

「意見廣告だ。ダメと言はれたら自腹切つても良いさ」

狐と栗鼠にとつて、それはとても魅力的な提案であつた。二人とも、終はりの見えない修正にも、検閲の厳しさにも疲れ切つてゐた。音楽の根源的な部分に向き合ふ良い機会かもしけない。話し合ひは大いに盛り上がつた。日頃の鬱憤と共に、アイデアが無盡藏に湧き出てきた。レコードのジャケツト案から一曲の時間まで、纏めるのに骨が折れるほど多くの案が出た。三人全員が自棄になつてゐた。大きくなる三人の聲量に刺戟され、梟が目を覺ました。

「どうしたんですか。仲が良いですね」

三人は、次回作の案を梟に話した。梟は首を捻つて暫く考へた。

「ここまですれば、何かを感じてくれる人があるかもしませんね」  
彼等は當日のうちに錄音を始め、數日でデモテープを完成させた。  
表面を再生する。

收錄されてゐるのは無音である。音樂ではなかなか表現することが難しい  
はずの靜謐さを湛えてゐた。耳を澄ましてみると、集中力が研ぎ澄まされる  
のを感じた。

裏面を再生する。

收錄されてゐるのはノイズである。一言で表すなら無秩序であつた。街の  
あちこちで錄つた雜音に、樂器を滅茶苦茶に鳴らした音を重ねた。大變耳障  
りであつたが、偶然にも彼等の苛立ちや無力感と同期してゐるやうに感じら  
れた。

これは……

「傑作ですね！」

「良いね」

「でも、絶對賣れないな」

なりやまず

「ああ、それも含めて最高だ！」

早速デモテープを携へてレコード會社を訪ねた。デモテープを聞いた擔當者は大變驚いて、自分の耳が異常を來たしたのではないかと疑つた。

「これは何なのでですか」

「修正したもののです」

「これがですか」

「さうです」

「なるほど……」

「變ですか？」

別の社員が來て、また別な社員に判断を委ねる。あるひは再生機器を交換する。これが何度か繰り返された。誰も否定はしなかつた。

帰り際、壯年の社員が狐に聲を掛けた。彼は外出から戻つて來た様子であつた。

「狐、隈が酷いな。眠れて無いのか」

「さう見えますか。充分に寝てゐるはずなのですが」

「大變だと思ふが頑張つてくれよ。ここが正念場だ」「はあ」

壯年の社員は伏し目がちに、ここではない、どこか遠くを見た。

「俺が新入社員だつた頃も、こんな感じだつたんだ」

ああ、さうなのか。

俺らも暫く活動出來なくなるかも知れないな。

狐はそんなことを考へた。

後日、狐はレコード會社から、デモテープに收録されてゐた樂曲を發賣するといふ旨の連絡を受けた。

ソノシートは飛ぶやうに賣れた。レコード會社には在庫の問ひ合はせが殺到し、どこのレコード店にも行列が出來てゐた。賣り上げは様々な記録を大幅に更新し、從來のレコードとは一線を畫する賣れ行きを見せてゐた。

この社會現象と呼ぶべき動向に、彼等は氣味の悪さを感じてゐた。狐達にとって、このソノシートは抗議のために撒いたビラのやうなものであつた。

しかし、大衆がその意圖を汲んでゐるとは思へなかつた。では、何故人々は熱狂してゐるのだらう。

狐達はスタジオにゐた。全員が黙つてゐた。ぐやうに、丸く透明な塩化ビニールを眺めた。光に透かすと、刻まれた溝が纖細な陰翳を作り出してゐるのが見える。ソノシートが収納されてゐた眞白なジヤケットは、何の飾り氣も無く、購買意欲をまるで唆らない。何故これが賣れてゐるのか狐には理解出来ない。栗鼠にも、熊にも、梟にも理解出来ない。

レコード會社の社員がスタジオに入つてきた。若い、生眞面目さうな男であつた。

「また取材ですか？ こちらに話せる事は何も無いですよ」

本当に話せる事が何ひとつ存在しないため、ソノシートに關する取材は全て断つてゐた。

「いえ、取材ではなく、出演依頼が来てまして……」

劇場の観覧席は、一萬を超える人間で埋め盡くされてゐる。満員であつた。貴賓席には、政治家や貴族の人間が多數見受けられた。會場の警備は嚴重で、出入口だけではなく、舞臺袖にまで警察官が立つてゐた。

次に演奏するのは、現在記録的な人氣を博してゐるバンドである。曲目はもちろん、先日發賣されたソノシートに收録された二曲。ライブでは初めて披露されるといふことで、觀客の期待は高い。

突然點燈する舞臺照明。觀客の拍手と歓聲が瀑布のやうに降り注ぎ、會場が搖れる。舞臺上では四人の演奏者が、拍手が止むのを待つてゐる。彼等は俯いてゐるため、表情はわからない。靜寂が訪れ、觀客は恍惚とした表情でそれを聞く。今日の演奏は錄音され、それも賣れに賣れた。この曲達が多くの××を慰め、勇氣づける曲となるまで、さう時間は掛からなかつた。

## イニシエーション（あとがきにかえて）

人を殺しました。手で首を締め上げたら呆気なく死にました。この日を境に、私は大人になりました。

この儀式は魔法みたいに、子供を大人にするのです。指が柔らかい皮膚に埋まる感触や、骨の軋む音が、自分の中の子供の部分を急速に書き換えてゆきます。内側から改造されているような、奇妙な感覚でした。蛹の中にいる虫は、このような感覚を抱くのでしょうか。手の力を抜くと、肉塊が音を立てて地面に叩きつけられました。生命の面影が失せ、ただの物として地面に転がっているそれを見ると、体の内に充実感が芽生えるのを感じました。これが大人なつた合図なのだと確信しました。記念品として貰つた、肉塊から削いだ耳を眺めながら。

## 恍惚。

頬が熱を持つて、頭には溶けるような浮遊感がありました。お酒を飲んだ時みたいでした。周囲を見渡すと、同じく儀式を終えた新しい大人たちが瞳

に全能感を湛えて立っていました。彼らは全身に自信を纏い、人を動かすエネルギーに満ちた声になっていました。彼らは三々五々、肩で風を切るよう歩いてどこかへ行きました。

私はしばらくその場に留まつて、片付けられている死体を眺めていました。肉の塊となつた彼らは、台車に載せられてどこかへ運ばれてゆきます。儀式に用いられるのはハネ品なので、食卓に並ぶことはありません。ならば、それらはどこへ行くのだろう。そんなことを考えることはありません。空想なんて子供のすることです。現実に目を向けるのが大人です。私は運ばれてゆく死体を知覚しましたが、それ以上は何の感慨も抱きません。儀式を終えてから、指が肉に埋もれる感触や骨が軋む感触が手にこびりついて、私に悪夢を見せました。しかしその感触も、もう手には残つていませんし、悪夢を見るこどもないでしよう。

二十歳の人間は逞しく、立派な存在であるように、子供だった頃の私の目には見えていました。しかし、いざ自分が二十歳になつてみても、全然そんなことはありませんでした。貧弱な体に、締まつた喉から搾り出される通ら

ない声。儀式が終わるまで、皆は私のことを失敗作だと言つていました。

しかし私は大人です。儀式を経たのですから、誰が何と言おうと大人です。少年少女に威張り散らかし、飲酒、喫煙を味わい楽しむ権利があるのです。少年少女は私の姿を見て、大人への憧れを抱き、恐怖し、尊敬するでしょう。まずは、今まで私のことを散々嗤つてきた人々に、私が大人であることを証明してみせます。何故なら私は大人だからです。

あとがき



「閱覽注意」ロイコクロリデイウム

湖浜微

ロイコクロリディウムはカタツムリに寄生する線虫の一種だ。その虫は寄生したカタツムリの神経・視覚を乗っ取り、芋虫のような動きでカタツムリを鳥に食べさせる。そして鳥の体内で卵を産み、その糞をカタツムリが食べることで再び生命のサイクルを廻っていく。

そのロイコクロリディウムに似たものを、一部の私たちは持っているはずだ。

過去・劣等感・恥辱。

それらは私の胸の中で、蠢いている。

「今日のテスト難しかったね」

十分休憩のチャイムが鳴るや否や、千佳ちゃんが私の机へやつてきて言つた。

「うん、昨日徹夜で単語ゴリ暗記してなかつたら赤点なつてたかも」

「ねえねえ、大問三の英文読解できた?」後ろの席から奈留灯ちゃんも身を

なるひ

乗り出して会話に入る。

「あー、あれやばかったよね。解けてる自信ないなー」

「うちもやばい。ムニムニうちらのこと信用しすぎでは？ 進学クラスだからって」

ムニムニとは私たちのクラスの英語を担当する高校教師のあだ名だ。

「晴菜はどうだつた？ 全体的に」

奈留灯ちやんから話を振られて、えーとね、と私は応じる。

「大問三以外は事前に範囲出されてたから対策できて、私的には上手くいつたと思う。大問三は読む時間配分ミスつてぎりぎり解けたかな？ って感じ」「晴さん汽車の中ですつと英単語帳見てたからその辺は自信あつたでしょ」千佳ちやんが口元をニヤニヤと和らげながら問う。

「めつちやギリギリだつたよー。千佳も知つてるでしょ？ 私が短期記憶苦手なこと。てか暗記系全般的に弱いの」

「うつそだー。二年の時の日本史、学年二位でポテチもらつてたのに？」

「あれはちょっと得意分野だつたからだよ。社会系はなんか暗記できる。政

経以外は」

「政経は先生が悪いよー。授業のやり方、プリント先生が読み上げるだけだもん」

奈留灯ちやんが拗ねたように頬杖をつく。私は覚えている。奈留灯ちやんは政経のテストはほぼ満点だったことを。あの授業形態でよくあんないい点とれたなと思う。

「次何だつけ?」千佳ちやんが聞く。私は黒板の上に設置された時計を確認する。

「次確か千佳ちやんたちは数学。私は科学となんちやらのやつ」

「あー化学もどきのやつね。そつかー、晴菜は数学ないのかー。いいなあー」

千佳ちやんが羨ましそうにこつちを見てくる。その視線の意図は明白だ。「そんな目したつて数学代われませんからね。第一私数学めちやくちや苦手だし、千佳ちやんたちより下のクラスにいるんだから、代われたとしても解けるわけないよ」

「じょーだんだよつ。はあー頑張るかー。もうそろそろ時間だね、奈留灯ちや

ん行こー』

千佳ちゃんと奈留灯ちゃんは筆記用具といくつかプリントをもつて別の教室へ移動した。私もテストの教室に向かわないと。

ちらりとレースカーテン、網戸越しの外を見る。この街を囲む山々を見下ろすように、水色の空が雲をちりばめてそこにいた。

『誰も私のことなんて見てやしない』

私は父のお下がりでもらったノートパソコンに打ち込む。書いている場所はブログだ。

『みーんな勉強のことばつか。進学クラスなのはわかってるけど休み時間くらいもう少し楽しい話しようよ。ほんとつまんないクラスに入っちゃった(TAT)

それにクラスの担任(ネットに書き込んだらやばめなのでTって呼ぶね)も全然生徒のこと見てない。成績だけで評価してる。私が進学して公務員になりたいなんて言つてることが本当は嘘つてことに気づきやしない』

『もし私が「死にますー」なんて言つたら先生とかクラスメイトとかどう思うんだろ。「ヤメテー」「命を粗末にしないでー」とかかなｗうざｗｗ自殺なんて本人の自由意思で決めたことなのに、他人が口出せることじやないし』『全員どつかこつかウザいとこあるんだよね。ナルヒとかチカは私とよくつるんでくれてるけど、きつとどつかで私のこと見下してるよ。わかるもん。視線とか口調とか。私の方が勉強できるのに。あーウザい。あいつら一旦全員し』

「晴菜ー、ご飯よー」

母親の声にビクッと肩をすくませ、急いでパソコンを閉じた。心臓がバクバクする。スリープモードだからこの文章が消えることはない。夕食後にもう少し書いて投稿しよう。最後の一文は、止めよう。

私は収まりつつある心臓に手をやり、その心拍を抑えつけた。

ブログを書きだしたのは、自分の癖を治すためだつた。

家に帰りベッドに寝そべると、私はいつも脳内反省会議を開く。

あの時、こう言つたら、あの時こう行動していれば、あの時こう振舞つていたら……。

内心の私は絶えることなく「もしこうだつたら」の例を挙げ連ね、それが導き出す『最適解』の他人の反応を想像する。しかし所詮は想像・妄想の類。現実でそれらが行われることはないし、起こつたこともほんの一握りだ。無駄だとはわかっている。

ある時私はこの癖を母に吐露したことがあつた。当時は中学生で、語彙がまだまだ乏しかつたけれども、自分の知つてゐる言葉で一生懸命自分の内心を語つた。

そんなこと考えてたんだ。と母はぽつんと言つた。受け入れてくれたのだろうか？ 恐る恐る顔を上げて目についたのはどこか軽蔑を含んだ肉親の目だつた。

「そんなことを考えるくらいならノートとかパソコンに書きだしてみればいいじゃない。あ、そうだ。お父さんの仕事で使つてたお古のパソコンあるからそれあげるわ」

母はそう言い、私に一つのノートパソコンをくれた。それだけだった。  
初めて触るパソコンにしどろもどろしながらも、仕事帰りの父に日々少しずつ使い方を教えてもらい、ワープロソフトを使えるようになった。

その真っ白な画面に文字を打ち込むことを最初はためらった。私は白色が好きだ。小中学校の图画工作の時間、配られた白紙の画用紙を先生に急かされるまで何も描き込むことができなかつたくらいに。

自分で汚すのが怖いのだ。自分の汚い字で、センスのない配色で、己の思想で。

白色のままでいれば、可能性はいくらでも考えられて楽しい。あれを描いたらどうか、いや、これのほうが楽しそうだ、などと。

その現象が、パソコンを前にしたときに起こつた。

滑らかでなんの混じりけもない白いページに、あまり主張しない罫線が何本も整列している。

この白紙の完成作品を眺めていたい。正直そう思つた。

しかし、母に言わせてもらつたものなんだし、それを使わないでいると母

が知つたら悲しまれるのではないか、と恐れも心の中に滲んだ。そして一番、「この癖を直さなきや、あの目で見られないように」という気持ちが強かつた。

ええいままよと言葉を、キーボードに叩き込んだ。第一文に書かれた文字列は、

「こんな自分、いなくなればいいのに。」

だつた。書いた後に後悔して消した。しばらく熟考した末、

「今日は天気が良くて千佳ちゃんたちとの登下校がなんだか楽しかった」と書いた。

幼稚な文章だ。我ながら思う。しかし、万が一肉親に見られても何も問題にはならない。さつきの文章と比べて。

私は「今日あつた楽しかったこと」を書き連ねる日記を書くことにした。「今日は英語の小テストがあつた。事前に勉強していたおかげで十点中九点取れた。一つだけ問題を落としてしまつたのがもつたいない。次からは気をつけようと思う。」

「今日は奈留灯ちゃんが下校中に自転車ごと転んでしまった。大きい怪我がなくてよかったです。絆創膏を備えていて損はないなとこの時思つた。」

「待ちに待つた定期テストの日。大丈夫、私はやれる。先生も褒めてくれていたし、きっと、いや、必ず高得点を取る。」

「テスト最終日。集中力が切れかけていたが何とか乗り切つた。お母さんがお祝いに駅前のケーキ屋さんのモンブランを買ってきてくれていた。しかも夕食はしやぶしやぶ。めちやくちや嬉しい。」

それに、帰りに千佳ちゃん、奈留灯ちゃん、私の三人で打ち上げみたいな、自販機で買ったジュースで定期テスト終わりと、夏休みの始まりに乾杯して、帰りの汽車を待ちながら飲んだ。いつもより美味しく感じた。大変だつたけど結果オーライな日になつた！」

こんな感じで、日常で印象に残つたこと、楽しかつたことをパソコンに記していき、やがて内容は日記というより日々の愚痴を吐く行為となり、いつしかそれが日常の一部となつた。そして今ではブログに手を出している。見る人は少ないが、別に誰かに見せる目的で始めたんじゃない。ちょっと、興

味が湧いただけである。

初めてのブログ投稿では、思ったよりの閲覧数とコメントが来た。まあそれも二～三件のいいねとコメントではあったが、初めて私は「自分は誰かに見てもらっている」という安心感と嬉しさを得た。学校では得られない感覚にハマってしまった。

良いことを書くよりも、比較的愚痴やネガティブなことを綴ると閲覧数が増えた。みんな何かしらに苦しんでいて、私の気持ちに共感してくれているのだ。私の手は益々捲つた。

『自分が嫌い。何も周りへ気遣いのできない自分が嫌い。努力してるけど治せないのが嫌だ。それとも努力が足りないのかな。わかんない。そして私のこの努力を誰も褒めてくれないのが嫌い。嫌いなことばつか。ダメ人間なんか、私。

なんでみんなできることがお前には出来ないんだ。簡単にやつてのけてるのに、私は背一杯努力しないといけない。面倒くさく感じる。こんな自分を

日々同級生や教師に晒していると思うと恥ずかしい。消えてしまえって思う。  
これって変なこと?』

（変なことだよ。そこ治せつていうの）

心の中の自分が思う。いつもこうだ。考えていることと「内心の世間体」  
が喧嘩する。

こいつを消したくて、私は日々文字を綴る。

夏休みは、憂鬱だ。

規則正しく起きる必要がなくなつてしまつて、毎日やらなければいけない  
ことが少なくなつてしまつて、私は暇を持て余してしまう。

そして残り或る時間は、空回りの日記と、ベッドの上での自己内省に充て  
られる。

ぐるぐるぐるぐる。ぐるぐるぐるぐる。

私が悪い? ちゃんとできてた? 傷つけてない? 私は正しいことを出来  
ている?

過去の思い出を思い出して、拾い上げて、「どこかに人格の荒はないか」とまじまじ眺めつづける日々。さながら玉ねぎを調理するときのような、ポジティブな部分を引っ張りながら、芯の方にある暗い感情に点数をつけていく。親のお盆に付き合うか、友だちに遊びに誘われるか以外で、私に外へ出る機会はない。

ベッドに張り付いたカタツムリのように、動きがゆっくりとしてしまう。しかし頭は絶えず回り思考する。他の誰かが脳みそを操作しているみたいに。（違うでしょ、あなた自身がそう考えているんだ。他人のせいにするな）（もう止めよう、こんな自問自答。生産性がない）

身体を起して少しの間ぼーっと天井を眺める。そしてしばらくして机のパソコンに向かう。

サイトを開き、新しい白紙のページを作る。白色をまた、私で汚していく。「今日は」

タイブする手が止まる。今日は何したつけ。朝起きて、母さんに挨拶して歯を磨いて、顔を洗つて朝食を食べた。そしてその後テレビを見て——その

テレビの内容、何だつたつけ。

何かの番組が終わって、お昼を食べて私は自室に行つて、ベッドに寝つ転がつて午睡をしようとした。眼れずに、自問自答する羽目になつたといふわけだ。

今日の日記は見た番組でも書こうか。そうばんやりと思惑していると、断片的に今日見た（あるいは昨日？一昨日？）テレビのワンシーンが頭に流れれて来た。

『今日の十代の子供たちは、昔やこれまでに比べて段々と弱くなっています。表現がよくありませんでしたね。具体的には、体力面での低下、学習能力面での低下が見られます。これは昨今問題となつてているスマホ依存の影響で――』

辛口コメンテーターは確かその後その根拠データを催促されていた気がする。六十代に差し掛かりそうな、私たちから見て『ちょっと昔の人』。

昔の話を現代に持つてこないでほしい。時代にはそれぞれの教育方針みたいのが更新されて最適化していくんだから。そう聰明な奈留灯ちゃんな

ら言いそうだ。

「今日テレビで『現代っ子は昔より劣っている』って言われていた。本当にそうなのか？ 確かに昔より危機感や応用力とかには劣ってしまっているのかもしれない。でも現代の学生たちがそうなつたのは時代背景が絡んでいて、それ抜きにしては私たちの今の生活習慣や楽しい事、乗り越えなきやいけないことは生まれなかつたはずだ。弱いと言われている点については、学生の私たちが改善できる点には限りがあるし、先生や家族などの大人の協力が必要不可欠だと思つた。」

やけにいつもとは毛色の違う文章ができた。これが正しいことを言つているのかはわからないけども、自分の意見が吐きだせた気分で少しすつきりした。

（どうせ間違つてるよ）せせら笑いが聞こえてきそうだ。

（間違つてもいい。本当に危なかつたら、誰かがきつと正してくれる）

内心の私は少し黙つた後嘆息を漏らした。

（変なところで他人任せだよね、お前。普段は『自分一人でいい』って思つ

てるのに、都合のいい時だけ他人頼るとか、厚かましいよね  
その思念に至ったとき、心臓の鼓動が早まる。

（厚かましい？ 私が？ 普段の行いも厚かましかつた？）

「厚かましい」自分の態度を記憶を手繰つて探ると該当していそうなものが  
いくつも脳裏をよぎつていった。動悸がする。

（お前は厚かましい。もつと謙虚になれ。誰も必要なくなるくらいに。自分  
のことくらい自分でできるようになろ。）

自分のことってどこまでが自分のこと？身の回りの出来事？それとも他者  
に指摘されて褒められるくらい？ 程度がわからないよ。教えてよ。

（そんくらい自分で考えろよ。もう成人に近いんだよ？ みんな成長してる。  
いつまで子供のままでいるの？）

うねうねと暗い感情が胸の中心で蠢いて動悸を引き起こす。くそ、こいつ  
のせいで。私のせいで。いや、自業自得か。まともに振舞え自分。そうすれ  
ばまともでいられるはずだ。

私たちは時代のそれぞれに存在する事象を信仰して生きていく。アイドルだつたり、ゲームキャラクターだつたり、動画配信者だつたり、親だつたり、友達、先輩だつたり、夢だつたり、憎しみだつたり。

私は何だろう。これと言つて挙げる趣味も没頭しているものもない。唯一言えるのは、早くこの胸に燃える命の灯が消えてくれればいいと常日頃願つてのことくらいだ。

一つ望めば「もう一つ」。差し出す手は飽くなき欲を示す。

希望が欲しい。この単調で、どんどん狭くなるトンネルのような日々に、大きな光が欲しい。

私は何を望んでいるんだろう？ 現実はRPGのように主人公がたつた一人いるわけでもなく、人々から羨望されるヒーローになれる人はごく少数だ。そんな世界に私は一体何を――

「おーい晴さん？ 聞こえてるー？ 晴さんーん」

千佳ちゃんの声にハツとする。そしてファミレス店内のざわめきが一斉に

鼓膜へと戻ってきた。

「ぼーっとしてたけど大丈夫？」千佳ちゃんがテーブルに向かいからじつとこつちを見てきて、私は萎縮しまいとその目を見つめ笑顔で返した。

「ごめんごめん、ちょっとソシヤゲのこと考えちゃてた」

「えーゲーム？ 晴菜珍しいね、ゲームするの。何やつてるの？」

「えっと、前に奈留灯ちゃんが勧めてくれた音ゲー。結構中毒性あつてハマつちやつてるんだ」

「ほんと！？ エー！ 嬉しい！ ハマつてたんだつたら早くいってよー。フレンド申請するのに」隣に座る奈留灯ちゃんはおやつをもらつた犬のよう目に輝かせる。尻尾があつたら千切れるほど振つていそうなくらいだ。

「ごめんごめん、後でメッセージで送るね」

「ねーねー、私置いてきぼりなんですけどー」

千佳ちゃんがむすつとした表情で見る。千佳ちゃんはゲームは苦手。代わりに映画やドラマが好きで、家族ぐるみで旅行に行く話をよくしてくれる。

「今日は3人で楽しむ日でしょ、二人だけ盛り上がりっちゃってさ」

「千佳ごめんってばー。もう一つデザート頼んでいいよ、私おごるから」

「えマジ? やつたー! 奈留灯だーい好き!」さつきまでの不機嫌はどこへ

やら、千佳ちゃんはケロッソと元気になつた。

「それでさつきの続きをなんだけど」

「さつきって?」私はよくわからず千佳ちゃんに聞いた。

「ほんとに話聞いてなかつたの? しようがないなあ晴さんは」

「ファミレスでご飯食べた後どこ行くつて話だよ」奈留灯ちゃんが教えてくれる。

「あ、ああそだつた。ごめんごめん」

「それで二人は希望ある? あたしはショッピングモール行つて買い物したい! 三人で秋服見たいんだー」

「私もショッピングモールでいいかな。あそこに可愛い雑貨屋さんあつて、最近ゲームのコラボ商品入荷したらしくて」奈留灯ちゃんが言う。

「じゃ、晴さんは? どこ行きたい?」

「わ、私は……」

「正直どこでもいい。この時間もちょっと無駄に感じてしまう。

「私もショッピングモールがいいな」

「よしつ、じやあそこで決まりだね！」

二人は意気揚々とどこをまわるか話し出す。その光景を俯瞰した様子で眺めながら、私はストローからジュースを啜つた。

「ばいばーい」

「晴さんまたねー！ 後期に会おう」

二人が去つていくのを見送った後、私は詰めていた緊張をようやく解くことができた。

身体が重い。夏休み中、どこにも出かけなかつたせいか歩き回る体力が失われている気がした。

ぼーっと頭をもたげてアスファルトを見つめていると、またいつもの声がする。

（みんな楽しめてたかな？ お前だけ楽しんでなかつた？）  
（空気読めてない時あつたよね。マジで何なお前、小学生の頃から全然変わんない）（きつと二人とも呆れてるよ。悪口言つてるよ。言われて当然だけどな！）

（キモい、ウザい、イラつく。最悪の三コンボじやん）

私は家に向かつてダツと駆け出した。頭の中の声を置いていくように。  
見るな、誰も私を見るな、私は何もしてない、私は悪くない !!

体力が尽きて膝に手をついたとき、家の屏から茂つた植物の葉が目についた。具体的には、その葉に乗るグネグネと動くそれに。

カタツムリ、である。だが様子がおかしい。触角の部分が緑色で赤っぽい縞があつて通常よりはるかに肥大していた。そして一番気持ち悪いと思つたのが、その蠕動するような動き方だ。カタツムリは角をつつかない限りは動きが遅いと思つていたのだが、その緑の物体は早い動きで伸縮を繰り返していた。

気持ち悪いと思つているのに、私はその動きとフォルムに目が釘付けに

なつた。私は比較的怖いもの見たさな傾向がある。だからその様子のおかしいカタツムリにも、過度な嫌悪感を抱かず、むしろ好奇心に駆られた。

スマホで写真を撮り、画像検索する。名前はすぐに出てきた。『ロイコクロリディウム』。寄生虫らしい。

これはカタツムリ側には意識はあるんだろうか。痛みは？違和感は？いやそもそもカタツムリに自我があるのかどうか。私は自身で動かしているとは思えないその緑色に肥大化した触角を眺めて思つた。

↙↙閲覧注意！鍵垢 JK の赤裸々ブログの内容暴露 !! 「閲覧は自己責任で」↙

↙

風吹けば名無し：せん

>1 20XX/9/18 ID:dhshfhefkewnn

リンク <http://h.a.r.u.n.a@vulog.jp>.

>2 20XX/9/18 ID:vnffkdhrrhjpa  
わね。痛こって wwwwww

>3 20XX/9/18 ID:muuaihwwnqol  
学校のりふねややくわや懶惰ひてんじやん。これ特定出来るくね？でかそり  
の病み垢と回しやん

>4 20XX/9/18 ID:mznccbcsuywri

→http://mitakami.highschool.jp

>420XX/9/18 ID:mxnzbenvksl

>5 ktkr 敷屋の名前一 確定

>6 20XX/9/18 ID:kuhyftfwzrfv

あーあ、青春ライフ終わりやね☆かわいそーに。この年頃は承認欲求お化け

だから仕方ない。。。とは言えねえよなああああああああああああ

w w w w w

>7 20XX/9/18 ID:poiukhdkssjs  
なんか興奮してね!! キよね

>6 20XX/9/18 ID:aaddwwerdchvg

>8 ポリスメハノの人です

私は放心した状態でその画面を見た。ブログと連携していたSNSのアカウントを見てみると、通知が普段の十倍くらいの量に膨れ上がっていた。

沢山的好奇心が私を見て、私の中身を啄もうと躍起になつてているようになえた。つくづくいやらしい。いや、一番いやらしかったのは自分か。「誰にも見られなくてもいい」と思いながら「誰かに見つけてほしい。この気持ちを

わかつてほしい」と矛盾した思いを持つていた自分が一番。

彼等に咀嚼された私の承認欲求は、果たして彼らの腹の中で生きるのだろうか。いや、きっと一過性の娯楽に過ぎなくなるんだろう。それでいい。それでいいんだ。

(ようやく自分と折り合いをつけるんだね)

うん、そうするよ。もう疲れたしね。

(じやあ、ばいばい)

ばいばい。

## あとがき

二重人格とまではいかなくとも、私たちが日々葛藤することがらを寄生虫（ロイコクロリディウム）という虫に例えて書いてみました。「閲覧注意」という言葉をつけたのは、YouTubeなどにある閲覧注意の表示書きのある動画のよう、忌み嫌われる内心（愚痴や悪口）をコンテンツのように見るものを揶揄できるように書こうと思いました。うまく書けているかは少し不安ですが少しでも楽しんでいただけますと幸いです。

あとがき



プログラム・ブレイブ

菱川立花

♪

はじまり

「ああ、ついにこの日がやつてきた。待ちわびておりました。勇者の誕生を。この世界は魔王たちの手中に收められようとしています。どうかお助けください」

青年は不思議な夢を見た。誰かが自分に語りかけてくる夢。どんな内容の夢かは覚えていなかつたが、いつか自分が世界を救う、そんな夢だつた気がした。

はじまりの村

とある小さな村に魔王軍が押し寄せてきた。村の人々は抵抗する術もなく、魔王軍に服従するしかなかつた。そんな時、通りすがりの一人の勇敢な青年が剣を振るい、魔王軍の討伐に成功したのであつた。

「あなたはこの村を窮地から救つてくれた勇者です。ああ、本当に助かりま

した。そうだ。村の言い伝えにある勇者の剣を引き抜いてみてはくれませんか』

「村長！ あの剣は2000年もの間誰にも引き抜くことができなかつた剣です。また引き抜くことができなかつたらこの青年は自信を失つてしまふか」と

「いいや、彼は本物の勇者だ。わしにはわかる。さあさあ、一緒に来てください』

「青年、仮に勇者の剣を引き抜くことができなくとも、我々にとつては村を救つてくれた勇者に変わりありません。どうか村長の我儘をお許しください』 その後青年は村の人々に連れられ、祠に到着した。青年が一呼吸おいて勇者の剣に手を伸ばす。青年は勇者の剣を引き抜くことに成功した。

「おお！ やはりわしの目に狂いはなかつた！ ああ、なんとめでたいことか。勇者様の誕生だ』

「ああ、ついにこの日がやつてきた。待ちわびておりました。勇者の誕生を。この世界は魔王たちの手中に收められようとしています。どうかお助けくだ

さい」

青年は人々に勇者と讃えられ、他にも魔王軍に困っている町を救つてほしいと懇願された。勇者はその夜宴を楽しんだ。翌朝、村の鍛冶職人が勇者の剣を研ぎ終え、勇者は剣を受け取つた。勇者は皆に見送られ、次の町へと向かうのであつた。

## 冒險者が集う酒場

次に向かつた先の町は賑やかで、酒場にはパーティーを組むために冒險者たちが集まつていた。この町に来るまでの道中では強い魔物に遭遇することはなかつたが、この先本格的に魔王軍と魔王を討伐するとなれば一緒に闘う仲間が必要である。勇者は冒險者の中でもひと際目立つ魔法使いに魅かれた。青い髪に青い瞳。彼女はとても美しい容貌をしている。

「こんばんは。君は魔法使いかな？」君も魔王軍を討伐するためにここへ？」「こんばんは。ええと、そんなところです。でも一人で冒險をするのが怖くなつちやつて、だから、その、一緒に旅をしてくれる仲間を探しているんで

す

「そうだつたんだね。君の魔法使いレベルを聞いてもいい？」

「まだ見習い魔法使いですので、レベルは25です。あ、こんなに低かつたらすぐに死んじやいますよね」

見習いとは言つても魔法使いの彼女からあふれ出る魔力量は熟練の魔法使いにも匹敵する、と勇者は感じた。

「君の魔力量は見習いのレベルよりもはるかに多いものだ。魔法使いとしての素質があるんだろうね。僕もまだ勇者のレベルは26だ。小さな村に派遣された弱小な魔王軍を討伐したことしかない。君さえよければ共に魔王軍を討伐する旅に出よう」

「そんなあ。とんでもないです。あ、そうだ、あなたは恐らくですけど勇者様ですよね？　だってその剣は古代勇者の剣の証が刻まれていてるものですから」

話の途中で僧侶の冒険者が二人に話しかけてきた。

「話の途中にすみません。私はレベル30の僧侶です。私をあなた達の旅にお

供させてくれませんか。おや、魔法使いさん。あなたからはそのレベルには見合わない魔力量を感じます。まあ私も魔力量は負けていませんし回復魔法にはかなりの自信がありますが」

僧侶は金色の短髪で眼鏡をかけており、瞳の色は緑色。おまけに長身であり文字通り僧侶の役職が似合う真面目そうな風貌をしている。……僧侶に金色の髪の毛は似つかわしくないが。

「いいね！ とんとん拍子に話が進みすぎていて逆に心配だよ。もつと仲間集めは大変かと思つていたからね。これであと一人探せば安心して旅に出られるよ。戦士がいてくれたら心強いね」

「え、待つてくださいよう！ 私そんな強くないです！ 私は魔力量だけは25レベルでも400ありますがそれだけですか？」

「400ですか、この先が楽しみですね。勇者殿のレベルはざつと見積もつて50くらいですか？」

「あれ、僕、勇者って言つたかな？ レベルは26だよ。そんなに強く見えるなんて嬉しいな」

「勇者の剣を持つていらっしゃいますのですぐにわかります。あなたは一目置かれる存在ですよ。皆がこちらの様子を伺っています。それにしても26レベルでここまでの大柄があるのですね。是非私を連れて行つてください」「みんな勇者の剣だつてわかるんだね。すごいな」

勇者はこの世界に一人しか存在しない。勇者だけがこの世界を蝕む悪を一掃できると信じられていた。勇者のパーティに参加することは光栄なことだ。2000年もの間勇者は現れなかつたのだから。

「勇者様が私なんかとパーティ組んでくれるなんて嬉しい！」

魔法使いは無邪気な子どものようにはしゃいでみせた。その様子を見て僧侶は若干引いていた。

「……これから共に旅ができると思うとワクワクします。よろしくお願ひいたします」

「もうこの酒場にはパーティを組みたい冒険者がいないからここを離れるけど、もう一人パーティに欲しいよね。まあこのメンバーではそちらの町

までの道中困ることはなさそうだし、ひとまず3人で行動しようか。次の町にも酒場があるからそこでもう一人探そう

勇者たちは宿屋で一泊して物資を蓄えてから次の町へ向かった。

### 盟友との出会い

次の町に着いた時には、魔王軍はすでに討伐されていた。この町にはどうやら腕の立つ者がいるようだ。

「おや、もうすでに討伐されていましたか。どおりで途中に魔物がいなかつたわけです」

「うう、経験値が欲しかった……」

「魔物を一掃するほどの力を持つたパーティが存在するのでしょうか。でもとりあえずいろいろ話しかけましょよ！」

「そうだね、ついでに情報共有出来たらいいね。早速探してみよう」

勇者たちは町の人に声をかけて他の冒険者の情報を探つた。どうやらこの町を救つたのは盟友だという。盟友というのは勇者のバディのことであり、

勇者が現れるとき、盟友もまた現れるとされている。

「盟友がこの町にいるとは。うまくいきすぎている気がします。大丈夫ですかね」

「こうなる運命なんだ。遅かれ早かれね。あの家に住んでいると聞いたから早速訪ねてみよう」

勇者たちは早速盟友が住む家を訪ねた。

「こんにちは。僕は勇者。この二人はパーティーを組んでいる魔法使いと僧侶で……」

「おお勇者か！ よくきた！ 僕は盟友だ！」

「はや」

僧侶は盟友を見て若干引いている。

彼は盟友にふさわしい恵まれた体格であり、茶髪に茶色の瞳をしている。

「僕は魔王を討伐するため旅をしていてね、パーティーにあと一人強い冒険者を迎えていたんだ。盟友に会えるとは思つていなかつたけど、この出会いはきっと魔王を倒す兆しなんだ……」

勇者の話を遮り、盟友は興奮気味で話し始めた。

「勇者ってのは赤い目ン玉してるんだな。髪は俺とおんなじ茶色！ 俺はな、いつか現れる勇者をずっと待っていたんだ。この日のためにたくさん修行をした。まあ、これからよろしくな！」

盟友は勇者の手を力強く握った。勇者はあまりにも力強く手を握られたので思わず顔をしかめた。

「こんなにも早く話が進んでいいのでしょうか。シナリオ通りというか、なんというか」

「僧侶様つたら！ 冒険はサクサク進んだ方がいいじやないですか！ 盟友様に出会えたことですし、これから本格的な旅になるのですよ。もつと楽しそうにしたらしいのに」

「シナリオ通りに魔王を倒してこの世界に平和をもたらそう！ その後は洞窟探検でレアなお宝をジャンジヤン集めるんだ！」

「盟友がパーティに加わったことだしこの先はどんな険しい道のりになつても安心だね。ちなみにレベルはどのくらい？」

「俺は50レベルだ。そこそこだろ？」

「とても強いそうだからこの先は盟友殿に魔物を全部倒してもらいましょう」「ははっ、そうしてもらいたいくらいだね。でもね、誰か一人だけ突出していつもだめなんだよ、パーティは。僕たちも盟友に追いつけるくらいに鍛錬しようね」

「せつかくパーティが完成したんだ、今日明日くらいこの町でゆっくりしようぜ。俺が行きつけの店に連れて行つてやるよ！」

「わーい！ 何を買ってもらおうかなあ」

「無駄遣いはできませんよ。この先で何かとお金は入り用になりますし」

「うーん、防具の新調は欠かせないから、まずは防具屋に連れて行つてもらおうか」

「冒険を進めてたどり着いた町には良質な武器と防具が揃っていますよね」

「魔王城に近い町になつていくほど先が大変だからいいものが手に入るのですがないですか？ ねえ、盟友様？」

「ん？ まあそうかもな。あ、そうだ、俺の家を宿にしていいぞ！ 両親は

物心ついた時にはもういなかつたから今は一人でこの家に住んでいるんだ。  
好きに使つてくれ！ 今夜は宴を開こうか？」

「急に重い話をしないでください。反応に困りますよ」

「ありがとう。これから旅について話がしたいから助かるよ」

「僧侶よ、気にするな！」

「別に何も気にしていませんが」

勇者一行はすっかり打ち解けた様子であつた。盟友が育つたこの町で物資を補給したり宴を楽しんだりとあつという間に時間は過ぎていつた。

### 勇者一行の旅

各方面で悪さをする魔王軍を討伐するため、勇者一行の旅がようやく始まつた。勇者一行は次の町へと向かっていた。

「ねえ勇者さま、そろそろ休憩にしましようよ。足が痛いわ。もう歩けない」

「あと少しで次の目的地の城下町に到着だ。近くに宿屋もないしこのまま向

かうよ」

「足が痛いなら空を飛べばいいじゃないですか。魔法使いつて大体空を飛ぶものでしよう」

「僧侶様は本当に意地悪ですね！ 空なんか飛べるわけないでしょ」「残念な魔法使いですね」

「酷いです！ もうこの僧侶やだ！」

「足が痛いなら俺がおんぶしてやるよ！ さあこい！」

「嫌！ 絶対に嫌です！ 体中の骨を折られたら困ります」

「そのために僧侶がいるだろう！」

僧侶は聞こえないふりをした。

「ふふ、にぎやかだね。大変かもしれないが、もうひと踏ん張りだ。進むよ」

「ふええ。疲れたあ」

「空飛べないんだからおぶつてもらえばよかつたじやん」

「うつさい僧侶！ あんたもう黙つてろ！」

「まあまあ黙つてましたよ」

道中にはとてつもなく強い魔物がいた。魔王城が近づいている証拠でもある。魔王城の近くには魔王直属の魔物が猛威を振るつてているが、盟友がパーティに加わったことによつて強い魔物も時間をかけずに倒すことができた。

「結構手強い相手でしたね」

「眠らせる魔法するくない？　俺は魔法に耐性がないから何度も眠つてしまつたことか。」

「眠る度に僧侶様がボカスカ頭を殴つていて面白かつたです！」

「お前僧侶なんだから眠りを解く術を使つてくれよな。マジで頼む。頭痛いもん」

「あの程度の魔物が使う魔法ですよ。術なんて使わずとも殴れば目を覚します。しようもないことで魔力を消費したくありません」

「お前本当に僧侶なの？　俺は僧侶という存在についてとんでもない思い違いをしていたのだろうか」

皆があまりにも騒ぐので勇者は苦笑いして聞いていた。

「異常状態にならないようにするアイテムを購入しようか。次の町はそこそこ大きな城下町だ。欲しいアイテムを購入しようね」

「魔物を倒してお金も増えたことですし、色々買っちゃいましょう！」

「武器や衣類を新調したいですね。というか、なぜ強い魔物つて大体橋のど真ん中に鎮座しているのでしょうか。絶対にエンカウンタするようになつていて迷惑です」

「あー、確かにそうですね。試練つてことじやないですか？」

城下町にて

勇者一行はようやく次の目的地である城下町に到着した。町はたくさんの人で溢れかえっている。

「はあ、やつとついた。死ぬかと思つた」

「歩いたくらいで死にませんよ。安心してください」

「それでもこの町は兵士が少ないな。城下町なのに大丈夫か？」

「そうだね、いろいろ気になるし町の人に話を聞いてみようか」

勇者一行は町人に話しかけて様々な情報を入手した。ある町人と話していると、勇者一行とわかるや否や城に案内された。

「ああ、勇者様ご一行ですか！　ようやくいらしたのですね。待ちわびておりましたよ。さあさあ、城へ案内しますからついてきてください」

「あーあ、むやみやたらに話しかけるから……この前だつて話しかけたら魔物でしたってことがあつたばかりですよ」

皆はこうした僧侶らしからぬ発言にも慣れてきた。  
「城主に謁見する機会はそうそうないよ。話を聞いた後で武器とか防具を買に行こう」

「緊急事態かもしれないしな！　そう焦るなよ僧侶」

「私も新しいもの買いたかったな……いえ、先に城主の話を聞きましようね！」

勇者一行は町人に案内され応接間に着いた。王が玉座に腰を掛けている一方で後の姿は見えない。

「よくきた勇者殿。最近になつて魔王軍が城下町近辺を暴れはじめて手に負

えないのだ。妻が病に倒れてしまつたのだが、病に効く薬草が生えている高原はとにかく魔物が多くて倒しても倒しても湧き出でてくる。これが油田ならどれほどよかつたか。……まあ、我々だけで行くのは難しくてね。直近で魔王軍との戦いがあつたのだが、そこで多くの兵士が負傷してしまつた。……私たちではもはや魔王軍を倒すことができないのだ。そこで君たちに薬草を取つてきてもらいたい。そして魔王軍も倒してもらいたいのだ。できるな?』

勇者一行は依頼を受けることになつた。

「いつも一方的ですよね」

「回り道が多くて疲れるな。魔王をサクッと倒せたらいいのだが

「私も一回休憩したいです。あ、武器とか見に行きましょう!』

「そうだね、ここに来るまでも大変だつたから一日様子をみてもいいかな』

勇者一行は町で物資を蓄え、一日宿で休んだ後、薬草を採取しに向かつた。

「この高原には手強い魔物が多く潜んでいるね、ちようどいい鍛錬になる』

「魔物を倒すとお金がどこからともなく降つてきますしね』

「薬草取つてここら辺の魔物を狩りつくしたらしいんだろ?』

「そんな簡単に言わないでください……もう私結構魔力消費しました……」

「魔物が多いからね。この聖水で魔力を回復したらいい」

「おお！ 安物じゃないからぐんぐん効いてきました！ よーし、このまま皆殺しよ！」

「勇者殿、私にも聖水を使ってください。このままではみなさんの体力を回復できなくなります」

「魔力組はこまめに聖水を使わないと息切れするもんな。マジ感謝してるぜ二人とも」

勇者一行は薬草の採取に成功し、城下町周辺の魔物を狩りつくした。薬草をもつて王に報告へ行く。

「実に素晴らしい！ 君たちは本物の勇者一行だ。妻も容態が回復しつつある。本当にありがとう」

「これから道は険しいだろうが勇者一行なら切り開けるだろう。さあ、いくがよい」

「これから道は険しいだろうが勇者一行なら切り開けるだろう。さあ、いくがよい」

「？」

「これから道は険しいだろうが勇者一行なら切り開けるだろう。さあ、いくがよい」

「同じことしか言わないね。どうしたものか」

「よくわかりませんがもうここに用はないのですから次の町へ進みましょう」

「それもそうだけどよ、何かがおかしいような」

「町の人たちも様子がおかしいわ。みんな同じ言葉を繰り返してる」「うーん。魔王の仕業かな？ 早く支度を整えて魔王城へ出発しよう」

その日は宿屋でゆっくりと眠りについた。翌朝、勇者一行は魔王軍が暴れまわる地へと向かうのであった。

### 最終決戦

魔王城はもう目の前。ここに魔王がいると思うと勇者たちは少し足がすく

んだ。しかし魔王城は禍々しさがなくただの城下町にしか見えないのである。いつたいどういうことなのか。

「ここが魔王城？ なんか禍々しさがないというか、むしろ綺麗すぎて怖いです。僧侶様先行つてください」

「私が死んだらこのパーティーは壊滅しますよ。まあ、まやかしかもしれません。油断せずに進みましょう」

「俺が先頭いくぜ！ この雰囲気、俺たちを油断させる算段か。そう簡単にだまされないからな！」

「本当にここなのかな？ 慎重に進んでみるとしよう」

勇者一行は恐る恐る魔王城に足を踏み入れる。魔王城の中もおどろおどろしいどころか、明るくこちらを歓迎しているかのようで薄気味悪い。入つすぐの大広間には誰かいるようだ。

「ついにここまで来たか勇者よ。貴様らの冒険はここで終焉を迎える」（えつ！ なになに！ こんにちは！ ボクは魔王だよ！ ずっとここから出られなくて困っていたの！ もしかして助けにきてくれたのかな？ 暇す

ぎて掃除頑張っちゃった！　えへへ）

勇者一行は早速魔王に気づかれた。動搖を隠せない。

「貴様が魔王か……」

「ああ、そうだ。貴様ら全員皆殺しにしてくれるわ！」（うん！　ボクの名前  
は魔王だよ！　キミたちは？）

「僕たちは勇者一行だ。ここで決着をつける！」

「やれるものならやつてみろ。貴様らの冒険は無駄だたということに気づ  
かせてやる」（ふうん、勇者か。あ、キミたちは自由に話せるんだね！　ボク  
今まで近くの子に話しかけても反応がないか同じことしか喋らないから退屈  
だつたんだ。だから今すごく嬉しい！）

魔王は突然勇者一行を魔王城の最下層へと突き落とした。そこに待つてい  
たのは魔王の配下たちだ。配下たちは容赦なく襲い掛かってくる。

「くっそ！　こいつら全員倒さねえといけないのかよ！」

「こんな雑魚すぐに倒せますよね」

「ここはひとまず僕に任せて」

勇者の剣は魔物たちの体を引き裂く。魔物たちは苦しそうに消えてゆく。広範囲に攻撃ができる魔法使いは腕の見せ所である。

「ふん！ 私の魔法にかかればこんな魔物なんて瞬殺ですよ！ おや、この階にいる敵をすべて倒したら上の階にいけるみたいですね。ほら、上の階に続く階段が出てきましたよ！」

「不思議ですね。まどろっこしい。魔王が最初から私たちを殺せばいいのに」「魔王も内心焦っているんだ。配下が僕たちを倒せたら無駄な労力をかけずに済むしね。さあ、どんどん進んでいこう」

階層が上がる度に勇者一行のレベルも上がっていく。ここでの戦いは今までとは比にならないくらいに自己を成長させる。魔王の元へたどり着くころにはかなり仕上がっているだろう。

勇者一行はついに最高幹部を名乗る魔物と遭遇した。苦戦を強いられて皆、限界を迎えたようとしていた。

「上層に行くほど敵は強くなるけど、こちらから攻撃を仕掛けない限り猶予があるみたいだな」

「隙を与えるぞ攻撃してきたら私たちは全滅するというのに」

「……さあ、ラストスパートだ。ここで体力と魔力を回復して挑むよ」

「私頑張ります！ 単体でも火力だせるので！」

勇者一行はついに魔王の配下である魔物を全て倒した。全員レベルが70を超えていた。いよいよ魔王との最終決戦が始まる。

「貴様の配下は全て倒した。残るはお前だけだ、魔王！」

「我的配下は本当に使えない。嘆かわしいこと極まりない。仕方ない、我が直接この手で貴様らを地獄へ送ろう」（やつと会えたね！　どこに行つてたの？　心配したよ）

勇者一行は覚悟を決め、魔王に向かつていった。攻撃はかすりもしない。

「カスめ。そんな攻撃で我を倒せると思つているのか？」（何をするの？！　ね

え、なんで戦いを始めるの？）

「ふふ、魔法なら逃げられないわよ！　私の業火に焼かれて死んでください！」

「私は後方から回復をサポートします。皆さん目の前の敵だけに集中してくれ

ださい』

「はは、最初の攻撃なんてジャブだよ、俺の斬撃は重いだろう！ 苦しみ苦しめ！」

「魔王、容赦はしないよ」

「クッ、このくらい大したことは無い。どうせすぐに体力も魔力も尽きて皆死ぬだろう」（ボクは誰も殺していないよ。ずっとここに閉じ込められていて……）

勇者一行は休む暇なく攻撃をしかける。呼応するように魔王も反撃していく。

「クソッ、まともにくらった……」

盟友は気絶してしまった。

「せめて一撃でやられないようにしてくださいよ。復活させるにも時間がかかりますから。……アレくらつて死なないのも不思議ですね」

「ああああ！ お、助かった！ 僧侶ありがとう！」

「私、魔法を跳ね返すバリア張つてます！ 攻撃にだけ気を付けましょ

「このまま攻撃を続けるぞ！ 魔王だって限界はある！」

魔王は攻撃を繰り出すも勇者一行の攻撃に押されてしまう。

「こうなつたら奥の手を使うとするか。貴様らと違つて我はさらに強くなれるのだ」（どうして伝わらないんだろう）

魔王は覚醒して更なる威力を見せる。しかし、勇者一行も必殺技を繰り広げる。魔王は覚醒しても戦況はむしろ悪化するばかりであつた。

「窮地に立つたとき、魔王だけが強くなれると思うなよつ！ 僕たちはチムだ。お前は孤独だ！ これで終わりにしよう！」

勇者一行は力を合わせてどんな斬撃よりも重たい渾身の一撃を繰り出した。

「あああああ！ なぜ我が負けるのだ！ こんな弱い人間どもにしてやられた！ 許さん、許さんぞ！」（結局誰にもボクの声は届かないんだな。ああ、死ぬんだ。やつと解放される……ありがとう）

魔王は息絶える直前、その言葉とは裏腹に微笑んでいるかのように見えた。

「ついにやつたか……」

「やりました！ うわあああん、勝てましたああ！」

「良かった。誰一人として欠けずによくここまで頑張った！ みんなありがとう……」

「お疲れ様でした」

「残りの薬草と聖水を使って今まで立ち寄った町へ報告しに行こう」

こうして魔王は勇者一行によつて倒された。世界は再び平和が訪れ、勇者一行は宴を楽しんだ。楽しかつたこと、辛かつたこと、僧侶の爆弾発言、思い出を振り返りながら次へのステップを踏みだす準備をした。

### エンドコンテンツ

その後は洞窟に潜つてレアなアイテムを収集したり、町の人の困りごとを解決したり、技に磨きをかけたりとゆつたりした時間が過ぎていく。

「勇者さま、私この宝の地図に眠る黄金の指輪が欲しい！」

「この洞窟は地下15階まで続くのか。物資を蓄えて潜るとしよう」

「勇者殿は魔法使いに甘すぎます。この前だつて強欲な魔法使いが欲しかつた七色のペンダントを取りに行きました。疲れました。私が地下潜るメリッ

トありますか？」

「はははは！　言うようになつたな僧侶！　宝箱には何が眠つているかわからぬものが多いから、もしかしたらヒスイの杖が手に入るかも知れないと？」

「それ前も言つてましたが……結局ありませんでしたよね!!」

「君がここまで感情的になるなんてかわいいもんだな。よし、ヒスイの杖も探しに行こう、これからはみんなの欲しいアイテムを全部手に入れよう！」  
アイテム収集には多くの時間を費やした。洞窟には太古の魔物が潜んでいて冒険のしがいがあつた。魔王討伐の時に戻れたような気がした。レベルも最高まで上がり、無敵になつたようで誇らしい。

……次第にやることもなくなつた。魔王討伐という大義名分がなくなつてからはこの退屈さを他で凌いでいたからである。ここで本当に勇者一行の旅が終わりを迎えることになつた。

おわり

冒険の書を削除しますか？

はい

一度消去したセーブデータは元に戻りません。それでも本当に消去しますか？

はい

ただいまセーブデータを消去中です……電源を切らずにしばらくお待ちください……

完了しました。タイトル画面に戻ります。

「あれ……なんですかあ」

「そうか、遂に終わりを迎えるんだな」

「いつかこんな日が来るとは薄々わかつていたけど、いざ直面すると怖いね」「すぐにそんな感情もなくなりますよ。私たちはシナリオ通りにしか動けません」

「たとえシナリオ通りにしか動けないとわかつても、俺らはわかり合えたんだ。全部操作させていたわけじやない。俺らの旅は無駄ではなかつた。違うか？」

「本当に残酷だと思ひます。それでも充実した日々を過ごしたことは確かですし、無駄ではなかつたと言いたいですね」

勇者一行はこの世界がゲームの中であるということに気づいていた。話しかけても同じことしか言わない人、話しかけようとしても淡々と物語のように進んでいくこと、話す暇がない時、都合よく話が進むこと、違和感しかなかつた。それでも自分たちには意思があり、この四人とは意思疎通もできた。なんて残酷なのだろうと思うこともあつた。自由な旅とはほど遠くとも冒険は楽しかつた。

「思い返せば楽しいことばかりだ。素敵な冒険ができたのは君たちのおかげだ。本当にありがとう」

「いやです……私、もつとみんなと一緒に旅したかつたです……まだ手に入つてないものだつてあつたし」

「そのアイテムすらも私たちの意思で手に入れようとはしていなかつたのですよ。もう十分です」

「もつともだな。まあでも、楽しかつたよ。また会えたならその時はよろしくな」

「私たちの存在が消えても、今まで冒険したことは忘れません。私が覚えていますから安心してください。さようなら」

「僧侶様、私、僧侶様のことも忘れませんから！」

「真っ先に忘れてそうですが」

「俺は忘れない……気がする」

「どうかな」

「最期まで騒がしい人たちだ。名残惜しいけど、これで本当にさよならだ。みんなありがとう」

真っ白な光に包まれ、冒険の書は消えた。だが、新しいタイトル画面の向こうで、微かに彼らの笑い声が響いた気がした。

♪

新しく冒険をはじめ  
はじめから

冒険の書を作成します。  
した。

電源を切らずにしばらくお待ちください。完了しま

ゲームを開始します。

おわり

## あとがき

私は高頻度で悪夢を見ます。小学生の時に怖いもの見たさでやつたゲームがよく悪夢として登場するのです。今回書いた物語は小学校2年生の時にやつていたドラクエ9のデータを消してまた新しく冒険を始めたことを元に書いてみました。ドラクエ 자체にトラウマとなる要素は少ないので、データを消すときの嫌な音楽が耳にこびりついていて、悪夢のお供BGMとしてよく流れるのです。ついこの間、夢の中で魔物を倒していく実はゲームでした！残念！ という実に夢らしい夢を見ました。ゲームの登場人物に実は意思や意識があつたら面白そう♪ なんて気持ちで書いてみましたが、書き終えた後、ここから私たちを出してよ！ と登場人物たちが凄い形相で迫つてくる夢を見ました。夢で良かつた。

結局何が言いたいのかというと、物語を書くにあたつて、自分の経験談をベースに妄想を膨らませて書くのが精いっぱいだったということです。作家は凄いですね……

あとがき



私の幸せだととしても

小鳩

「幸せって、コスパいいなあ」

スーパーで購入した70円の幸せを口いっぱいに頬張りながら、夜に塗りつぶされていく空に向かつて呟く。

今年の春から高校生となつた私は今、同じく今年から解禁されたバイト先からの帰路に就いている。スーパーはバイト先と自宅との中間に位置しており、バイト終わりは必ずここに寄り道してから帰宅すると決めている。入店から最短距離で、いつものルートで一直線に向かつた私は、スイーツコーナーで立ち止まり、ノールックで商品を手に取る。その目的はいつも70円で売られているシュークリームやエクレアであり、それらを食べ歩きながら帰宅するというのが、高校生の私のマイブームなのだ。吹奏楽部を高校でも続けていため、バイトは部活のない週1回程度しか出来ていないが、体型維持のためにはむしろ都合がいい。思う存分、この甘い幸せをリスのように頬いっぱいに詰め込むことが出来る。幸せで満たされた口の中を、今度は75円の幸せで洗い流す。勢いよく流し込まれた若草色の液体と共に幸せは全身に巡り、体中のネジを解して周る。これがチルいというものか。合計約150円で得られ

るこの幸福感の素晴らしい胸を打たれる。

幸せとは、改めてコスパがいい。

「ただいまー」

「杏奈おかえり。危ないことなかつた?」

「何もないよ、心配し過ぎー」

「暗くなつてきたら気をつけて帰つてきなさいよ」

「んー」

いつものセリフをいつものセリフで返し、手洗いうがいを済ませる。お母さんは昔から帰るのが少しでも遅くなる度に何もなかつたか聞いてくる。心配つていうのはわかるけども、私だつてもう高校生だ。

「兄ちやんただいま」

「んー」

リビングのソファで寝転がつている兄にも一応声を掛けるが、毎回返事がそつけない。私は感情豊かなタイプだと思うが、兄は基本的に無感情で全然

似ていな。この家の子どもは、私とこの2歳年上の兄だけ。  
「別にテレビ見てないでしょ。チャンネル変えるよー」

あまり興味のない報道系の番組が垂れ流しになつていたため、チャンネルを変えようとリモコンの照準を合わせたとき、ニュース速報が流れた。最近テレビによく出ていた若手の女優さんが自宅マンションで、意識不明で倒れているのが発見されたという内容だつた。前の朝ドラで一気に有名になつたんだつけ。お母さんがいつも観ていた気がする。

「おかーさん。前の朝ドラに出てたあの人、倒れてたつてー」

「えー？ 嘘！ 昨日もバラエティに出てたわよ。自宅でつて、自殺かしら」

まだ自宅に1人で倒れていたというだけで、原因が何なのかは定かではないが、このような報道があると、私もまず真っ先に自殺という2文字が脳裏に浮かぶ。小さい頃と比べて、芸能人のこういうニュースが多くなつた気がする。

「どうして1回しかない自分の人生を自分で終わらせちやう人がいるんだろう。しかもこんなに成功してて顔も可愛い女優さんだよ？ 私がこの人なら

生きているだけで幸せって感じだなあ

「幸せの感じ方なんて人それぞれ違えんだよ」

私の少し大きな独り言に對して、兄が珍しく反応した。いつもは無視しかしないのに。しかも、どこか不快感をこちらにぶつけるような言い方だつた。兄ちゃん、あの女優さんのこと好きだつたつけ？

「前の朝ドラに出てた女優さん、亡くなつたんだつてねー」

「ね、信じられない！ あんなに可愛いのに」

「だよねー！ 私もそう思つてたんだけどさー、兄ちゃんに感じ方は人それぞれだーとか言われちやつた」

「お兄さん大人だねえ」

小学校からの親友である玲奈といつものように一緒に登校しながら、昨日の出来事と軽い愚痴をぶつけ合う。私たちはお互いを慰め合つて毎日を生きている。

「玲奈今日部活あるー？」

私の幸せだとしても

「うん。休みは明後日かなあ」

「んー、残念。せつかくの完全オフなのにー」

「完全オフって、これから学校じやん……」

今日は部活が休みな上に、バイトも入っていない特別な日だ。休みが嘔み合うのならば、久しぶりに2人で遊びたいと考えていたが、この子もバドミントン部の練習があるから仕方がない。

「じやあ今日は授業終わったら、さっさと家に帰ってまつたりしようかなー」「そうしなよ。部活もやつてバイトもやつてつて働き過ぎ。過労死するよ」「大袈裟過ぎー。あ、でも今日つて宿題出る授業の日だから、図書室で終わらせてから帰ろ」

「いや、真面目過ぎ」

毎週恒例の宿題は、今週も変わらず提示された。たまには例外があつてもいいんですよ。下校時刻となり、まだ数回しか利用したことがない図書室に向かつた。宿題を図書室でやつてしまいたい理由は、雑念を消して早く片付

けたいからという気持ちも当然あるが、外の人通りが落ち着くまで待ちたいからという気持ちが大きい。バイトの帰り道を食べ歩きながらゆつくり帰るのが好きなことも同じ理由。日中の騒がしさが消えた、ゆつたりとした時間の流れる、穏やかで私を優しく包みこんでくれるような空間。そういうふた環境に対しても幸せを感じる。

宿題は簡単だが、調べる部分が面倒で45分程度掛かる。まだ騒がしさを感じる外の世界から隔離された図書室の中で、リラックスしながら作業を進めた。

「ふう、じや、帰りますかー」

猫のように身体を伸ばし、ゆつくりと荷物を片付け図書室の扉を開けると、蔓延していた騒がしさは完全に消え去り、私の大好きなゆつたり空間がいい感じに広がっていた。これよ、これ。

「せつかくだから、いつもとは違うルートで帰ろうかなー

私たちの登下校ルートは固定されていて、今朝も同じ道を歩いてきた。で

も今日は違う。特別だ。こっちのルートを選ばないのは、いつものルートよりも待ち時間の長い信号が多いから。特に3番目の信号は、タイミング悪く止まつてしまふと、カツープラーメンを作つて食べ始められてしまいそうなくらい待たされる。

朝から長時間机に拘束され、退屈していた体を再び伸ばしながら、いつもとは違う道へと歩みを進める。入学してすぐに1回だけ通つて見切りを付けたため、信号が長いことと道なりに進むと家に着くということ以外、あまり印象がない。すぐ横に出ればいつもの見慣れた道が現れるというのに、目の前に広がる新鮮さを不思議に思った。

早速、1つ目の信号に捕まつた。3つ目よりはマシだが、ここもまあまあ長い。というか赤信号つて全部長い。多分、実際よりも長く感じるようになっているのだろう。世界で最も暇なこの時間は、スマホを眺めてやり過ごす。ようやく1つ目の信号が青になつた。だが、悲しいことに次の信号でも当然のように私の進行が妨げられる。連続してある信号つて、1回止められるとそのあとも全部止められるよね。敵と戦わないと進めないゲームみたい。

## 信号クエスト。

新鮮な町並みをキヨロキヨロ眺めて時間を潰していると、奥に待ち構える例の3つ目のバスに挑もうとする見慣れた勇者の後ろ姿が目に入った。兄ちやんだ。最近身長がお父さんを追い抜いた、見慣れた後ろ姿。しかし、横に連れている仲間の後ろ姿には全く見覚えがなかつた。

「え、女の子？」

遠くからでもわかる長い黒髪が、風に靡いて踊つていた。それに丈の長いスカートを履いている。私と同じ格好。間違いない。隣にいるのは女の子だ。

「マジかよ兄ちやん。え、もしかして彼女？　え？」

生まれてからずつと同じ屋根の下で共に暮らしてきたが、色恋沙汰の噂なんて聞いたことがない。本人もそんな話を嬉々として身内に話すタイプでは絶対にないし、私たちもそういったデリケートな部分については弁えるタイプの家族だった。それが放つておけばいつの間に学校から2人きりで帰る仲に？　いや、そもそも同性の友達と帰つているところすら見たことがない。しかし、下校開始時間から30分以上経過したこの人通りの少なくなつたタイ

私の幸せだとしても

ミングを狙つて帰る。これは完全に人目を気にしているじゃないか。何だよ兄ちゃん、やることやつてんじやん。

脳内で情報処理に励んでいると、目の前の信号は既に青になるどころか、もう次の点滅を開始していた。やはり信号に奪われている時間は思っているよりも短いらしい。

「ヤバツ」

渡れないとまた地獄の赤信号ループ攻撃に嵌められてしまうため、急発進で慌てて渡る。先に進んでいた2人は、もう前のバスを撃破したようで、とつくに姿が消えていた。

2つ目の信号をギリギリで渡つたおかげか、その後は信号をスムーズに進み、気が付くといつもの道と合流し、見慣れた町並みが姿を現した。いつもと違うルートは、やはり新鮮で楽しかった。というか、いつもの道に飽きてしまっていたのかもしれない。明日玲奈に言つて、しばらくメインルートを変更しようかな。でもやっぱり、いつもの見慣れた道も落ち着く。実家のよ

うな安心感というやつだ。私は今、その実家を目指して歩いているのだが。適當なことを考へてゐるうちに自宅に到着した。

だが、ここからが本番だ。家には先に帰つた兄がいるだろう。まあ、気まずい。先ほどの光景を目にしていなければ、お互いがお互いをほほいないものとして扱うため全く問題がなかつたのだが、目にしてしまつたのだからどうしようもない。私の宿題がもう少し遅く終わつていれば、くそッ。自分の出来のよさを呪う。見なかつたことにしておけばいいだけじやん、と思う人がいるかもしれないが、わざとらしさが態度に出てしまつて怖い。いや、出る。私の素直さを舐めないで欲しい。でも、玄関前でこう立ち往生していられるわけにもいかない。今日はせつかくのオフ。何のために宿題を学校で終わらせたんだ。このドス黒い雨雲を切り抜けければ、虹色のひとときがそこには待つてゐる。よし、いくぞ！ 覚悟を決めろ！ 深呼吸をしてー、突撃！

ガチヤツガチヤガチヤ。身体ごと押した覚悟が、開かずの扉によつて物理的に跳ね返され、軽くよろけた。1人で何をやつてゐるんだ私は。家にはまだ誰も帰つて來ていなかつた。さつき信号を進んだあと姿が見えなくなつた

のはそういうことか。あの2人はどこかでルートを外れたんだ。クーツ、兄ちゃん、放課後デートとは手慣れているね。まあ、私としても2人きりの気まずい空間を回避出来たのでラッキーだ。玄関横の箱に隠された合鍵を取り出し、改めて家の中に突撃した。

「あ」

暗闇の中で目が覚めた。どうやら寝落ちしてしまったらしい。外はまだ紅葉色に明るいが、部屋の中は夜に呑まれ始めていた。眠るつもりはなかったのに。私は私が思っている以上に疲れているのかもしれない。せっかくの自由時間を睡眠に献上してしまったのは不本意だが、思ったよりもスッキリとした寝起きだったためヨシとした。

「小腹すいたー」

本能のままに生きる私は、部屋の電気を点けるとキッチンにおやつの探索に向かう。お母さんはもうパートから帰つて来ていた。

「おはよう。珍しく寝てたわね」

「んー。何かお菓子ない？」

「そこらへんの段ボールに入ってるわよ。でももうすぐご飯だからね」

中くらいの欠伸を挟みながら、段ボールの調査を開始し、無事好きなチョコのお菓子を発掘した。いちごミルク味。これも私の幸せの1つだ。値段は、確か170円くらい。コップに牛乳を注ぎ、陽気に鼻歌を歌いながら部屋に持ち込むためにリビングを経由した。

「あツ」

いつも通り、ソファに寝転がる人物が目に映り込んだ瞬間、寝起きの幸せで空っぽな頭の中に放課後に見た全てが濁流のように流れ込んできた。同時に押し出されるように、少しだけ大きな声が口から飛び出てしまつた。少しだけ。普段はそつけない兄もその声に驚いた様子で、こちらをガン見する妹に視線を移す。

「何」

「…いや何でも」

一瞬思考が停止してしまったが、上手く切り返せた。早く部屋に逃げよう。  
「いや、絶対何かあるだろ。気になるから言え」

やつぱり駄目だった。私の自慢の素直さは、客観的に見ても凄いらしい。  
ここまで来たならもうやるしかない。まあ、今はキツチンにお母さんもいる  
し、2人きりの気まずさはない。むしろ、この無感情な兄を動搖させられる  
チャンスだ。そう、ピンチはチャンス。私の手には、兄の心臓が握られている  
る。

「兄ちゃん、今日女の子と一緒に帰つてたでしょー。私、見ちやつたよ」

お母さんにも聞こえてしまう声で叫ぶのは流石に可哀想なので、兄にだけ  
聞こえる声で言つてあげた。優しくて気遣いも出来る優秀な妹です。ついに  
言つてしまつたドキドキと、兄の赤面を押めるワクワクとでソワソワしてい  
たが、返ってきた回答と表情は、その期待をいとも簡単に裏切つた。

「ああ、見たんだ。帰つてるけど」

え、何その余裕そうな反応は。無感情にも程があるでしょ。「帰つてる」つ  
てことは、今回だけじやないってことだよね。へー。私の方が動搖してしま

う。

「ふ、ふーん、凄いね。いつの間に彼女なんて出来てたの。意外とちゃんと高校生満喫してんじやん」

「いや、彼女じやねえよ」

いやいや。確かに2人並んで歩いている後ろ姿を見ただけだけど、あの時間帯に2人きりで帰るのはそれなりの関係なんじやないんですか？

「じやあ何で時間ずらして2人きりで帰ってるの」

「……」

一呼吸置いて、求めていたものとは違う答えが返ってきた。

「あいつ、いじめられてるんだよ」

話が予想外な上に重く、ますます私の方が動搖してしまった。

「いじめられてるって、兄ちゃんのクラスで？ 部活で先輩ともよく話すけど、いじめどころか、悪い噂なんてほとんど聞いたこともないよ」

「俺も最近まで知らなかつたけど、一部の奴らが上手いことやつてんだよ。

いじめっていうかクラスの中心的な奴らに利用されるみたいな。俺はそれも立派ないじめだと思つてるけど。問題にするのは本人が訴えてもなかなか難しいと思う」

机にデカデカと落書きされるような、よくイメージされる派手なものではなく、ネチネチした陰湿なものということだ。

「で、そうだとして何での子と2人きりで帰つてるの。言つちや悪いけど、解決出来ないならあんまり関わるのは止めておいた方がいいんじゃない？」よくないことを言つた自覚はあるが、それよりも兄が事態に巻き込まれないかが心配だ。

「前に放課後1人で泣いてるところをたまたま見かけたんだよ。普段は大人しいんだけど、明らかに様子がおかしくて、いじめもその時に知つた。相談出来る相手もいないっぽいし、流石にそこから放つてはおけなくなつて、ああいう放課後に付き添つて話を聞いてやつてるだけ」

兄はこんな感じで正義感は強い節がある。自分の見解に従つて行動を決めるため、そのようなことをしても不思議ではなかつた。

「さつき帰るのが遅かったのってあの子の家まで送つてあげてたから？」  
「そう。親は仕事で遅くまで帰つてこないらしい」

「気まずい流れから吹つ切れて、兄への軽い彼女イジリをしようとしていたのに、別のベクトルで気まずくなつてしまつた。しかし、兄の行動が尊敬に値することは確かだつた。」

「わかつた、話してくれてありがとう。ハイ、これ報酬」

普段なら私が独り占めするところだが、手にしていたお菓子の袋を開け、兄に数粒差し出した。

「これ、甘過ぎて嫌いなんだよな」

「じゃああげねーよ！」

私に対してはいつもの捻くれた兄だつた。

「玲奈今日部活はー？」

「ごめん、休みは明日だ」

「くッ、なかなか噛み合わないなー」

あの日から何週間か経ち、また久しぶりのオフの日がやつてきた。だが、またしてもバド部との予定は合わず、赤信号の前で一緒に肩を落とす。教科書がパンパンに詰まつた、ただでさえ重いリュックが、丸岩のように重く感じる。

「夏休みは絶対遊ぼうね？」

「当たり前。これまでの鬱憤を全てぶつけていこう」

本当に彼女とは気が合う。かけがえのない存在だ。こうして自分のことを慕ってくれる大親友が存在するということも、当たり前ではない大切な幸せの1つだと常々思う。

今日も親友と帰られないのなら、やることは決まつていた。下校時刻を迎え、騒がしい外の世界を、再び図書室でやり過ごす。今日は宿題がないため、カウンター横にあるおすすめ小説コーナーの中から、最も魅力的に映つたものを1冊手に取る。最近は忙しくて読んでいる暇がなかつたが、元々読書は嫌いではない。外が落ち着くまで小説を読みながらじっくり待つ時間は、と

ても有意義で幸せだった。

30分ほど時間を潰し、今度最後まで必ず読むことを誓い小説を戻すと、落ち着いてきた外の世界に飛び出す。兄たちがどこで時間を潰しているのかはわからぬが、あと数分待てば現れるだろう。だが、この出待ちを見られる訳にはいかない。見られたら絶対に嫌な顔と嫌味をぶつけられる。兄からの罵倒には慣れているものの、そういう言葉をぶつけられるのやはり好きではないし不幸せだ。校門が見える位置の校舎の陰に隠れ、彼らを待ち伏せた。

10分ほどが経過し、そもそも彼らが今日一緒に帰る保証はどこにもないことに気付き、とても無駄なことをしているかもしれないという不安に駆られてきたその時、現れた。いつもの見慣れた細長い背中と、見慣れない小さな背中。特に何か話している様子はないが、2人並んでゆっくりと歩いていく。校門を出て、ある程度の距離が空いたことを確認して、私も校門を出た。

現れてくれたまではよかつたものの、特段そこから尾行する以外にはやることがない。願わくは手とか繋いでくれないと期待していたが、そんな様子は一切なく、ただ歩く2人の後ろを観察した。電柱に身を隠し、気分は

探偵だ。この距離なら気付かれる心配はまあなうだろう。このまま静かに2人を見守り、別れたらさっさと帰ろう。

探偵には到底相応しくない甘い考へで尾行を続けていると、2つ目の信号待ち中のこちらに向けられていた小さな背中が、小動物のような素早い動きでいきなり身体をこちらに反転させてきた。綺麗に流れる長い黒髪がフワツと舞い上がり、その隙間から覗かれた瞳とこちらの瞳が、この距離でも吸い込まれるようにして合つたのがわかつた。一瞬の出来事だつたため全く反応が出来ず、むしろ電柱から顔だけを出し、絶賛ストーカー中ですと言わんばかりの最もまずいタイミングで見られた。向こうからしたら完全に不審者だ。

突然の不自然な動きに反応し、兄もこちらを振り返る素振りを見せた。ああ、終わつた。咄嗟に電柱に全身を隠したが、今までの経験から何かもう無理な気がするので、降参の意を示すため両手を挙げて大人しく全身を晒した。気分はこれから捕まる指名手配犯だ。既にこちらを振り返つていた兄の表情を見ると、ゴキブリを発見したかのようなどても嫌な顔をしていた。ですよね。

もうこうなつてしまつては仕方ないので近づいてみる。吹つ切れた私は強い。ついに対峙した彼女はやはり小さかつた。兄と同じクラスということでおれよりも2歳年上であることは確実だが、私の方が一回り大きい。遠くからでも艶のあつた長い黒髪はやはり綺麗に手入れされていて、黒い真珠のような大きな黒目がこちらを見つめていた。一言で言えば美人だった。見つかってからずつと無言で彼女の整つた容姿をまじまじと観察していたため、得体の知れないものを見るような不安げな表情で私を見ている。

「オイ

「あ

明らかに怒りの感情を含んだ低声が鼓膜に響き、観察が強制終了させられ現実に引き戻される。ああ、将来は可愛い女の子を一生観察するだけの仕事に就きたい。

「……あの」

困惑した様子の彼女が恐る恐る口を開いた。そんなに怖がらなくとも私は無害だし無力ですよ。

私の幸せだとしても

「俺の妹だよ。今年入学してきた」

「ああ、言つてた」

少し安心したような暖かい空気を肌で感じた。本当に心から怯えられていたのだと胸が痛くなつた。

「ごめんね、前に帰つてのところ見られてたっぽくて、軽く事情説明した」

「そうなんだ。うん、大丈夫」

「オイ、誰にも言つてないよな？」

「ハイ、一切」

口調がえらい違ひだ。基本的に感情表現が乏しいものの、私への嫌悪感は毎回の会話からひしひしと伝わつてくる。

「マジで何しに来たんだよ」

「マジで何しに来たんだろう」

客観的に言わると、部活もバイトもない貴重な時間をストーカー行為に捧げていることがあまりにも虚しく思えてきた。もう逃げよう。

「邪魔してゴメン。先帰るよ。」

そう言つて背中を向けたものの、せつかく目の前に立てたのだから、何か爪痕を残したいような気がしてきたり。

「あ、そうだ。これどうぞ」

リュックを地面に落とすように置くと、ポケットから不思議な道具を取り出すロボットのように、ガサゴソと小分けのチョコが入った袋を取り出し、彼女の小さな手に何粒か差し出した。

「え、悪いよ」

「チョコを食べると幸せになりますから。私からの幸せのお裾分けです」

去り際の決め台詞を残し、街の平和を守るヒーローの如く颯爽と立ち去るうと背中を向けたとき、彼女のクスッと笑う声が聞こえた。目の前の信号は青だつた。赤だつたらあまりにも格好がつかないところだつたから助かつた。立ち回りは大失敗だつたが、最後が締まるとき分だけはいい。初めて人の声で幸せな気持ちになつたかも。明後日からの夏休みにも全力で挑めそうだ。

私の人生史上初めて開催された高校生での夏休みは、一言で言うと忙し

かつた。スケジュールの多半は部活で、後半に行われた合宿での濃密な4日間によつて、私の演奏スキルは確実にレベルアップした。バイトも部活の休みの合間を縫つて続け、私は馬車馬のように働いた。勿論、遊びにも全力で取り組み、玲奈とは夏祭りに行つて花火を見たり、ショッピングをしたり、やりたかつたことをたくさんやつた。もう一言追加するならば、最高に幸せな夏休みだつた。

夏休み明けの学校は、中学校の頃と変わらず憂鬱だつたが、親友と励まし合つたり、チヨコを補給したりして何とか乗り越えていつた。学校のある生活に再び慣れるために耐える日々を送つていると、また部活もバイトもない日がやつてきたが、またしてもバド部は夜まで練習があるらしかつた。私たちは、織姫と彦星のような存在なのかもしれない。

このまま帰つてダラダラ過ごしても微妙な1日で終わつてしまふ気がして、再び図書室で時間を潰し、あの子を見に行くことにした。夏休み中、当然私は会つていな。校舎の陰に隠れ、前回の反省点を振り返つてみると、見慣れた背中が1人で校舎から飛び出し、特に誰かを待つ様子もなくスタスタと

校門から飛び出していった。歩くの速ツ。とりあえず兄だけの尾行を開始することにした。

どこかで合流するつもりなのかと考えていたが、この歩くスピードはそうではないらしい。競歩の練習でもしているのかと思うほどグングンと進んでおり、間違いなく全力で帰宅している。あの子今日休んだのかな？ 1つ目と2つ目の信号は簡単に突破されていたが、3つ目の信号がほぼジャストタイミングで兄を止めた。このまま帰る気なら待った意味がないし、もう話しかけちゃおう。

「オツス兄ちゃん」

「……いたの」

いや反応薄ツ。夏休み明けで病んじやつたのかな？ 学校嫌いそうだもん

ね。

「また2人で帰つて来るのかと思つてたのに、あの子今日は休みだつたの？ 夏休みでお預け食らつてたのに残念だつたね？ つてまさか夏休み中こつそり会つたりしてないよね」

「ずっと来てない」

「へ？」

またまた予想外の返答に足を掬われ、気の抜けた声が漏れた。

「え、ずっとって、夏休み明けから？ 一度も？」

「夏休み明けから。一度も」

夏休み明けの不登校。珍しい話ではないが、私の身近で起こるのは初めてだ。そしてあの子の境遇、そうなつてしまつた確かな原因を知つてゐる。空気が急に重くなり、呼吸がしづらい。

「兄ちゃんあの子の家知つてるんだよね。様子見に行かなくていいの？」

「もう触れるなつてことなんだろ」

「……」

息をするのを忘れ、抜けた氣も無くなるほど啞然としてしまつた。まだ夏の暑さの残る光に照らされて淡々と状況を話す兄の顔は、氷のようにならへて冷え切つていた。声色からは怯えたような、でも、どこか怒りも含まれているような感情を感じた。自分自身に対するものだろう。このままで兄までおか

しくなつてしまいそうで、体の芯から寒気が押し寄せてきた。

「兄ちゃん、ちょっと寄り道して帰ろ」

最後に兄と2人きりで出掛けたのがいつだつたか、私から誘つたことに対する素直に応じてくれたのがいつだつたか、どちらも記憶にないが、今日の兄は恐ろしく素直だつた。向かつた先はバイト終わりに行くいつものスーパー。でも、学校終わりに行くのは初めてだ。例のスイーツコーナーに一直線に向かい、いつものエクレアと緑茶のボトルを2つずつ購入した。兄に何かを奢ることも初めてかもしれない。兄はされるがまま、その様子を静かに眺めるだけだつた。

「ハイ、食べて。口いっぱいに」

「何の真似だよ」

「いいから」

ようやく軽く口答えしてきた兄を制圧し、袋を豪快に開けてエクレアを押し付けると同時に、自分も豪快にエクレアに齧り付く。いつもの幸せが口いつ

私の幸せだとしても

ぱいに広がる。あまりに勢いのよい妹の奇行に圧倒された様子の兄だったが、しばらくして同じように齧りついた。

「どう」

「どうつて、まあ美味いけど」

「幸せだよね。この甘さ」

「……」

いつもなら「甘いものは好きじゃない」と口答えをしてきそうなところだが、何かを考えている様子で、静かにそれを頬張つていた。

「これは私が発見した幸せだけど、今日だけは特別に共有してあげるよ

「本当に何の真似だよ」

「あの時、あの子にチョコをあげたのも同じ理由。私の周りには小さかつたり大きかつたり色んな幸せが溢れてる。それを実感出来れば、辛いことがあっても毎日頑張つて明日を生きていける。この幸せをあの子とも共有したかった」

「前にも言つたけど、幸せの感じ方なんて人それぞれだ。それがお前の幸せ

だとしても、全員の幸せにはなり得ないし、それがその人の幸せだったとしても、それで辛いことを上書き出来るのは限らない」

もう一度否定された私の単純な考え方。甘い幸せを口いっぱいに詰め込んでいたはずなのに、酸っぱさや辛さも感じる気がする。でも、言われていることはよく理解出来た。私はあの子が体験した理不尽を体験していないし、あの子がどれだけ辛かつたのかもわからない。そんな私がこんな単純な思考であの子の幸せを語るのはあまりにも失礼だと理解している。だけど、何度も見た2人横並びになつて帰る姿、あの去り際の笑い声が、この考えを必ずしも間違いではないと言つてはいるような気がした。

「その人が何をどれだけ幸せに感じるかって、その人の人生に依るんだと思う。あの子は人間関係が崩されちゃつて、でも、頼れる人もいなくて辛さの絶頂にいたところに、兄ちゃんがきたんでしょ。放課後だけでも寄り添つてくれた兄ちゃんっていう頼れる人間の登場は、あの子がその時何よりも求めていた幸せだったと思う。辛さを全部上書きすることは出来ないかもしけないけど、和らげるることは絶対に出来ていた。2人の熱狂的ストーカーである

私が保証する。だから、こうなつてしまつた自分を責めないで欲しいし、まだ救うことを諦めないで欲しい」

兄の全身にこびり付いていた冷たさが、バリバリと音を立てて剥がれ始めた気がした。すかさず、私が一番好きな緑茶のペットボトルを差し出した。エクレアも丁度食べ終わつたみたいだ。

「ハイこれ飲んで。グイッと」

やはり、兄は甘いものが得意ではないのだろう。渡されたペットボトルを受け取つてすぐに蓋を開けると、そのまま逆さまに傾けて一気に飲み干した。

「ワッハハ、凄」

「これ、気持ちいいな」

口の中に溜まつていた幸せを体中に行き渡らせると同時に、剥がれた冷たさは洗い流され、兄の中で何か決心が固まつたような気がした。

私が知つている幸せも大好きだが、誰かに与えて一緒に楽しむ幸せも、やっぱりいいなと思つた。



## あとがき

このお話の主人公である杏奈の思考の7割は、作者の思考のトレースです。冒頭の「幸せって、コスパいいなあ」というセリフも、作者が杏奈と全く同じ状況で頭に思い浮かんだセリフであり、いつか使えるかもとメモに残していました。物語の根幹です。このセリフ、結構気に入っています。

残りの3割は宿題に対する計画性といった要領のよいところ等。作者は全くの真逆で、創作の締め切りも一切守れず、他のゼミメンバーの皆様には多大なるご迷惑をお掛けしました。改めてここに謝罪します。

ということで、一言で言うならば、杏奈は作者から作者の嫌いなところを抜き取つた理想の存在です。生まれ変わつたらこの子みたいに生きたい。

話は変わりますが、このお話のテーマは「幸せの価値観」です。こんなお粗末な短編1つで語られるものじゃないよ、といった感じですが、せつかくこんな貴重な機会を頂いているのですから、最も書きたいテーマで執筆すべ

きだと思いました。

杏奈のような日常の些細な事にも幸せを感じる人もいれば、置かれている様々な要因によって現状に幸せを見出せない人も当然います。誰が何にどれだけの幸せを感じるかという問題は、その人の人生が鏡のように反映される非常に面白いものだと執筆していく気が付きました。

作中のあの子が今後幸せになることが出来るのかは兄次第ですが、杏奈はこれからもどんな些細なことに対しても幸せを感じて生きていくでしょう。幸せの価値観の違いは、あって当然であり、価値観が違うからといって批判を受けたり、矯正したりするべきものでは決してありませんが、どんな些細な事にも幸せを感じることが出来る人生は、とても素敵な人生だなと思います。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。

## 編集後記

ここまでお読みいただき、誠にありがとうございます。十二色の小説は、お楽しみいただけたでしょうか。

私は本誌に携わるまで、編集は全くの未経験でした。一昨年度の先輩方が残してくれた引き継ぎ資料を見ながら、小説本文のフォーマットは作成したものの、そこからファイル同士をどのように連結すればよいか、そもそも何をどう編集すればよいのか皆目見当がつきません。知らず知らずのうちに一人で抱え込み、インターネットの大海上で途方に暮れてしまいました。

しかし、ゼミのグループラインで救難信号を発したところ、湖浜微さんがファイルをワード・ソフトの状態で結合し、それからPDF化することを教えてくれました。また、永田志生さんが「とびら」と本文および「あとがき」をあらかじめ結合したファイルをすばやく作成し、皆が使えるように投稿してくれました（本誌のデータを印刷会社へ入稿してくれたのも同氏です）。さらに、書籍のレイアウトに詳しい幾里さんが、永田さんの作成したファイル

をアレンジし、本誌の編集をリードしてくれたのです。私が編集後記を書いている間、幾里さんは整った奥付を苦吟して作成してくれました。

作品の執筆・校正にあたっては、ゼミのメンバーを三チームに分け、それぞれのチームで旭さん、シロガネさん、幾里さんに副編集長をお願いしました。三人は多忙な中、メンバーの小説を読み、各作品の表現を磨き上げていきました。シロガネさんはゼミの掲示板上で作者たちに改善ポイントを伝え、幾里さんはメンバーの作品を印刷してアドバイスを記入し皆に配布するなど、それぞれ熱心に推敲してくれました。また、旭さんには推敲のほか、毎月の文芸誌編集会議の議事録をとつていただき、我々メンバーが今後の予定などを忘れないよう周知していただきました。

永田さんと七輝さんは、三年次に田中綾ゼミが創始した図書館サークル「おおぐま座」でサークル・メンバー募集のポスターを作成するなど、デザインの才能があります。お二人の表紙デザインと装幀により、『あやいと』は素敵なお冊となりました。願わくは、本誌が皆様の本棚を長く彩る小さな宝箱となりますように。

この度の活動により、編集長といえども決して独りで本を作っているのではなく、多くの人と助け合つて一冊の本を世に出しているのだと実感しました。これは、二年間のゼミにおいても同様でした。ゼミ活動は、一人ひとりのゼミ生が、それぞれの持ち味をときには意識的に、ときには無意識のうちに發揮しつつ相互補完的に動かしていくもののですね。ゼミ長・編集長と名乗りながら私が貢献したことは少なく、田中先生とゼミ生の一人ひとりがいてくれたからこそ、二年間のゼミ活動、そして『あやいと』第五号の制作を完走することができました。田中先生のゼミで学んだ時間は、一生の宝です。二年間、懇切丁寧に私たちをご指導くださった田中先生、本当にありがとうございました。頼りないゼミ長・編集長の私を様々な形で見守り、励まし、文芸誌の作品を懸命に書き上げてくれたゼミ生の皆さん、本当にありがとうございました。

田中先生とゼミ生の皆、ちょ古つ都製本工房の皆様、そして本誌に関わつてくださつたすべての方がいなければ、この本は完成していませんでした。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

北海学園大学人文学部一部 田中綾ゼミ  
『あやいと』第五号 ゼミ長兼編集長  
四年 寺田 望

## ごあいさつ

まず何より、酷暑の中、創作に打ち込んでくれたゼミ生のみなさん、ご苦労さまでした。そして読者の方々には、ご高覧に感謝申し上げます。

このゼミでは二〇一〇年度から文芸誌を発行し、この号は記念すべき通巻一五冊目にあたります。代々、ゼミ誌を公共図書館等にも謹呈しております。個人情報考慮して、今回もペンネームによる作品発表としました。とはいっても、ペンネームを使用することで、よりいきいきとした表現や、今日的なストーリーも可能になつたようにも思われます。

三年次のゼミでは、堺憲一編『明日はきっと お仕事小説アンソロジー』所収の小説精読を通して、各自の労働観を深め、ディスカッションも行いました。ほか、近年の「お仕事小説」を読み深めたほか、新聞記事を題材とした短編小説の創作にも挑戦しました。そういう取り組みが、今回の小説にも活かされているように感じます。

今回の『あやいと』第五号は、比較的ゆつたりとしたペースで進められま

したので、校正責任者の副編集長たちは無理ないスケジュールで担当できたと思います。それらを統括する編集長は、作業量が多くてたいへんでしたが、持ち前の責任感とリーダーシップを存分に發揮してくれました。どうもありがとうございました。早くから表紙デザインに取り組んでくれた担当メンバーにも感謝しています。会計・監査、謹呈作業など一連の作業の経験を、今後の社会人生活動にも役立ててください。

数年後、あらためてこの『あやいと』をひもとき、学生時代の感性の「いと」をそつと引っ張り出してくれると嬉しいです。

一人ひとりの個性と、第五号の刊行を祝して、乾杯。

演習担当教員 田中 綾

# あやいと 第五号

---

2026年1月13日 発行

発行者 北海学園大学人文学部I部田中綾ゼミ

発行所 田中綾ゼミ『あやいと』編集部

〒062-8605

北海道札幌市豊平区旭町4丁目 1-40

北海学園大学人文学部日本文化学科

田中綾研究室内

E-mail : aya-ta@hgu.jp

装幀 永田志生

印刷所 ちょ古つ都製本工房

---

落丁・乱丁及びご意見・ご感想等ございましたら、お手数ですが書簡

もしくは E-mail にてご連絡ください。